資料・調査

上海市民の旅行消費と ライフスタイルに関する調査報告

東　美晴

目　次

Ⅰ　調査の概要
1．調査概要
1-1　概要
1-2　調査の目的
1-3　調査の枠組み
1-4　調査の方法
2．調査対象者の属性
2-1　性別および年齢
2-2　学歴
2-3　収入
Ⅱ．単純集計および属性分析結果
1．昨年の旅行状況
1-1　昨年の旅行回数
1-2　この１年に行った場所
2．現状における観光旅行の実態
2-1　旅行時期
2-2　旅行の目的
2-3　旅行期間
2-4　旅行の形態
2-5　行き先
3．現在の旅行観
3-1　国内旅行先に関する希望
3-2　海外旅行について
3-3　旅行観
4．日常のレジャー・レクリエーション
4-1　全体傾向
4-2　外食
4-3　買い物
4-4　日常生活の娯楽
4-5　リラクゼーション，フィットネス
4-6　スポーツ，レクリエーション
5．価値観および生活満足度
5-1　余暇・観光に関する価値観
5-2　現代化・都市化に関する価値観
5-3　日常生活に関する価値観
5-4　生活満足度
6．まとめ
6-1　各節における傾向の要約
6-2　二極分化構造
おわりに

Ⅰ　調査の概要

1．調査概要

1-1　概要

平成15年度～17年度科学研究費研究「グローバル下におけるアジア諸国の観光に関する包括的研究（研究代表者：根橋正一）」の一環として平成16年度に量的調査として「上海市民の旅行消費とライフスタイルに関する調査」を企画した。調査の実施は上海社会科学院社会科学研究所・徐安琪教授に委託し，平成17年１月23日～２月25日の１ヶ月余りの間に，面接法によって618件のサンプルを得た。本稿では，単純集計および属性分析を中心とした集計結果を概述する。

1-2　調査の目的

近年，中国では国内・国際を含め観光を目的とした移動が急増している。これは中国の経済成長を背景とした市民生活の変化の一環として捉えられるものである。すなわち，テレビや冷蔵庫，クーラーなどの耐久消費財がいきわたりある一定の生活水準が達成された次の現象として，レジャーや観光などの形で消費生活を享受するようなライフスタイルが登場してきている。言い換えれば，物質的豊かさを追求し生活水準の向上を目指す段階から，質的部分における豊かさにも目が向けられ，自らのライフスタイルや価値観の表現として旅行や趣味の形での消費が行われる段階に入ったのである。

当然ながら，こういった現象は経済的に優位な都市部，特に東部・沿海部都市に顕著なものである。本稿で扱う上海市民を対象とした量的調査は，観光やレジャーに出かける都市民の行動の実態や現在の消費生活に関する考え方等を把握するために企画した。

また，この量的調査に先立ち，平成16年９月には20歳台から60歳台の男女30人を対象に，旅行経験や観光・レジャー等に関するインタビュー調査を実施した。

1-3　調査の枠組み

「上海市民の旅行消費とライフスタイルに関する調査」では，観光の実態，観光に対する志向，レジャーなど娯楽消費の実態，趣味のあり方，これらにまつわる価値意識の５つの領域を設定し，設問を作成した。これら５つの領域は，価値意識を独立変数，観光の実態，観光に対する志向，レジャーなど娯楽消費の実態，趣味のあり方を従属変数と位置づけ，作成した。すなわち，消費や都市化，現代化などに関する価値観が，レジャー・レクリエーション，趣味，観光旅行などの実態や志向にどのように反映されるかを分析することを念頭においた。

また，中国社会は1949年の革命とそれに引き続く文化大革命，78年の改革開放，92年

の市場経済の容認とその後の高度経済成長，と非常に大きな変動にさらされてきた。市民個人の経験も年齢や階層によって大きく異なり，その価値観もそれぞれの時期の政策やプロパガンダの影響を少なからず被っている。この意味で，年齢，学歴，職業，収入等の属性は，消費や現代化・都市化に対する価値意識を大きく左右する。

さらに，特に現在20歳代，30歳台の若年層は改革開放後あるいは市場経済導入後に高度な教育を受け，現在，経済環境が著しく変化する中で高収入を得る世代となっている。彼らは旧来の知識人層や，革命によって台頭してきた出身階級の正しい幹部層とは必ずしも一致しない。現代の中国においては，いわば経済成長を背景に新たな社会層が形成されつつある状況であり，その価値観を体現する趣味も形成されつつある。そこで，本量的調査では，最終的には属性分析を通し，社会層とその趣味の形成を観光の志向を通し分析することを念頭においた。

1-4　調査の方法

今回の調査は上海社会科学院社会科学研究所・徐安琪教授に委託し行った。

調査対象は上海市内の６区（徐匯区，普陀区，楊浦区，浦東区，黄浦区，長寧区）に居住する20歳から65歳までの男女600人であり，方法は面接法によった。被調査者の選定にあたっては多段階層化概率抽出法が用いられた。すなわち，まず上述６区のうちから12の街道委員会に属する30の社区を選定し，それぞれから20人ずつが抽出された。各社区の20人の選定にあたっては，まず各社区の居民委員から選択可能サンプルとして50が提示され，調査員はそのうちのサンプル番号20まではランダムに訪問し調査を行う。サンプル番号20以降は番号順に訪問，調査を行う。そして，そこまでに調査拒否などのケースがあった場合には，残りの選択可能サンプルから補うという方法が取られた。本調査では最終的には31の社区に居住する618人が対象となったが，これは予定の600サンプルの年齢・性別分布を若干補正するために，１つ社区が追加されたためであった。

６区のそれぞれについて簡単な説明を加えると，黄浦区は上海市の都心部分にあたり，再開発後に建てられたこの区のマンションは超高級マンションといっても差し支えない。徐匯区は上海の新しいセンターのひとつとして整備されている区である。楊浦区，浦東区は浦東の開発以降にできた新しい区であり，新興住宅地（マンション街）である。普陀区，長寧区は旧市街の西北部にあたり，近年再開発も進んでいるが，以前からの下町的な要素を残す場所である。

以上の区および具体的な街道と社区の選定にあたっては，当初比較的裕福な地区で行うことを想定し行った。というのも，観光やレジャーといったテーマはまだ中国では新しいテーマであり，生活に余裕がある層や，新しいものに対して抵抗感がない若い層の動向の把握を目指したためである。だが，今回調査では，社区選定の段階で調査依頼を断るところが少なからずあった。徐安琪教授によれば，特に黄浦区などの近年建設され

た高級マンションを中心とした社区では住民のプライバシー意識が高く，こういった社会調査も受け入れられにくくなっているとのことであった。この現象もまた中国社会の変化の一面を示すものである。すなわち，中国における社会調査は前述のように地域社会の幹部を通しての面接法が一般的であり，それは政治権力の末端としての地域幹部の権力に支えられてきた。しかしながら，住民のプライバシー意識も，地域幹部のあり方も急速に変化しており，回収率100％の面接法はそろそろ限界に近づいているようである。近い将来，効率は悪くなるが，郵送法などの穏当な方法が採用されるようになるのであろう。

なお，今回調査で得られた618サンプルの平均年収は24,760元（中央値15,000元）であった。これに対して，国家統計局による2004年度の上海市民の平均年収は16,683元である[(1)]。今回調査のサンプルは，当初予定ほどではないが，上海市の全体平均よりも収入の比較的高い層が多いものとなった。

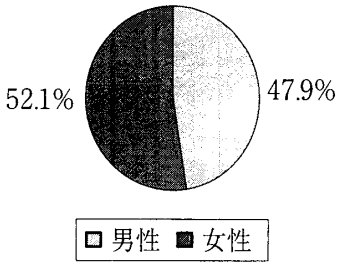
なお，分析はSPSS.13を用いて行った。クロス集計の分析においては，カイ二乗検定を行い，確率有意水準５％未満であり，期待値５未満のセル数が20％以下のものを基本的に有意差があるものとして取りあげた。必要に応じて，期待値５未満のセル数が20%を超えるものについても言及している。また，百分率表示の際に，まるめの誤差のため合計が100%とならないものもある。

2．調査対象者の属性

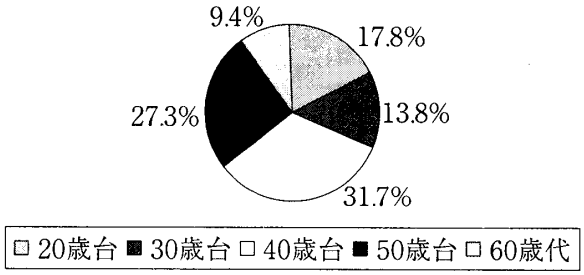
本節では，性別，年齢，学歴，収入に関する属性分布の概要を示す。

2-1　性別および年齢

まず性別分布は男性296人（47.9％），女性322人（52.1％）であった。また，年齢では20歳台110人（17.8％），30歳台85人（13.8％），40歳台196人（31.7％），50歳台169人（27.3％），60歳台58人（9.4％）であった。回答者中30歳台の割合が他の年齢層よりも小さくなっている。これは，調査員によれば，特に30歳台の男性は仕事等により不在が多く，調査に対する協力を得にくかったためであるという。



図Ⅰ.2.1　性別分布(n=618)



図Ⅰ.2.2　年齢層分布(n=618)

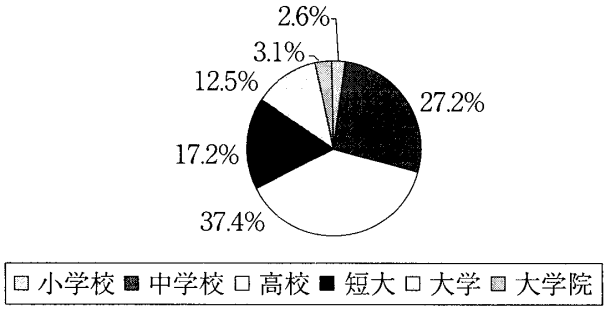
2-2　学歴

被調査者の最終学歴分布は，小学校卒業16人（2.6%），中学校卒業168人（27.2%），高校卒業231人（37.4%），短大・専門学校卒業106人（17.2%），大学卒業77人（12.5%），大学院卒業19人（3.1%）となっていた。

年齢層別の学歴分布を見ると，それぞれの年齢層が文化大革命による高等教育の中断，昨今の高学歴化や高等教育の大衆化等の影響を被っていることが理解できる。

すなわち，20歳台では，短大・専門学校卒業および大学・大学院卒業が全体の7割以上を占めており，全体に極めて高学歴化していることが見て取れる。30歳台では，大学・大学院卒業が38.1%を占める一方で，高校卒業が31.0%を占めており，学歴の二分化傾向が見られる。40歳台以上では一気に学歴が下降し，高校卒業が全体の6割近くを占め，次が小学校・中学校卒業の25%となっている。このように，40歳台では高校卒業でドミナントな学歴となっている。また，50歳台では，小学校・中学校卒業が最も多く53.8%を占め，次が高校卒業の30.8%となる。60歳台では小学校・中学校卒業が46.6%，高校卒業が25.9%である。このように，50歳台，60歳台では小学校・中学校卒業がドミナントな学歴であったことが理解できる。

なお，40歳台以上の高学歴者の割合に注目すると，40歳台の大学・大学院卒業者の割合は5.6%，50歳台は3.6%であるが，60歳台では12.1%と40歳台，50歳台を大きく上回っている。これは，文革による高等教育の中断の影響と考えられる。



図Ⅰ.2.3　学歴分布(n=617)

表Ⅰ.2.1 年齢層別学歴分布

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
小学校・中学校卒業	6.4 (7)	11.9 (10)	25.0 (49)	53.8 (91)	46.6 (27)
高校卒業	21.8 (24)	31.0 (26)	58.2 (114)	30.8 (52)	25.9 (15)
短大・専門学校卒業	35.5 (39)	19.0 (16)	11.2 (22)	11.8 (20)	15.5 (9)
大学・大学院卒業	36.4 (40)	38.1 (32)	5.6 (11)	3.6 (6)	12.1 (7)
合　　計	100 (110)	100 (84)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

2-3 収入

本稿では属性分析において個人収入と家庭収入を使用した。そこで，ここでは個人収入の分布傾向を示すとともに，個人収入と家庭収入の関連を示しておく。

(1) 個人年収

全体の平均は24,760元であったが，中央値は15,000である。また，最大値は230,000元，最小値は0元であった。全体の分布では，5,000元以下10.2％，5,001元～15,000元42.3％，15,001元～30,000元27.0％，30,001元以上20.5％であった。このうち5,000元以下では，無収入の人が60％を占めていた。

男女別の平均収入は男性28,472元，女性21,440元であった。

年齢層別の平均収入は20歳台28,126元，30歳台44,364元，40歳台20,966元，50歳台19,688元，60歳台17,573元と，30歳台，20歳台で高く，40歳台以上では年齢層が上がるに従い下がる傾向にあった。この理由として，ひとつには次に示す学歴との関連があげられる。また，特に50歳台，60歳台での下降の理由として定年退職もあげられるであろう。企業によって定年年齢の設定は異なるが男性は60歳頃に，女性はそれよりも5年程度早く55歳頃に設定されていることが多く，こういった異動も平均収入に反映されているであろう。ただ，定年の場合年金があることや，パート等の別の職で収入を補うこともあり，極端に下がることは免れているようである。

学歴では，小学校・中学校卒14,397元，高校卒20,311元，短大・専門学校卒29,701元，大学・大学院卒50,404元と，学歴が上がるに従い高くなる傾向にあり，大学・大学院卒の平均収入は小・中学校卒の3倍以上となっていた。

また，個人年収の分布状況を詳細に検討するために，性別・年齢層別のクロス集計と，年齢層・学歴別のクロス集計を行った。

まず，性別・年齢層別の分布を見ると，5,000元以下は男女ともに20歳台において最も高くなっていた。これは学生などの未就業者を多く含むためであろう。また，男性40歳台・50歳台，女性30歳台・40歳台における5,000元以下のパーセンテージは，リストラなどにより失業状態にある者や，専業主婦など外部で労働しないことを選んだ者の割

合と考えてよいであろう。

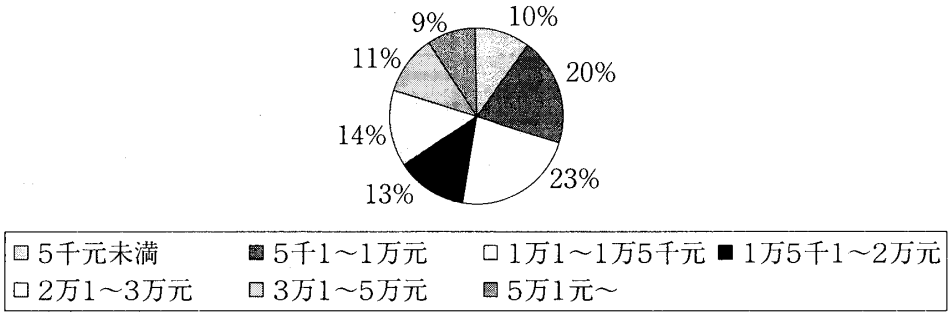
5,001元～15,000元は全体で最も多くの割合を占める層である。全体の中央値も15,000元であり，この層にある。だが，月収換算では417元～1250元となり，決して高い収入とはいえない層である。この層は，性別・年齢層別では，女性の40歳台（59.2％）・50歳台（66.6％）・60歳台（76.5％），男性の60歳台（62.5％）で，特に多くなっていた。女性の平均収入が男性よりも低くなっている理由として，この層への集中があげられるであろう。

30,001元以上の比較的所得が高い層は30歳台（男性55.9％，女性39.1％）に最も多く，次が20歳台（男性26.4％，女性30.3％）であった。年齢層別の平均収入がまず30歳台において，次に20歳台において高くなっているのは，このような部分に起因するのであろう。それにしても，30歳台男性は５割以上が３万元以上の所得を得ており，全体の中でも特に収入が高い層であるといえる。

次に，大学・大学院卒の収入が小・中学校卒の３倍以上となっていることは先に指摘した。そこで，表Ⅰ.2.4～Ⅰ.2.8に示す年齢層・学歴別の集計結果から，それぞれの年齢層における学歴と収入の傾向をみておきたい。

20歳台では15,001～30,000元の収入層が最も多く全体の33.0％を占めていた。しかし，学歴・収入層では大学／大学院卒・30,001元以上15.6％，短大／専門学校卒・15,001～30,000元14.7％の順に並んでいた。30歳台では30,001元以上の収入層が最も多く47.6％を占め，学歴・収入層では大学／大学院卒・30,001元以上が最も多く26.2％を占めていた。40歳台は，5,001～15,000元の収入層が最も多く47.1％を占め，その中でも高校卒5,001～15,000が32.3％を占めていた。50歳台も収入層では5,001～15,000元が最も多く53.2％を占め，その中でも小・中学校卒5,001～15,000元が38.4％を占めていた。60歳台も同様に収入層では5,001～15,000元が最も多く70.7％％を占め，その中でも小・中学校卒5,001～15,000元が41.4％を占めていた。

以上から，30歳台，20歳台には高学歴であるとともに高収入である者の割合が高く，一方40歳以上では学歴が低く収入も低い者の割合が高いことがわかる。言い換えるならば，本調査のサンプルには若年・高学歴・高収入層と，中高年・低学歴・低収入層の二分化傾向が見られる。なお，このように若年層に高学歴・高所得者が集中する傾向は，国家統計局の調査等からも指摘されている[(2)]。これは，現代中国では情報化やグローバル化を内包する急速な産業化に対応できる高度に教育を受けた人材が大量に要請される状況にあり，それを満たす人材が高学歴を有する若年層であるために起こっている現象であろう。



図Ⅰ.2.4　個人収入分布(n=615)

表Ⅰ.2.2　年齢による収入分布・男性

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
5,000元以下	17.0（9）	2.3（1）	8.7（8）	8.5（7）	0.0（0）
5,001～15,000元	15.1（8）	11.6（5）	39.1（36）	39.1（32）	62.5（15）
15,001～30,000元	41.5（22）	30.2（13）	30.4（28）	35.4（29）	20.8（5）
30,001元以上	26.4（14）	55.9（24）	21.7（20）	17.1（14）	16.6（4）
合　　計	100　(53)	100　(43)	100　(92)	100　(82)	100　(24)

＊単位：％（度数）

表Ⅰ.2.3　年齢による収入分布・女性

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
5,000元以下	28.6（16）	17.1（7）	13.6（14）	1.1（1）	0.0（0）
5,001～15,000元	16.0（9）	24.4（10）	59.2（61）	66.6（58）	76.5（26）
15,001～30,000元	15.0（14）	19.5（6）	17.5（18）	25.2（22）	20.5（7）
30,001元以上	30.3（17）	39.1（16）	9.7（10）	6.9（6）	2.9（1）
合　　計	100　(56)	100　(41)	100　(103)	100　(87)	100　(34)

＊単位：％（度数）

表1.2.4　学歴による収入分布・20歳台

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上	合　計
5,000元以下	2.8（3）	0.9（1）	10.1（11）	9.2（10）	23.0（25）
5,001～15,000元	0.9（1）	5.5（6）	3.7（4）	5.5（6）	15.6（17）
15,001～30,000元	0.9（1）	11.9（13）	14.7（16）	5.5（6）	33.0（36）
30,001元以上	1.8（2）	3.7（4）	7.3（8）	15.6（17）	28.4（31）
合　計	6.4（7）	22.0（24）	35.8（39）	35.8（39）	100.0（109）

＊単位：％（度数）

表1.2.5　学歴による収入分布・30歳台

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上	合　計
5,000元以下	3.6（3）	1.2（1）	2.4（2）	2.4（2）	9.6（8）
5,001～15,000元	6.0（5）	9.5（8）	1.2（1）	1.2（1）	17.9（15）
15,001～30,000元	1.2（1）	10.7（9）	4.8（4）	8.3（7）	25.0（21）
30,001元以上	1.2（1）	9.5（8）	10.7（9）	26.2（22）	47.6（40）
合　計	12.0（10）	30.9（26）	19.1（16）	38.1（32）	100.0（84）

＊単位：％（度数）

表1.2.6　学歴による収入分布・40歳台

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上	合　計
5,000元以下	4.1（8）	7.2（14）	0.0（0）	0.0（0）	11.3（22）
5,001～15,000元	14.3（28）	32.3（63）	3.1（6）	0.（0）	49.7（97）
15,001～30,000元	6.2（12）	14.9（29）	2.6（5）	0.0（0）	23.7（46）
30,001元以上	0.5（1）	4.1（8）	5.6（11）	5.1（10）	15.3（30）
合　計	25.1（49）	58.5（114）	11.3（22）	5.1（10）	100.0（195）

＊単位：％（度数）

表1.2.7　学歴による収入分布・50歳台

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上	合　計
5,000元以下	3.0（5）	1.8（3）	0.0（0）	0.0（0）	4.8（8）
5,001～15,000元	38.4（65）	11.8（20）	3.0（5）	0.（0）	53.2（90）
15,001～30,000元	10.0（17）	14.8（25）	4.7（8）	0.6（1）	30.1（51）
30,001元以上	2.4（4）	2.4（4）	4.1（7）	3.0（5）	11.9（20）
合　計	53.8（91）	30.8（52）	11.8（20）	3.6（6）	100.0（169）

＊単位：％（度数）

表1.2.8　学歴による収入分布・60歳台

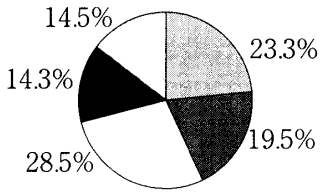
	小・中学校	高　校	短　大	大学以上	合　計
5,000元以下	0.0（0）	0.0（0）	0.0（0）	0.0（0）	0.0（0）
5,001～15,000元	41.4（24）	19.0（11）	6.9（4）	3.4（2）	70.7（41）
15,001～30,000元	5.2（3）	6.9（4）	5.2（3）	3.4（2）	20.7（12）
30,001元以上	0.0（0）	0.0（0）	3.4（2）	5.2（3）	8.6（5）
合　計	46.6（27）	25.9（15）	15.5（9）	12.0（7）	100.0（58）

＊単位：％（度数）

（2）家庭の収入

家庭単位で年収の平均は，48,755元であった。最大値は600,000元，最小値は0元，中央値は36,600元であった。その分布は，20,000元以下23.3％，20,001～30,000元19.5％，30,001～50,000元28.5％，50,001～80,000元28.3％，80,001元以上14.5％であった。

また，個人収入と家庭収入の関係を見ると，全体として個人収入が低ければ家庭全体の収入も低く抑えられる傾向は読みとれた。ただ，女性の場合，男性ほどこの傾向は顕著ではなく，表Ⅰ.2.10の網掛け部分のように，本人の収入が低くとも家庭全体の収入が十分に高いケースも見られる。これは，早期退職等により専業主婦を選んだケースなどにあてはまるであろう。



□2万元以下 ■2万1～3万元 □3万1～5万元 ■5万1～8万元 □8万1元以上

図Ⅰ.2.5 家庭収入分布(n=615)

表Ⅰ.2.9 個人収入と家庭収入・男性

個人／家庭	2万以下	2～3万	3～5万	5～8万	8万以上
5,000元以下	22.7 (15)	5.8 (3)	5.4 (5)	0.0 (0)	4.2 (2)
5,001～15,000元	72.7 (48)	53.8 (28)	17.4 (16)	8.3 (3)	2.1 (1)
15,001～30,000元	3.0 (2)	40.4 (21)	63.0 (58)	38.9 (14)	4.2 (2)
30,001元以上	1.5 (1)	0.0 (0)	14.1 (13)	52.8 (19)	89.6 (43)
合　計	100 (66)	100 (52)	100 (92)	100 (36)	100 (48)

＊単位：％（度数）

表Ⅰ.2.10 個人収入と家庭収入・女性

個人／家庭	2万以下	2～3万	3～5万	5～8万	8万以上
5,000元以下	18.2 (14)	10.3 (7)	10.8 (9)	9.6 (5)	7.3 (3)
5,001～15,000元	72.8 (56)	79.4 (54)	47.0 (39)	21.1 (11)	9.7 (4)
15,001～30,000元	9.0 (7)	10.3 (7)	36.2 (30)	38.4 (20)	12.2 (6)
30,001元以上	0.0 (0)	0.0 (0)	6.0 (5)	30.8 (16)	70.7 (29)
合　計	100 (77)	100 (68)	100 (83)	100 (52)	100 (41)

＊単位：％（度数）

Ⅱ．単純集計および属性分析結果

1．昨年の旅行状況

調査においては，旅行実態の概況を把握するために，最初に昨年1年間の旅行回数および行き先を尋ねた。

1-1 昨年の旅行回数

昨年の泊りがけでの旅行回数の，全体の平均値は1.47回であった。度数分布では，0回37.9％，1回32.0％，2回14.9％，3回7.3％，4回以上7.9％であった。すなわち，62.1％の人が，昨年1回以上旅行に出かけていた。

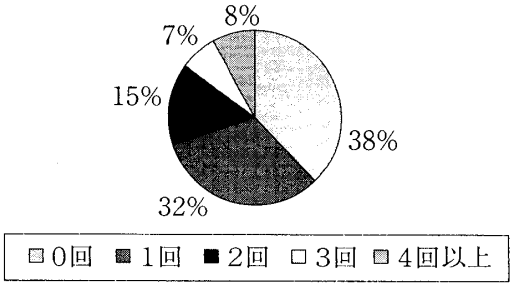
また，属性分析として，性別，年齢層，学歴，家族収入に関するクロス集計をおこなったが，その全てに有意差が認められた。

性別では，昨年旅行へ行かなかった人の割合は37.5％（男性），37.9％（女性）とほとんど差はなかった。だが，女性では１回37.2％，２回10.9％に対し，男性では１回26.4％，２回19.3％と，出かけた人の頻度において男性が女性を上回っていた。

年齢では，昨年旅行へ行かなかった人の割合は，30歳台，20歳台，60歳台，40歳台，50歳代の順で減少した。また，30歳台は旅行に出かけた回数も他に比べて高い傾向にあり，最もよく旅行に出かけていた年齢層であった。

学歴では，学歴が高くなるほど旅行に出かけなかった人の割合が減り，また出かけた人の間での頻度も高くなっていた。

家庭収入では，収入が高いほど旅行に出かけなかった人の割合が減少した。特に，年収８万元以上の層では，24.7％が年４回以上旅行しており，高収入層において旅行頻度が高くなる傾向も見られた。



図Ⅱ.1.1　昨年の旅行回数(n=618)

表Ⅱ.1.1　性別旅行回数

	男　性		女　性		合　計	
	度数	%	度数	%	度数	%
0回	111	37.5	123	38.2	234	37.9
1回	78	26.4	120	37.2	198	32.0
2回	57	19.3	35	10.9	92	14.9
3回	19	6.4	26	8.1	45	7.3
4回以上	31	10.5	18	5.6	49	7.9
合　計	296	100	322	100	618	100

表Ⅱ.1.2　年齢層別旅行回数

	20歳台		30歳台		40歳台		50歳台		60歳台	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
0回	31	28.2	18	21.2	85	43.4	77	45.6	23	39.7
1回	44	40.0	28	32.9	59	30.1	47	27.8	20	34.5
2回	15	13.6	18	21.2	31	15.8	22	13.0	6	10.3
3回	8	7.3	10	11.8	12	6.1	11	6.5	4	6.9
4回以上	12	10.9	11	12.9	9	4.6	12	7.1	5	8.6
合　計	110	100	85	100	196	31.7	169	100	58	100

表Ⅱ.1.3　学歴別旅行回数

	小・中学校		高　校		短　大		大学・大学院	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
0回	93	50.5	94	40.7	32	30.2	15	15.6
1回	61	33.2	74	32.0	36	34.0	27	28.1
2回	12	6.5	38	16.5	20	18.9	22	22.9
3回	9	4.9	15	6.5	11	10.4	10	10.4
4回以上	9	4.9	10	4.3	7	6.6	22	22.9
合　計	184	100	231	100	106	100	96	100

表Ⅱ.1.4　家庭収入別旅行回数

	20,000元以下		20,001～30,000元		30,001～50,000元		50,001～80,000元		80,001元以上	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
0回	83	58.0	59	49.2	61	34.9	17	19.3	14	15.7
1回	43	30.1	39	32.5	61	34.9	37	42.0	18	20.2
2回	8	5.6	13	10.8	32	18.3	19	21.6	19	21.3
3回	6	4.2	6	5.0	9	5.1	7	8.0	16	18.0
4回以上	3	2.1	3	2.5	12	6.9	8	9.1	22	24.7
合　計	143	100	120	100	175	100	88	100	89	100

1-2　この1年に行った場所

表Ⅱ.1.5にはこの1年間に訪れた中国国内の場所（香港・マカオ・台湾は除く）を頻度順に整理したものである。1位，2位は上海市に隣接する浙江省および江蘇省であった。度数の上でも，この2地区は3位以下を大きく引き離している。また，3位は北京市であるが，4位にランクした安徽省も浙江省，江蘇省に隣接する省であり，上海からはそれほど離れていない。これらから，旅行先が比較的近い場所に集中していることがわかる。一方，比較的遠方の旅行先として上位5位以内に入った地域は，北京市（3位），海南島（5位）であった。この2地区は，現在の上海人にとって最もポピュラーな遠方の旅行先ということなのであろう。

なお，浙江省，江蘇省，安徽省等，多くの人がこれらの比較的近い場所を旅行先に選んだことは，ある意味で当然の結果である。遠方への旅行は，費用や必要な休暇の日数などの制約から必然的に機会は減少する。また上海市内はレジャーならともかく，旅行先としてあげるには近すぎて敬遠されるであろう。こういったことを考慮すると，逆に25.4%の人が上海市，浙江省，江蘇省，安徽省以外の地域へ旅行に出かけたという結果は，決して遠方への旅行が少ないことを意味してはいないのであろう。

付け加えると，ここでは行かなかったとした人の割合が1-1の旅行回数で0回と答えた人の割合より多くなっている。これは1-1-の設問と切り離して日帰り旅行の行き先をチェックした人があったためであろう。

また，この1年間に海外を訪れた人は51人であり，全体の8%を占めていた。その

内訳は表Ⅱ.1.6に示す通りであり，香港，マカオ，台湾を含め，上げられた国・地域は17ヵ所であった。傾向としては，1位香港（27.1%），3位マカオ（10.9%）と，やはり国内の延長ともいうべき地域が多くなっている。この2地域を除き，厳密に海外旅行先としてそのランキングを見て行くと，1位タイ（18.5%），2位マレーシア（9.8%），3位シンガポール（8.7%）と，東南アジア地域が上位となっている。これは価格や言語の面においてタイやシンガポール，マレーシアなどの東南アジア地域は中国から行きやすい場所であることに起因するであろう。それ以下は，日本4位（5人），フランス，イタリア，アメリカが同数で5位（3人）となっている。それぞれ度数はごく少数であるが，日本，ヨーロッパ，アメリカ方面へも海外旅行へ出かける人がある。

表Ⅱ.1.5　この1年に行った地域（国内，複数回答）

順位	省・特別市名	度数	%
1	浙江省	193	23.5
2	江蘇省	138	16.8
3	北京市	42	5.1
4	安徽省	27	3.3
5	海南省	24	2.9
6	山東省	18	2.2
7	広東省	13	1.6
8	上海市	12	1.5
8	江西省	12	1.5
10	四川省	12	1.5
11	天津市	11	1.3
12	福建省	10	1.2
13	河南省	8	1.0
14	雲南省	7	0.8
15	遼寧省	6	0.7
15	広西省	6	0.7
17	重慶市	5	0.6
17	貴州省	5	0.6
19	吉林省	4	0.5
20	河北省	3	0.4
20	黒竜江省	3	0.4
20	湖南省	3	0.4
20	陝西省	3	0.4
20	甘粛省	3	0.4
20	新疆自治区	3	0.4
26	内蒙古自治区	2	0.2
26	湖北省	2	0.2
26	青海省	2	0.2
29	山西省	1	0.1
29	寧夏自治区	1	0.1
31	西藏自治区	0	0
	行かなかった	243	29.6

表Ⅱ.1.6　この１年に行った国・地域（複数回答）

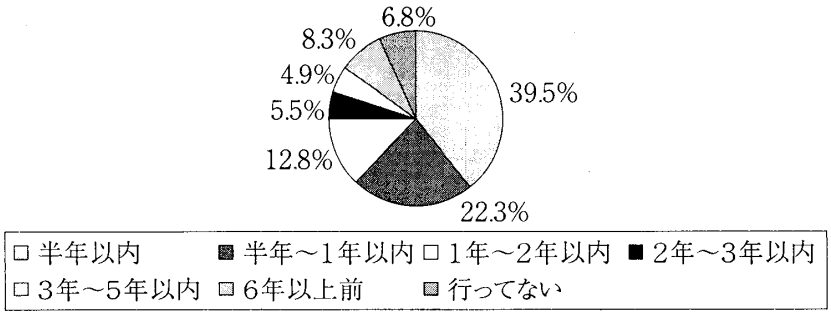
国・地域名	度数	%
香港	25	27.1
タイ	17	18.5
澳門（マカオ）	10	10.9
マレーシア	9	9.8
シンガポール	8	8.7
日本	5	5.4
フランス	3	3.2
イタリア	3	3.2
アメリカ	3	3.2
韓国	2	2.2
ドイツ	2	2.2
ベトナム	1	1.1
オーストラリア	1	1.1
台湾	1	1.1
ヨーロッパその他	1	1.1
地中海その他	1	1.1
合　　計	92	100

2．現状における観光旅行の実態

この項の設問では，現状における観光旅行の在り様を実態的に把握することを目的に，前回行った旅行について回答してもらう方法を取った。

2-1　旅行時期

前回の旅行の時期は，半年以内39.5%，半年から１年以内22.3%，１年から２年以内12.8%，２年から３年以内5.5%，３年から５年以内4.9%，５年以上前8.3%であった。累積で見ていくと，この１年以内に旅行をした人が61.8%，この２年以内に旅行をした人は74.6%，この３年以内に旅行をした人は80.1%となる。



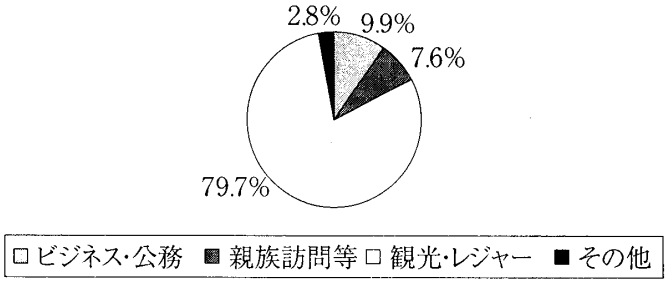
図Ⅱ.2.1　前回の旅行の時期(n=618)

2-2 旅行の目的

前回に行った旅行の目的は79.7%が観光・レジャーであった。『中国旅遊年鑑』によると2002年の上海市民の旅行目的における観光・レジャーの割合は73.5%であり，全国平均は59.4%である（何;62-63)。この結果は2002年の数値をやや上回る程度であるが，中国全体の中では上海市民の旅行・レジャーに出かける割合が高いことが理解できる。

また，表Ⅱ.2.1から表Ⅱ.2.4には属性分析の結果を示している。

ビジネス等による移動の割合は女性よりも男性において，年齢では30歳台において，また学歴・収入では高い層において多くなっていた。前節で示したように，30歳台，高学歴，高収入層は旅行頻度も高い層であったが，その理由のひとつとして出張など仕事上での移動も多いことがあげられるであろう。



図Ⅱ.2.2 旅行の目的(n=577)

表Ⅱ.2.1 性別旅行目的

目 的	男 性		女 性		合 計	
	度数	%	度数	%	度数	%
ビジネス等	43	15.3	14	4.7	57	9.9
観光等	214	76.1	246	83.1	460	79.7
親族訪問等	19	6.8	25	8.4	44	7.6
その他	5	1.8	11	3.7	16	2.8
合 計	281	100	296	100	577	100

表Ⅱ.2.2 年齢層別旅行目的

目 的	20歳台		30歳台		40歳台		50歳台		60歳台	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
ビジネス	11	10.1	12	14.3	19	10.3	12	8.1	3	5.8
観光	88	80.7	61	72.6	147	79.9	123	83.1	41	78.8
親族訪問	6	5.5	10	11.9	13	7.1	11	7.4	4	7.7
その他	4	3.7	1	1.2	5	2.7	2	1.4	4	7.7
合 計	109	100	84	100	184	100	148	100	52	100

表Ⅱ.2.3　学歴別旅行目的

目　的	小・中学校		高　校		短　大		大学・大学院	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
ビジネス	11	7.0	19	8.7	10	9.6	17	17.7
観光	121	76.6	177	81.2	90	86.5	71	74.0
親族訪問	19	12.0	18	8.3	3	2.9	4	4.2
その他	7	4.4	4	1.8	1	1.0	4	4.2
合　計	158	100	218	100	104	100	96	100

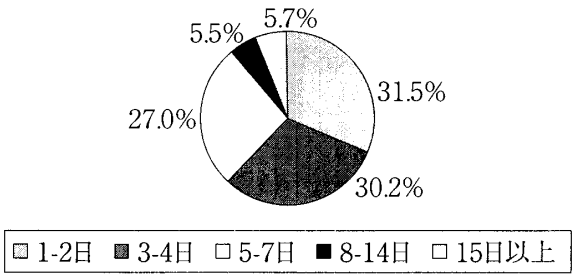
表Ⅱ.2.4　家庭収入別旅行目的

目　的	20,000元以下		20,001～30,000元		30,001～50,000元		50,001～80,000元		80,001元以上	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
ビジネス	8	6.5	7	6.5	17	10.0	9	10.2	16	18.2
観光	94	76.4	90	83.3	137	81.2	71	80.7	65	73.9
親族訪問	15	12.2	8	7.4	11	6.5	6	6.8	6	6.8
その他	6	4.9	3	2.8	4	2.4	2	2.3	1	1.1
合　計	123	100	108	100	169	100	88	100	88	100

2-3　旅行期間

旅行期間は1-2日31.5%，3-4日30.2%，5-7日27.0%，8-14日5.5%，15日以上5.7%であった。2泊3日以上の旅行が約7割を占め，1週間以上の旅行も10%を越えている。

旅行期間が一般的な日本人の国内旅行よりも長い理由のひとつとして，国内旅行といえども移動距離が大きいことがあげられるであろう。上海から列車やバスで2，3時間あるいは3，4時間といった範囲は，隣接する江蘇省や浙江省などの地域に限られてしまう。それ以上の遠方へ足を伸ばすためには，1泊2日では期間が短すぎるということであろう。



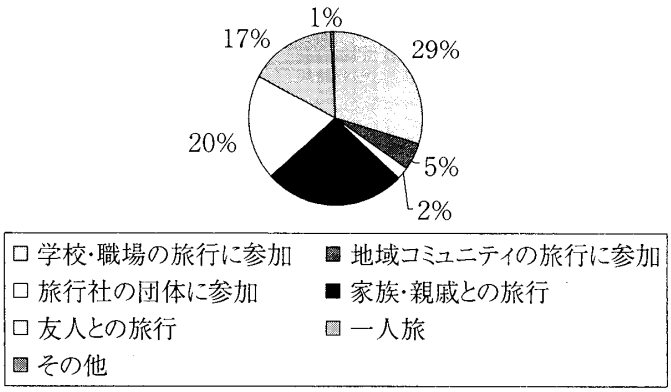
図Ⅱ.2.3　旅行期間(n=577)

2-4 旅行の形態

(1) 旅行の同行者

どのような団体あるいは誰と一緒に旅行へ行ったかを質問した。その結果，職場・学校等の組織からの旅行（29%），街道委員会・居民委員会など地域コミュニティ主催の旅行（5%）と，既成の団体によって組織された旅行への参加は全体の約3分の1であった。最も多いものは家族親族との旅行，友人との旅行などであり，46%と半数近くを占めていた。また，一人旅という回答が17%あったが，この中での出張旅行の割合はそれほど高くなかった。この場合の一人旅は必ずしも全行程を一人で行動するわけではなく，遠方の友人を訪ねそこから一緒に行動する，目的地で趣味を通して知り合ったグループに合流するなど，さまざまなケースが考えられる。実際，質的調査において得られたケースの中には，登山クラブの仲間とネット上で情報のやりとりを行い，現地集合・現地解散で一緒に登山旅行をする様子が語られたものもあった（東:20)。

いずれにしても，全体傾向として既成の団体によって組織された旅行よりも，家族，友人，一人など個人単位での旅行が多くなっていることがわかる。なお，旅行社が組織した団体に参加するというのは2%と，ごくわずかであった。



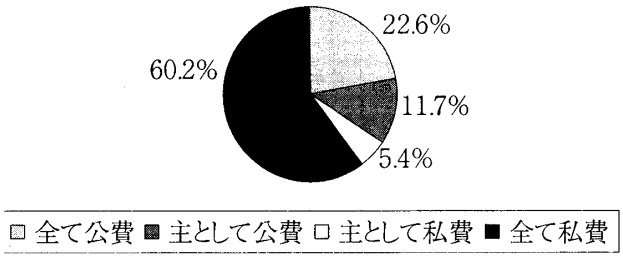
図Ⅱ.2.4 旅行の同行者(n=576)

(2) 費用の補助

現在の中国において，企業・単位の福利厚生として行われる旅行では，その費用の負担は主としてそれを主催する企業・単位が負う。このような企業や単位が主催する旅行に家族を連れて行くことも，その部分の費用を自己負担すれば可能なケースも多い。また，居民委員会・街道委員会などが主催する旅行は地域福祉的な意味合いが強く，費用の大部分は公費（さまざまな形で捻出される）でまかなわれている。さらに，企業・単位によっては，個人で行う旅行に対しても，福利厚生の一環として補助が出される場合もある。これらのような形で，なんらかの補助があったという者の割合は約40%であっ

た。逆に，全く補助はなくすべて私費負担であった者は60%であった。

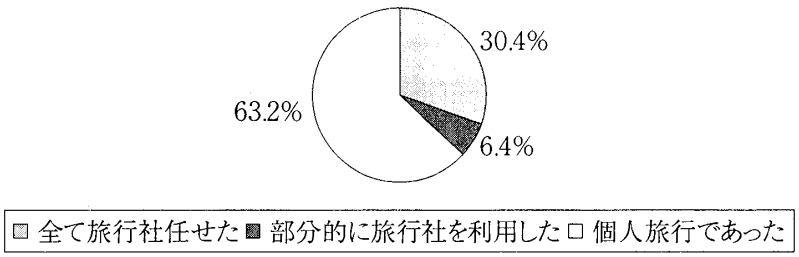
このように費用負担の側面からも，旅行が家族や友人と，あるいは個で楽しむプライベートな娯楽として行われる割合が高まっていることが理解できる。



図Ⅱ.2.5費用補助の有無(n＝571)

（3）旅行社の利用

現在中国において，既成の団体によって組織される旅行の多くは旅行社に委託される。これに対して，旅行社を通さず完全に個人で手配・行動する旅行は自助旅行と表現される。また，目的地において旅行社の観光バスを利用するなど，部分的に旅行社を利用する方法は半自助旅行と表現される。前回の旅行は自助旅行であったとした人は全体の63.2%を占めていた。この数値は，すべて私費であったとした人の割合，家族，友人，個人単位で旅行したという人の割合とほぼ重なるものである。このことから，個人単位の，私費で行う旅行ではあまり旅行社を利用していないことがわかる。

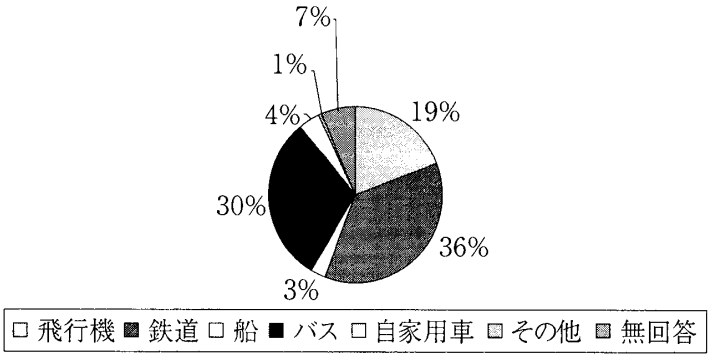


図Ⅱ.26　旅行社の利用度(n=576)

（4）利用した主要な交通手段

交通手段として何を利用するかは行き先との関わりがあるため，この項目は結果のみを切り離して論じても意味をなさない。

しかしながら，ここでは自家用車の利用が4％上げられていたことを示しておきたい。すなわち，まだ少数であるが，マイカーによる旅行が中国においても登場してきたことが指摘できる。



図Ⅱ.2.7　利用した主な交通手段(n=618)

2-5　行き先

(1) 国内旅行の行き先

前回の旅行の行き先の1位の浙江省から6位の山東省までは，1-1で示した昨年の旅行の行き先との間に変動はない。ただ1年以内という旅行時期の限定が解かれているため，江西省，四川省，雲南省，陝西省などが順位を上げている。

10位以内に江西省，福建省，山東省がランクインしているが，この3省は上海を中心に同心円を描いた場合500キロ圏内にあり，江蘇省，浙江省，安徽省に続く近接地域である。この意味では，時間や費用の面からも比較的行きやすい地域となるのであろう。

また，上海からの距離を考慮してまとめると，上海市およびその隣接地域である江蘇省・浙江省・安徽省等へ出かけた人は63.5%，それ以上遠方へ出かけた人は26.4%である。また，この26.4%のうち江西省，福建省，山東省など準隣接地域が6.9%，さらに遠方は19.5%であった。

表Ⅱ.2.5 前回の旅行で行った地域（国内，複数回答）

順位	省・特別市名	度数	%
1	浙江省	239	35.5
2	江蘇省	149	22.1
3	北京市	38	5.6
4	安徽省	29	4.3
5	海南省	23	3.4
6	山東省	18	2.7
7	江西省	16	2.4
8	四川省	14	2.1
8	福建省	12	1.8
10	上海市	11	1.6
11	雲南省	9	1.3
12	広西省	8	1.2
12	陝西省	8	1.2
14	重慶市	5	0.7
15	河南省	4	0.6
16	天津市	3	0.4
16	吉林省	3	0.4
16	黒竜江省	3	0.4
16	湖北省	3	0.4
16	湖南省	3	0.4
21	河北省	2	0.3
21	遼寧省	2	0.3
23	山西省	1	0.1
23	青海省	1	0.1
23	新彊自治区	1	0.1
	行かなかった	68	10.1

（2）行った観光の内容

行った観光の内容では，1位「蘇州，杭州，無錫など園林観光」，2位「桂林，長江山峡，黄山など風景名勝地観光」，3位「海南島，青島，大連など海辺のリゾート」，4位「周庄，烏鎮，西塘など江南古鎮観光」となっている。

1位の「園林観光」および4位の「江南古鎮観光」は浙江省，江蘇省を中心とした観光であり，上海からは最も行きやすい観光である。先の結果では浙江省，江蘇省を訪れた人がもっとも多くなっており，「園林観光」が1位となるのも必然の結果である。「江南古鎮観光」は，周庄，烏鎮など古い風情を残す小さな街の全体を観光対象化したものであり，その整備は比較近年のことである。手近といえば最も手近である。だが，4位となっているのは，規模において杭州のような大観光地には及ばないことなどによるのであろう。

また，2位の「風景名勝地観光」を行き先と照らし合わせると，安徽省の黄山へ訪れた人が多いことがうかがわれる。同様に，3位の「海辺のリゾート」では，海南省および山東省の青島へ訪れた人が多いことがうかがわれる。

表Ⅱ.2.6　前回の旅行において行った観光の内容

順位	行った観光の内容	度数	%
1	蘇州，杭州，無錫など園林観光	209	31.3
2	桂林，長江三峡，黄山など風景名勝地観光	50	7.5
3	海南島，青島，大連など海辺のリゾート	49	7.3
4	周庄，烏鎮，西塘など江南古鎮観光	41	6.1
5	張家界，九塞溝など自然風景区観光	40	6.0
5	九華山，五台山，峨嵋山など仏教聖地観光	40	6.0
7	敦煌，兵馬俑，故宮など歴史名勝地観光	39	5.8
8	レジャー村，農村観光	16	2.4
9	延安，井岡山など革命記念地観光	13	1.9
10	雲南，西藏，青海などで登山活動	12	1.8
11	王府井，深圳，新外灘など最先端スポット観光	10	1.5
12	麗江，怒江など少数民族地区観光	9	1.3
13	承徳，莫干山，北戴河など避暑地のリゾート	7	1.0
14	スキー場，ゴルフ場などスポーツリゾート	3	0.4
15	ジェニファー，水上楽園など新しいテーマパーク観光	3	0.4
	その他	36	5.4
	観光ではない	90	13.5

（3）海外旅行の行き先

香港，マカオを含めた海外については，全体の6.6％に当たる41人が前回の旅行先として上げた。昨年の旅行先として海外をあげた人は51人であり，10人減っている。これは，昨年中に海外へ行き，さらに国内旅行を行った人が10人いることを示している。また，その内訳は表2-9に示すように，1位香港，2位タイは昨年の旅行先と同様である。なお，出かけた人41人に対し，あげられた回答は59件である。これは，1回の海外旅行で複数の地域を巡るツアーに参加したことを示しているのであろう。

表Ⅱ.2.7　前回の旅行で行った国・地域

国・地域名	度数	%
香港	24	40.7
タイ	9	15.3
澳門（マカオ）	4	6.8
シンガポール	3	5.1
日本	3	5.1
マレーシア	3	5.1
ドイツ	2	3.3
フランス	2	3.3
イタリア	1	1.7
インドネシア	1	1.7
ブルネイ	1	1.7
ベトナム	1	1.7
韓国	1	1.7
オーストラリア	1	1.7
イギリス	1	1.7
スペイン	1	1.7
ヨーロッパその他	1	1.7
合　　計	59	100

3．現在の旅行観

3-1　国内旅行先に関する希望

（1）行きたい地域・行いたい観光

これから旅行に行きたい地域の順位は表Ⅱ.3.1に示す通りであり，1位海南省，2位北京市，3位雲南省，4位四川省の順となった。1-1で示した昨年1年間に行った地域，また2-5で示した前回の旅行で行った地域では1位，2位が浙江省，江蘇省となっていたが，浙江省は5位，江蘇省は7位であった。北京市の順位は実態と希望との間にあまり変動はないが，海南島（前回行った場所では5位），雲南省（同11位），四川省（同8位）が1位，3位，4位にランクインしている。これは，浙江省，江蘇省は手近さからいうと実質的ではあるが，夢や憧れとして行ってみたい場所は海南省，雲南省，四川省など遠方の地域であることを示しているのであろう。

また，希望する観光内容の順位はⅡ.3.2に示す通りである。ここでは，1位「海南島，青島，大連など海辺のリゾート」，2位「張家界，九塞溝など自然風景区」，3位「敦煌，兵馬俑，故宮など歴史名勝地」，4位「桂林，長江三峡，黄山など風景名勝地」，5位「麗江，怒江など少数民族観光区」の順となった。この観光内容は行きたい地域ともほぼ対応している。

両者をあわせて現在上海人が憧れる観光を考えるならば，第1位は海南島のリゾートであり，その次に雲南省，四川省などを訪れ自然風景区や少数民族地区の観光を行うこ

と，および北京を訪れ歴史遺産の観光を行うこととなるのであろう。

なお，近年，都市近郊の新しい観光地として登場してきた「古鎮」や「レジャー村・農村観光」の評価は，「古鎮」10位（前回行った地域では４位），「レジャー村・農村観光」14位（同８位）と，あまり芳しくない。これは，これらが日帰りも可能な最も手軽なレジャー観光であるため，敢えて訪れたい地域として選ぶ対象とはなりにくかったためであろうか。それとも，既に相当数の人が訪れており，再訪するほどの価値を見いだしていないということであろうか。

（２）希望する観光内容と属性

表Ⅱ.3.3～Ⅱ.3.6は，希望する観光内容を性別，年齢層，学歴，家庭収入別にまとめた順位を示している。それぞれの傾向を以下にまとめておく。

①性別

性別では，１位は男女ともに「海南島・青島など海辺のリゾート」であった。また，「敦煌など歴史名勝地」は男性では２位（11.5%）であるが，女性では４位（9.3%）となっている。その代わりに，男性３位，４位の「自然風景区」「風景名勝地」が，女性の２位，３位にランクしている。

また，仏教聖地観光はむしろ女性に好まれ，園林観光，革命記念地観光はどちらかと言えば男性に好まれるという傾向が見られた。すなわち，「仏教聖地観光」は男性５％（８位）であるが，女性では7.5%（６位）であった。園林観光は男性6.2%（６位）であるが，女性3.9%（８位）であった。「革命記念地観光」は男性3.2%（９位）であるが，女性では1.5%（12位）であった。

全体として，女性は「自然風景区」「風景名勝地」「仏教聖地（多くは山岳である）」など自然景観の美しさを好む傾向にあり，男性は「歴史名勝地」「革命記念地」「園林観光」など歴史的なものや文化的造形を好む傾向が見られる。

②年齢層

まず，全体を通し「海辺のリゾート」「自然風景区」「風景名勝地」「歴史名勝地」の評価は高く，すべての年代において５位以内にランクインしていた。特に「海辺のリゾート」は60歳台の３位（10.4%）を除くと，全ての年齢層で１位であった。中でも20歳台，30歳台の支持が特別高く，ともに19.0%，19.1%となっていた。

また，いくつかの傾向が見られた。

20歳台に注目すると，「少数民族地区観光」は11.8%（３位）であるが，30歳台，40歳台，50歳台はそれぞれ9.2%，8.0%，7.5%で５位，60歳台では4.2%で８位となっていた。「雲南，青海，西藏での登山活動」はパーセンテージに注目すると，20歳台では8.6%（６位）であるが，30歳台以上では，30歳台5.2%（６位），40歳台3.2%（10位），

50歳台4.9%（8位），60歳台5.2%（7位）となり，20歳台の支持が高くなっていた。

一方，「江南古鎮観光」は20歳台では全く行きたいとした者がなかったが，30歳台3.5%（9位），40歳台2.9%（11位），50歳台2.9%（10位），60歳台4.17%（11位）と，30歳台以上において多少評価が上がった。「園林観光」に対する評価も20歳台では2.3%（11位）と，30歳台5.2%（7位），40歳台5.1%（7位），50歳台6.2%（7位），60歳台7.3%（6位）に比べ低くなっていた。

以上のように，20歳台の特徴として西南辺境地域に対する憧れが強い一方で，近隣の伝統的なものに関する感心が薄い傾向が見られた。

40歳台に注目すると，「革命記念地観光」は4.3%（9位）であり，20歳台0.9%（13位），30歳台2.3%（10位），50歳台1%（13位），60歳台2.1%（10位）に比べ，やや評価が高かった。また，「最先端スポット」は40歳台では4.5%（8位），50歳台では4.9%（9位）であるが，これに対し20歳台では1.8%（12位），30歳台では1.2%（14位），60歳台0%であった。

「仏教聖地観光」は60歳台13.5%（1位）であるが，50歳台7.5%（3位），40歳台6.1%（6位），30歳台4.6%（8位），20歳台3.2%（8位）と，特に60歳台に支持されるとともに，年齢が下がるほど評価が低くなっていた。

③学歴

全体として「海辺のリゾート」「自然風景区」「風景名勝地」「歴史名勝地」の評価はやはり高く，すべてにおいて5位以内にランクインしていた。また，学歴による，いくつかの傾向がみられた。

「少数民族地区観光」は学歴が上がるほど，評価が高くなる傾向があった。すなわち，小・中学校では5%（7位）であるが，高校では7.3%（5位），短大では10.0%（4位），大学・大学院では15.0%となっていた。「避暑地リゾート」も，「少数民族地区観光」ほど明瞭ではないが，同様の傾向を描いた。すなわち，小学校・中学校では0.9%（13位），高校では1.8%（11位），短大では3.3%（9位），大学・大学院では4.1%（9位）であった。

一方，学歴が上がるほど評価が低くなったものとしては，「仏教聖地観光」があげられる。「仏教聖地観光」は，小学校・中学校では9.4%（3位）であったが，高校では6.2%（6位），短大では4.3%（8位），大学・大学院では3.6%（10位）となった。同様に，「最先端スポット観光」は小学校・中学校および高校では3.8%（9位）であるが，短大では2.9%（11位），大学・大学院では1.6%（12位）となった。また，「江南古鎮観光」は大学・大学院において特に評価が低くなった。すなわち，小学校・中学校では3.8%（9位），高校では2.2%（10位），短大では3.3%（10位）であったが，大学・大学院では0.5%（15位）と最下位にランクされた。

この他に，学歴による変動が見られたものとしては，「革命記念地観光」があげられ

る。これは，小学校・中学校3.8%（11位），高校1.8%（11位）であるが，短大では0.5%（14位），大学・大学院では4.1%（9位）と，高校，短大という中間の学歴で評価が低くなった。

④家庭収入

全体に「海辺のリゾート」「自然風景区」「風景名勝地」「歴史名勝地」が5位以内にランクインしていることは他の属性分析の結果と同様である。家庭収入に特有の傾向としては，以下のようなものが見られた。

「少数民族観光」は収入が上がるほど評価が上がる傾向にあった。すなわち，20,000元以下では5.9%（7位）であるが，20,001元～30,000万元では6.9%（6位），3,0001元～50,000元では7.4%（5位），50,001元～80,000元では8.9%（5位），80,001元以上では15.4%（「海南島など海辺のリゾート」と同率1位）となった。

一方，「歴史名勝地」「最先端スポット観光」「江南古鎮観光」は80,001元以上において，評価が特に下がっていた。すなわち，「歴史名勝地」は20,000元以下10.5%（2位），20,001元～30,000元11.5%（2位），30,001元～50,000元11.2%（3位），50,001元～80,000元11.1%（3位）と安定して高い評価を得ているが，80,001元以上では7.1%（5位）に落ちる。「最先端スポット観光」は20,000元以下4.2%（8位），20,001元～30,000元3.7%（8位），30,001元～50,000元3.5%（9位），50,001元～80,000元3.2%（10位）であるが，80,001元以上では1.1%（14位）に落ちる。「江南古鎮観光」は20,000元以下4.2%（8位），20,001元～30,000元3.2%（9位），30,001元～50,000元2.1%（13位），50,001元～80,000元2.6%（10位）であるが，80,001元以上では0.6%（15位）に落ちる。このように，80,001元以上の高所得層では他とは異なる評価が見られる。これは，他の層に比べて旅行経験が豊富であること，日常における消費生活が豊かであること等が反映された結果とみることが妥当であろう。つまり，北京ならば既に行った，江南古鎮なら大体行った，新外灘も南京路も度々行っている，王府井も深圳も南京路と大差ない，といった評価となるのであろう。

表Ⅱ.3.1　行きたい地域（国内，複数回答）

順位	省・特別市名	度数	%
1	海南省	151	13.2
2	北京市	146	12.8
3	雲南省	136	11.9
4	四川省	90	7.9
5	浙江省	88	7.7
6	広西省	50	4.4
7	江蘇省	49	4.3
8	西藏自治区	48	4.2
8	広東省	28	2.5
10	安徽省	71	1.8
10	山東省	21	1.8
10	陝西省	21	1.8
13	新疆自治区	20	1.7
14	貴州省	18	1.6
15	福建省	17	1.5
16	江西省	16	1.4
17	黒竜江省	15	1.3
18	湖南省	13	1.1
19	上海市	9	0.9
20	遼寧省	8	0.8
21	内蒙古自治区	7	0.6
22	青海省	6	0.5
23	天津市	5	0.4
23	河北省	5	0.4
23	吉林省	5	0.4
23	湖北省	5	0.4
23	重慶市	5	0.4
28	山西省	3	0.3
29	河南省	2	0.2
30	甘粛省	1	0.1
30	寧夏自治区	1	0.1
	特にない	132	11.6

表Ⅱ.3.2　希望する観光の内容

順位	行った観光の内容	度数	%
1	海南島，青島，大連など海辺のリゾート	183	15.6
2	張家界，九塞溝など自然風景区観光	139	11.8
3	敦煌，兵馬俑，故宮など歴史名勝地観光	122	10.4
4	桂林，長江三峡，黄山など風景名勝地観光	114	9.7
5	麗江，怒江など少数民族地区観光	99	8.4
6	九華山，五台山，峨嵋山など仏教聖地観光	74	6.3
7	雲南，西藏，青海などで登山活動	60	5.1
8	蘇州，杭州，無錫など園林観光	59	5.0
9	王府井，深圳，新外灘など最先端スポット観光	38	3.2
10	周庄，烏鎮，西塘など江南古鎮観光	30	2.6
11	延安，井岡山など革命記念地観光	27	2.3
12	承徳，莫干山，北戴河など避暑地のリゾート	26	2.2
13	スキー場，ゴルフ場などスポーツリゾート	14	1.5
14	レジャー村，農村観光	18	1.2
15	ジェニファー，水上楽園など新しいテーマパーク観光	9	0.8
	その他	13	1.1
	特にない	148	12.6

表Ⅱ.3.3　性別による希望する観光の内容

順位	男　　性	%	女　　性	%
1	海南島・青島など海辺のリゾート	13.7	海南島・青島など海辺のリゾート	17.4
2	敦煌など歴史名勝地	11.5	九塞溝・張家界など自然風景区	12.6
3	九塞溝・張家界など自然風景区	11	桂林・黄山など風景名勝地	10.5
4	桂林・黄山など風景名勝地	8.9	敦煌など歴史名勝地	9.3
5	麗江・怒江など少数民族観光	8.3	麗江・怒江など少数民族観光	8.5
6	蘇州・杭州など園林観光	6.2	九華山・五台山など仏教聖地	7.5
7	雲南・青海などでの登山活動	5.3	雲南・青海などでの登山活動	4.9
8	九華山・五台山など仏教聖地	5	蘇州・杭州など園林観光	3.9
9	延安・井岡山など革命記念地	3.2	王府井など最先端スポット	3.3
10	王府井など最先端スポット	3.2	北戴河など避暑地のリゾート	2.1
11	古鎮観光	3	古鎮観光	2.1
12	北戴河など避暑地のリゾート	2.3	延安・井岡山など革命記念地	1.5
13	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	1.8	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	1.3
14	レジャー村・農村観光など	1.4	新しいテーマパーク	1.1
15	新しいテーマパーク	0.4	レジャー村・農村観光など	1
	その他	2	その他	0.3
	特になし	12.8	特になし	12.5
	(N=563)		(N=610)	

表Ⅱ.3.4 年齢層による希望する観光の内容

順位	20歳台	%	30歳台	%	40歳台	%	50歳台	%	60歳台	%
1	海南島・青島など海辺のリゾート	19.0	海南島・青島など海辺のリゾート	19.1	海南島・青島など海辺のリゾート	13.9	海南島・青島など海辺のリゾート	14.9	九華山・五台山など仏教聖地	13.5
2	九塞溝・張家界など自然風景区	12.2	九塞溝・張家界など自然風景区	12.7	敦煌など歴史名勝地	13.3	九塞溝・張家界など自然風景区	13.3	敦煌など歴史名勝地	11.5
3	麗江・怒江など少数民族観光区	11.8	桂林・黄山など風景名勝地	11.0	九塞溝・張家界など自然風景区	11.2	桂林・黄山など風景名勝地	9.7	海南島・青島など海辺のリゾート	10.4
4	桂林・黄山など風景名勝地	10.0	敦煌など歴史名勝地	10.4	桂林・黄山など風景名勝地	9.1	敦煌など歴史名勝地	7.5	桂林・黄山など風景名勝地	9.4
5	敦煌など歴史名勝地	9.0	麗江・怒江など少数民族観光区	9.2	麗江・怒江など少数民族観光区	8.0	麗江・怒江など少数民族観光区	7.5	九塞溝・張家界など自然風景区	7.3
6	雲南・青海などでの登山活動	8.6	雲南・青海などでの登山活動	5.2	九華山・五台山など仏教聖地	6.1	九華山・五台山など仏教聖地	7.5	蘇州・杭州など園林観光	7.3
7	北戴河など避暑地のリゾート	4.1	蘇州・杭州など園林観光	5.2	蘇州・杭州など園林観光	5.1	蘇州・杭州など園林観光	6.2	雲南・青海などでの登山活動	5.2
8	九華山・五台山など仏教聖地	3.2	九華山・五台山など仏教聖地	4.6	王府井など最先端スポット	4.5	雲南・青海などでの登山活動	4.9	麗江・怒江など少数民族観光区	4.2
9	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	3.2	古鎮観光	3.5	延安・井岡山など革命記念地	4.3	王府井など最先端スポット	4.9	古鎮観光	4.2
10	新しいテーマパーク	2.7	延安・井岡山など革命記念地	2.3	雲南・青海などでの登山活動	3.2	古鎮観光	2.9	延安・井岡山など革命記念地	2.1
11	蘇州・杭州など園林観光	2.3	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	2.3	古鎮観光	2.9	レジャー村・農村観光など	1.6	北戴河など避暑地のリゾート	2.1
12	王府井など最先端スポット	1.8	レジャー村・農村観光など	2.3	北戴河など避暑地のリゾート	2.4	北戴河など避暑地のリゾート	1.3	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	1.0
13	延安・井岡山など革命記念地	0.9	北戴河など避暑地のリゾート	1.2	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	1.3	延安・井岡山など革命記念地	1.0	王府井など最先端スポット	0
14	レジャー村・農村観光など	0.9	王府井など最先端スポット	1.2	レジャー村・農村観光など	0.8	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	0.3	新しいテーマパーク	0
15	古鎮観光	0	新しいテーマパーク	0.6	新しいテーマパーク	0.3	新しいテーマパーク	0.3	レジャー村・農村観光など	0
	その他	0.9	その他	1.7	その他	0.8	その他	1	その他	2
	特になし	9.5	特になし	7.5	特になし	12.8	特になし	15.3	特になし	19.8
	(N=221)		(N=173)		(N=375)		(N=308)		(N=96)	

表Ⅱ.3.5　学歴による希望する観光の内容

順位	小学校・中学校	%	高校	%	短大	%	大学・大学院	%
1	海南島・青島など海辺のリゾート	14.5	海南島・青島など海辺のリゾート	17.3	海南島・青島など海辺のリゾート	14.8	麗江・怒江など少数民族観光	15.0
2	敦煌など歴史名勝地	10.1	九塞溝・張家界など自然風景区	13.3	九塞溝・張家界など自然風景区	12.0	海南島・青島など海辺のリゾート	14.5
3	九華山・五台山など仏教聖地	9.4	敦煌など歴史名勝地	12.4	桂林・黄山など風景名勝地	10.5	九塞溝・張家界など自然風景区	13.0
4	九塞溝・張家界など自然風景区	8.8	桂林・黄山など風景名勝地	10.0	麗江・怒江など少数民族観光	10.0	桂林・黄山など風景名勝地	9.3
5	桂林・黄山など風景名勝地	8.8	麗江・怒江など少数民族観光	7.3	敦煌など歴史名勝地	8.6	敦煌など歴史名勝地	8.3
6	麗江・怒江など少数民族観光	5	九華山・五台山など仏教聖地	6.2	雲南・青海などでの登山活動	7.2	雲南・青海などでの登山活動	6.7
7	蘇州・杭州など園林観光	5	蘇州・杭州など園林観光	4.2	蘇州・杭州など園林観光	6.7	延安・井岡山など革命記念地	5.7
8	雲南・青海などでの登山活動	4.4	雲南・青海などでの登山活動	4	九華山・五台山など仏教聖地	4.3	蘇州・杭州など園林観光	5.2
9	王府井など最先端スポット	3.8	王府井など最先端スポット	3.8	北戴河など避暑地のリゾート	3.3	北戴河など避暑地のリゾート	4.1
10	古鎮観光	3.8	古鎮観光	2.2	古鎮観光	3.3	九華山・五台山など仏教聖地	3.6
11	延安・井岡山など革命記念地	2.8	北戴河など避暑地のリゾート	1.8	王府井など最先端スポット	2.9	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	2.1
12	レジャー村・農村観光など	1.3	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	1.8	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	2.4	王府井など最先端スポット	1.6
13	北戴河など避暑地のリゾート	0.9	延安・井岡山など革命記念地	1.3	新しいテーマパーク	1	レジャー村・農村観光など	1
14	新しいテーマパーク	0.6	レジャー村・農村観光など	1.3	延安・井岡山など革命記念地	0.5	新しいテーマパーク	0.5
15	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	0.3	新しいテーマパーク	0.9	レジャー村・農村観光など	0.5	古鎮観光	0.5
	その他	0.9	その他	0.4	その他	2.9	その他	1
	特になし	19.5	特になし	11.6	特になし	9.1	特になし	7.8
	(N=318)		(N=450)		(N=209)		(N=193)	

表Ⅱ.3.6 家庭収入による希望する観光の内容

順位	20,000元以下	%	20,001元～３0,000元	%	30,001元～50,000元	%	50,001～80,000元	%	80,001元以上	%
1	海南島・青島など海辺のリゾート	11.8	海南島・青島など海辺のリゾート	12.8	海南島・青島など海辺のリゾート	18.2	海南島・青島など海辺のリゾート	19.5	麗江・怒江など少数民族観光区	15.4
2	敦煌など歴史名勝地	10.5	敦煌など歴史名勝地	11.5	九塞溝・張家界など自然風景区	14.1	九塞溝・張家界など自然風景区	11.6	海南島・青島など海辺のリゾート	15.4
3	九塞溝・張家界など自然風景区	8.8	九塞溝・張家界など自然風景区	11.0	敦煌など歴史名勝地	11.2	敦煌など歴史名勝地	11.1	九塞溝・張家界など自然風景区	12.6
4	蘇州・杭州など園林観光	8.4	桂林・黄山など風景名勝地	9.2	桂林・黄山など風景名勝地	9.4	桂林・黄山など風景名勝地	11.1	桂林・黄山など風景名勝地	12.1
5	桂林・黄山など風景名勝地	7.1	九華山・五台山など仏教聖地	8.7	麗江・怒江など少数民族観光区	7.4	麗江・怒江など少数民族観光区	8.9	敦煌など歴史名勝地	7.1
6	九華山・五台山など仏教聖地	6.3	麗江・怒江など少数民族観光区	6.9	雲南・青海などでの登山活動	5.3	雲南・青海などでの登山活動	6.8	九華山・五台山など仏教聖地	7.1
7	麗江・怒江など少数民族観光区	5.9	雲南・青海などでの登山活動	6.4	九華山・五台山など仏教聖地	5	蘇州・杭州など園林観光	5.3	雲南・青海などでの登山活動	5.0
8	王府井など最先端スポット	4.2	王府井など最先端スポット	3.7	蘇州・杭州など園林観光	4.7	九華山・五台山など仏教聖地	5.3	延安・井岡山など革命記念地	4.4
9	古鎮観光	4.2	古鎮観光	3.2	王府井など最先端スポット	3.5	王府井など最先端スポット	3.2	蘇州・杭州など園林観光	4.4
10	雲南・青海などでの登山活動	2.5	延安・井岡山など革命記念地	2.3	北戴河など避暑地のリゾート	2.6	古鎮観光	2.6	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	2.8
11	延安・井岡山など革命記念地	1.7	北戴河など避暑地のリゾート	2.3	延安・井岡山など革命記念地	2.4	北戴河など避暑地のリゾート	2.1	北戴河など避暑地のリゾート	2.2
12	北戴河など避暑地のリゾート	1.7	蘇州・杭州など園林観光	2.3	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	2.4	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	1.6	新しいテーマパーク	1.7
13	レジャー村・農村観光など	0.8	新しいテーマパーク	0.9	古鎮観光	2.1	延安・井岡山など革命記念地	1.1	レジャー村・農村観光など	1.7
14	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	0.4	レジャー村・農村観光など	0.9	レジャー村・農村観光など	1.2	レジャー村・農村観光など	1.1	王府井など最先端スポット	1.1
15	新しいテーマパーク	0.4	スキー・ゴルフなどスポーツリゾート	0.5	新しいテーマパーク	0.6	新しいテーマパーク	0.5	古鎮観光	0.6
	その他	0.8	その他	0.9	その他	0.9	その他	1.6	その他	1.7
	特になし	24.4	特になし	16.5	特になし	9.1	特になし	6.8	特になし	5.0
	(N=238)		(N=218)		(N=340)		(N=190)		(N=182)	

3-2 海外旅行について

（1）行きたい国・地域

海外旅行へ行くとしたら，どこへ行ってみたいかを尋ねた。その結果は表Ⅱ.3.7に示すとおりである。厳密には香港・マカオはすでに返還されており海外ではないが，国内ではなく，こちらへ入れた。また，調査時期がインド洋大津波から約1ヶ月後の2005年の1月下旬であったため，インド洋周辺の地域に関してはその影響があることも多少考慮しなければならない。

まず，1位，2位が香港，シンガポールであった。これは香港やシンガポールは同じ漢族が多く居住する国・地域であり，親近感や行くことに対する抵抗のなさが反映された結果であろう。また，3位がタイとなっているのは，東南アジア観光，特にタイ観光はすでに中国ではある程度行われており，近さやコスト等を含めて極めて現実的な海外旅行先という認識が定着しているからであろう。ここでは，日本は4位にランクされている。

表Ⅱ.3.7 行ってみたい国・地域（複数回答，n＝1054）

順位	国名・地域名	度数	順位	国名・地域名	度数
1	ホンコン	115	18	スペイン	9
2	シンガポール	94	19	モルディブ	8
3	タイ	75	19	台湾	8
4	日本	70	21	ブルネイ	4
5	フランス	64	22	フィリピン	2
6	オーストラリア	53	22	インドネシア	2
7	アメリカ	47	24	インド	1
8	マレーシア	46	24	南アフリカ共和国	1
9	イギリス	35	24	ベトナム	1
10	マカオ	32	24	トルコ	1
11	イタリア	24	24	カンボジア	1
12	ドイツ	23		ヨーロッパその他	8
13	韓国	16		地中海その他	1
14	カナダ	15		アフリカその他	1
15	エジプト	13		その他	1
16	ギリシャ	12		行きたい場所はない	261
17	ニュージーランド	10	合　計		1054

（2）日本について

そこで，日本に行く場合，具体的に日本のどんな場所へ行ってみたいかについて尋ねた。

まず日本に特に興味がないと回答した人は86.9%（531人）であり，具体的な場所として回答を示した人は14.1%（87人）であった。行ってみたい場所をあげた回答者数は行ってみたい国として日本を上げた人よりも多少多くなっている。

回答者87人の間での，「行ってみたい場所」は1位「東京・大阪など現代の中心的な

都市」，２位「富士山，日光など名所旧跡」，３位「北海道，沖縄，長野など美しい自然があるところ」，４位「東京ディズニーランド，ＵＳＪなど有名なテーマパーク」となった。１位，２位については，東京や大阪は日本を代表する大都市であり，富士山は日本のシンボルとされる山岳であることなど，日本へ行くならば日本をシンボライズするものを見たいというシンプルな回答である。３位については，日本の中の美しい場所として北海道，沖縄等が認知されていることがわかる。４位のテーマパークは，中国の旅行番組においても，日本への観光旅行の紹介でたびたび取り上げられるようになっており，それなりに知名度があるためであろう。

なお，日本に興味がないと回答した人の割合は年齢層によって違いが見られた。最も興味がないと回答した人の割合が高かったのは60歳台であり，85％と占めていた。以下，50歳台78％，40歳台68.6％，30歳台68.2％，20歳台56％と，年齢層が下がるにつれて，その割合も下降した。

表Ⅱ.3.8　日本で行ってみたい場所（複数回答,n=229）

順位	行きたい場所	度数	%
1	東京，大阪など現代の中心的な都市	65	28.4
2	富士山，日光など名所旧跡	57	24.9
3	北海道，沖縄，長野など美しい自然があるところ	35	15.3
4	東京ディズニーランド，ＵＳＪなど有名なテーマパーク	24	10.5
5	箱根，伊豆など温泉リゾート地	13	5.7
6	京都，奈良など日本の伝統文化の地	9	3.9
7	長崎，神戸，横浜などエキゾチックな港町	8	3.5
8	広島，熊野，白川郷など日本の世界遺産登録地	7	3.0
9	トヨタ，ホンダなど有名企業の産業観光施設	4	1.7
9	スキー場，ゴルフ場などスポーツリゾート地	4	1.7
11	三鷹の森ジブリ美術館など，日本のアニメ等に関するテーマパーク	2	0.9
12	秋葉原，日本橋など有名な電気街	1	0.4
13	金沢など日本情緒がある地方伝統都市	0	0

また，日本という言葉から思い浮かべるものについて質問した。その結果は表Ⅱ.3.9に示すとおりである。第１位は富士山，２位は日本鬼子・侵略者，３位は桜であった。

なお，表Ⅱ.3.10に示すように，日本イメージは年齢層によってかなりの変動がある。

たとえば，20歳台ではアニメ・マンガが５位にランクしているが，それ以上の年齢層ではこれほど上位には上がってこない。これは，この世代が日本のアニメやマンガに親しみながら成長したことと関連するのであろう。

40歳台，50歳台ではテレビ・ビデオ・カメラが桜を抜いて３位にランクインしている。これもこの世代の人々が改革開放後に触れた日本が，ソニーや日立など電化製品を通してであったことと関連しているであろう。

日本鬼子・侵略者は20歳台，40歳台，50歳台では第２位であるが，30歳台では第３位，

60歳台では第1位である。60歳台で日本鬼子・侵略者が第1位であることについては，特に解釈は必要ないであろう。2005年が終戦60年の年であり，本調査における60歳～65歳は日本との戦争中あるいは戦争終結直後の出生者である。また，30歳台は日本に対し最も許容的あるいは客観的な世代とでも言うのであろうか。

さらに，4位以下に注目すると，温泉が20歳台6位，30・40・50歳台5位，60歳台4位と，安定して高い位置につけていることがわかる。温泉は富士山，日本鬼子・侵略者，桜に続き，日本を代表するものと捉えられていると言えるであろう。一方，茶道・華道，柔道・剣道，武士といった日本の伝統文化に関する項目は全体にランクが低く，非常に認知度が低いことも理解できる。

表Ⅱ.3.9　日本のイメージ（複数回答，n=1504）

順位	内容	%（度数）	順位	内容	%（度数）
1	富士山	20.5　(308)	10	新幹線	2.7　(41)
2	日本鬼子・侵略者	14.7　(221)	11	男尊女卑	1.7　(26)
3	サクラ	12.5　(188)	11	茶道・華道	1.7　(26)
4	ビデオ・カメラ・テレビ	11.4　(172)	13	柔道・剣道・相撲	1.7　(25)
5	温泉	7.5　(114)	14	ファッション	1.4　(21)
6	スシ・サシミ	5.4　(81)	15	武士	1.4　(21)
7	自動車	4.1　(62)	16	アイドルドラマ	1.1　(17)
8	マンガ・アニメ	3.7　(55)		その他	4.8　(72)
9	和服	3.6　(54)		無回答	0.1　(1)

表Ⅱ.3.10　日本のイメージ－年齢による順位の変化

順位	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
1	富士山	富士山	富士山	富士山	侵略者
2	侵略者	桜	侵略者	侵略者	富士山
3	桜	侵略者	ビデオ・テレビ	ビデオ・テレビ	桜
4	ビデオ・テレビ	スシ・サシミ	桜	桜	ビデオ・カメラ
5	アニメ・マンガ	温泉	温泉	温泉	温泉（4）
6	温泉	ビデオ・テレビ	自動車	和服	スシ・サシミ
7	スシ・サシミ	新幹線	スシ・サシミ	自動車	和服
8	自動車	茶道・華道	アニメ・マンガ	新幹線	アニメ・マンガ
9	和服	自動車	和服	スシ・サシミ	男尊女卑（8）
10	男尊女卑	和服（9）	新幹線	男尊女卑	茶道・華道
11	新幹線	アニメ・マンガ	柔道・剣道(9)	アニメ・マンガ	武士（10）
12	ファッション	男尊女卑	茶道・華道	ファッション	自動車
13	柔道・剣道	アイドルドラマ	ファッション	茶道・華道	新幹線
14	武士(13)	柔道・剣道	アイドルドラマ	アイドルドラマ	柔道・剣道(13)
15	アイドルドラマ(13)	武士(14)	男尊女卑	武士	アイドルドラマ(13)
16	茶道・華道	ファッション(14)	武士	柔道・剣道	ファッション(13)

＊同率の場合は，（　）内に順位を示した

3-3　旅行観

（1）観光旅行に求めるもの

次に，観光旅行に何を求めるかを尋ねた。

なお，この設問は旅行という行為全般の中に求められるものとしての，リラックスできること，楽しいこと，友情や家族の絆の確認の3つと，個別の観光対象に求められるものとして大自然に触れること，珍しさ・目新しさがあること，知的満足が得られること等を混ぜ込んだ形で選択肢を作成した。

旅行という行為全般に共通するものでいうと，順位は上からリラックスできること，楽しいこと，友情や家族の絆の確認となった。ここから，現在，観光旅行に対し最も求められているものがリラックスであることがわかる。

また，個別の観光対象に求められる要素としては，上から大自然に触れること，珍しさ・目新しさがあること，知的満足が得られることの順となった。

表Ⅱ.3.11　　旅行に求めるもの（複数回答）

項　　目	度数	%
リラックスできること	358	32.6
楽しいこと	265	24.2
大自然に触れること	140	12.8
珍しさ・目新しさがあること	113	10.3
知的満足が得られること	82	7.5
友情や家族の絆の確認	48	4.4
美しいものを観賞できること	29	2.6
歴史の重みが感じられること	19	1.7
懐かしさが感じられること	16	1.5
おいしいものがあること	14	1.3
買い物を楽しめること	9	0.8
その他	4	0.4
合　　計	1097	100

（2）中国国内旅行において今後充実させるべきこと

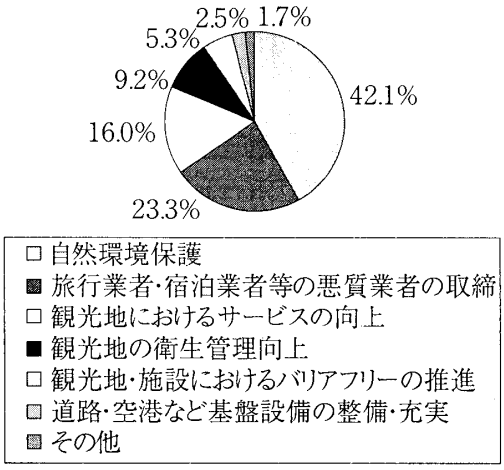
中国国内旅行に関して今後充実させるべきこととして，「自然環境保護」「旅行業者・宿泊業者等における悪質業者の取締」「観光地・施設におけるサービスの向上」「観光地・施設における衛生管理の向上」「観光地・施設におけるバリアフリー化の推進」「道路・空港など基盤設備の整備・充実」の6つの選択肢を用意し，何が最も重要かを質問した。

結果は，「自然環境保護」42.1%，「旅行業者・宿泊業者等における悪質業者の取締」23.3%，「観光地・施設におけるサービスの向上」16.0%，「観光地・施設における衛生管理の向上」9.2%，「観光地・施設におけるバリアフリー化の推進」5.3%，「道路・空港など基盤設備の整備・充実」2.5%の順となった。

「自然環境保護」は全体の42.1％と最も多くの人があげた項目であるが，特に20歳台56.0％，30歳台44.6％と若い年齢層において支持率が高く，また大学・大学院卒業52.1％，短大・専門学校卒業49.5％と高学歴層の支持率が高くなっていた。環境に関する関心は全体として高まっており，特に若年・高学歴層において顕著であることが理解できる。

「旅行業者・宿泊業者等における悪質業者の取締」は全体では23.3％を占めたが，年齢では50歳台31.7％，40歳台26.4％と中年層において支持率が高くなっていた。学歴では小学校・中学校卒業では30.3％を占め，最も高くなっていた。中年または比較的学歴が低い層では，安価で安心できる旅行への欲求が他の年齢層，学歴層よりも顕著となっている。

「観光地・施設における衛生管理の向上」「観光地・施設におけるバリアフリー化の推進」は60歳台の高齢層においてそれぞれ15.8％，22.8％と最も高い支持があった。ことに「観光地・施設におけるバリアフリー化の推進」は全体の5.3％に比べると22.8％は極めて高い割合であるといえる。バリアフリー化は中国の観光地においてはほぼ着手されていない状況であるが，高齢層にとっては自分自身に身近なことであり，ぜひ実現させたい課題として捉えられたことがわかる。



図Ⅱ.3.1　国内観光における今後の課題(n=606)

表Ⅱ.3.12　年齢層による違い（国内観光における今後の課題）

項　　目	20歳台		30歳台		40歳台		50歳台		60歳台	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
自然環境保護	61	56.0	37	44.6	71	36.8	65	39.6	21	36.8
旅行・宿泊業者等の悪質業者の取締	13	11.9	17	20.5	51	26.4	52	31.7	8	14.0
観光地・施設のサービスの向上	22	20.2	12	14.5	32	16.6	26	15.9	5	8.8
観光地の衛生管理の向上	9	8.3	9	10.8	20	10.4	9	5.5	9	15.8
観光地・施設のバリアフリー推進	0	0	2	2.4	10	5.2	7	4.3	13	22.8
道路・空港など基盤設備の整備充実	3	2.8	5	6.0	6	3.1	1	0.6	0	0
その他	1	0.9	1	1.2	3	1.6	4	2.4	1	1.8
合計	109	100	83	100	193	100	164	100	57	100

表Ⅱ.3.13　学歴による違い（国内観光における今後の課題）

項　　目	小・中学校		高　校		短　大		大卒以上	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
自然環境保護	60	33.7	93	40.8	52	49.5	49	52.1
旅行・宿泊業者等の悪質業者の取締	54	30.3	50	21.9	24	22.9	13	13.8
観光地・施設のサービスの向上	25	14.0	39	17.1	14	13.3	19	20.2
観光地の衛生管理の向上	16	9.0	27	11.8	6	5.7	7	7.4
観光地・施設のバリアフリー推進	18	10.1	12	5.3	2	1.9	0	0
道路・空港など基盤設備の整備充実	1	0.6	6	2.6	6	5.7	2	2.1
その他	4	2.2	1	0.4	1	1.0	4	4.3
合計	178	100	228	100	105	100	94	100

4．日常のレジャー・レクリエーション

4-1　全体傾向

日常のレジャー・レクリエーションおよび楽しみや贅沢としての消費活動として10の設問を設定した。それらは，外食に関連する項目としての「家族で食事に行く」「友人，同僚と食事に行く」，ぜいたく品の消費活動としての「花を買う」「個人消費のためのショッピングに行く」，都市的娯楽としての「映画，観劇などに行く」「カラオケ，バーなどに行く」，スポーツや身近なレジャーとしての「郊外の緑地，公園などに行く」「ボウリング，テニス，ゴルフなどをする」，健康，美容，リラクゼーションにかかわるものとしての「エステ，サウナ，マッサージなどに行く」「フィットネスクラブで運動をする」である。それぞれについての頻度を尋ねたが，その結果は表Ⅱ.4.1に示す通りである。

「しない」人の割合が高い項目も多いため，まず「する」人の合計でこれらの結果を比較する。すると，「友人，同僚と食事に行く」71%，「個人消費のためのショッピングに行く」71.0%，「家族で食事に行く」68.4%，「郊外の緑地，公園などへ行く」46.1%，「花を買う」39.2%，「映画，観劇などへ行く」37.7%，「カラオケ，バーなどへ行く」34.8%，「エステ，サウナ，マッサージなどへ行く」24.4%，「ボウリング，テニス，ゴ

ルフなどをする」15.5%，「フィットネスクラブで運動をする」11.5%の順となった。

友人や家族との外食，ショッピングは日常生活において広く行われているが，ボウリング・テニス・ゴルフなどのスポーツはまだそれほど普及していないことが見て取れた。また，サウナ・エステおよびフィットネスは日本においても定期的に通う人の割合は決して多くないであろう。そのことを考慮すると，ここからそれほど普及していないとはいい難い。

表Ⅱ.4.1　日常のレジャー・レクリエーション・単純集計結果

	週2-3回	週1回	月1回	年数回	年1-2回	数年1回	しない
花を買う	2.4 (15)	4.5 (28)	6.6 (41)	10.4 (64)	13.4 (83)	1.8 (11)	60.8 (376)
家族で食事に行く	4.9 (30)	12.6 (78)	12.1 (75)	19.9 (123)	13.8 (85)	5.2 (32)	31.6 (195)
友人，同僚と食事に行く	9.9 (61)	13.8 (85)	11.7 (72)	23.3 (144)	10.2 (63)	2.3 (14)	29.0 (179)
映画，観劇などに行く	1.8 (11)	2.8 (17)	4.7 (29)	11.8 (73)	12.5 (77)	4.2 (26)	62.3 (385)
個人消費のためのショッピングに行く	12.3 (76)	21.0 (130)	16.8 (104)	12.0 (74)	7.8 (48)	1.1 (7)	29.0 (179)
カラオケ，バーなどへ行く	4.5 (28)	7.0 (43)	7.6 (47)	8.7 (54)	6.1 (38)	0.8 (5)	65.2 (403)
郊外の公園・緑地などへ行く	2.9 (18)	5.2 (32)	7.4 (46)	14.6 (90)	12.3 (76)	3.7 (23)	53.9 (333)
エステ，サウナ，マッサージなどへ行く	2.6 (16)	5.3 (33)	6.1 (38)	5.2 (32)	3.7 (23)	1.5 (9)	75.6 (467)
ボウリング，テニス，ゴルフなどをする	0.8 (5)	0.8 (5)	2.9 (18)	4.2 (26)	4.2 (26)	2.6 (16)	84.5 (522)
アスレチック・ジムで運動をする	2.6 (16)	2.3 (14)	2.3 (14)	2.1 (13)	1.6 (10)	0.6 (4)	88.5 (547)

＊単位は%（度数），すべての項目のｎ数は618である。

4-2　外食

（1）家族で食事に行く

「家族で食事に行く」は性，年齢，学歴で有意差が見られた。

性別では，女性では45%が「しない」と回答したことに対し，男性で「しない」とした人の割合は16.9%であった。女性よりも男性の方が家族での外食をよく行っていることになる。この場合の家族での外食は，家族メンバー全員ではなく，父と子との外食ということになるのであろうか。

年齢では，30歳台と20歳台では逆転しているが，30歳台から上の層を見ると，若い層ほど「しない」と答えた人の割合が少なく，また頻度も高くなっていることがわかる。特に，60歳台では63.8%と他に比べて極端に高くなっている。また，20歳台と30歳台の逆転については，20歳台では未婚率が高く，家族での外食よりも友人などとの外食が多くなるためであろう。

学歴別では学歴が高くなればなるほど，「しない」とした人の割合が減少し，外食頻度が上がっていることが見て取れる。個人収入では5,000元以下と，5,001～15,000元の間で逆転しているが，5,001～15,000元以上に注目すると，収入が高くなればなるほど，「しない」とする人が減少し，頻度も上がっていることがわかる。同様に家庭の収入では，収入が高くなればなるほど「しない」とする人が減少し，頻度が上がっている。なお，個人収入の5,000元以下と5,001～15,000元との間での逆転は，5,000元以下の層には家庭の収入が比較的高い専業主婦や学生が含まれていることによる。

また，全体の中で特に際立った傾向として，30歳台，大学・大学院卒，30,001元以上の個人収入，80,001元以上の家庭収入の層では50％以上が月１回以上家族での外食を行っていることが見られた。これらの人びとの間では，外食がイベントというよりも，もっと日常的なものとなっていると言えるであろう。一方，60歳台の人の63.8％が「しない」とした。これは，高齢層の場合，近年盛んになってきた外食の習慣になじまず，伝統行事としての家族イベントも家庭で行っていたかつての習慣にならうケースが多いためであろう。

表Ⅱ.4.2　性別分布（家族での外食）

頻　度	男　性	女　性
週１回以上	19.3 (57)	15.7 (51)
月１回	12.5 (37)	11.8 (38)
年数回	24.0 (71)	16.1 (52)
年１-２回	18.9 (56)	9.0 (29)
数年１回	8.4 (25)	2.2 (7)
しない	16.9 (50)	45.0 (145)
合　計	100 (296)	100 (322)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.3　年齢層別分布（家族での外食）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
週１回以上	28.2 (31)	31.8 (27)	15.8 (31)	10.1 (17)	3.4 (2)
月１回	10.9 (12)	20.0 (17)	13.3 (26)	10.7 (18)	3.4 (2)
年数回	21.8 (24)	18.8 (16)	21.9 (43)	16.6 (28)	20.7 (12)
年１-２回	9.1 (10)	10.6 (9)	14.3 (28)	19.5 (33)	8.6 (5)
数年１回	4.5 (5)	2.4 (2)	6.6 (13)	7.1 (12)	0.0 (0)
しない	25.5 (28)	16.5 (14)	28.1 (55)	36.1 (61)	63.8 (37)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.4　学歴別分布（家族での外食）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
週１回以上	9.2 (17)	15.1 (35)	21.7 (23)	33.3 (32)
月１回	7.1 (13)	12.1 (28)	17.0 (18)	16.7 (16)
年数回	16.3 (30)	20.8 (48)	25.5 (27)	18.8 (18)
年１-２回	13.0 (24)	14.7 (34)	14.2 (15)	12.5 (12)
数年１回	4.3 (8)	8.7 (20)	2.8 (3)	1.0 (1)
しない	50.0 (92)	28.6 (66)	18.9 (20)	17.7 (17)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.5　個人収入別分布（家族での外食）

頻　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
週１回以上	15.8 (10)	5.8 (15)	22.3 (37)	35.7 (45)
月１回	3.2 (2)	8.5 (22)	13.9 (23)	20.6 (26)
年数回	7.9 (5)	18.5 (48)	23.5 (39)	24.6 (31)
年１-２回	7.9 (5)	13.8 (36)	18.7 (31)	10.3 (13)
数年１回	1.6 (1)	7.3 (19)	6.6 (11)	0.8 (1)
しない	63.5 (40)	46.2 (120)	15.1 (25)	7.9 (10)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.6　家庭収入別分布（家族での外食）

頻　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
週１回以上	4.9 (7)	5.8 (7)	18.3 (32)	30.7 (27)	38.2 (34)
月１回	4.9 (7)	10.8 (13)	11.4 (20)	15.9 (14)	21.3 (19)
年数回	18.2 (26)	17.5 (21)	20.6 (36)	21.6 (19)	23.6 (21)
年１-２回	11.2 (16)	20.0 (24)	16.0 (28)	12.5 (11)	6.7 (6)
数年１回	7.7 (11)	6.7 (8)	6.3 (11)	2.3 (2)	0.0 (0)
しない	53.1 (76)	39.2 (47)	27.4 (48)	17.0 (15)	10.1 (9)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

（２）友人・同僚と食事に行く

「友人・同僚と食事に行く」では，性，年齢，学歴，個人収入，家族収入の全てにおいて有意差が見られた。

性別では，「家族で食事に行く」と同様に，女性の方が男性よりも「しない」と答えた人の割合が高くなっていた。

年齢では，「しない」とした人の割合は20歳台と30歳台で逆転しているが，若年層ほど少ない傾向があった。また，月１回以上外食する人の割合を見ると，20歳台では67.3％，30歳台では52.9％，40歳台では31.7％，50歳台では18.9％，60歳台では6.4％と

なっており，20歳台，30歳台の若年層において特に高い割合であるとともに，年齢層が上がるにつれて減少している。

学歴では，学歴が高くなればなるほど「しない」とする人の割合が減少し，外食の頻度もあがっている。短大，大学・大学院卒では月１回以上する人の割合は，54％と半数を超える。

個人収入では，収入が上がれば上がるほど「しない」とした人の割合は減少し，30,001元以上では月１回以上という人の割合が62.7％に達している。同様に，家庭の収入においても，収入が上がれば上がるほど「しない」という人の割合が減少し，80,001元以上では月１回以上という人の割合が57.3％に上っている。

まとめると，20歳台，30歳台，短大卒，大学・大学院卒，30,001元以上の個人収入，50,001元以上の家庭収入の層では月１回以上する人の割合は50％を超えており，「家族での外食」と同様に「友人・同僚との外食」もイベントというよりもむしろ日常的なものとなっていることが理解できる。

表Ⅱ.4.7　性別分布（友人との外食）

頻　　度	男　　性	女　　性
週１回以上	33.1　(98)	14.9　(48)
月１回	13.2　(39)	10.2　(33)
年数回	26.4　(78)	20.5　(66)
年１-２回	9.8　(29)	10.6　(34)
数年１回	3.4　(10)	1.2　(４)
しない	14.2　(42)	42.5　(137)
合　　計	100　(296)	100　(322)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.8　年齢層別分布（友人との外食）

頻　　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
週１回以上	50.0　(55)	29.4　(25)	21.0　(41)	13.6　(23)	3.4　(２)
月１回	17.3　(19)	23.5　(20)	10.7　(21)	5.9　(10)	3.4　(２)
年数回	11.8　(13)	25.9　(22)	26.0　(51)	29.0　(49)	15.5　(９)
年１-２回	6.4　(７)	10.6　(９)	13.3　(26)	11.2　(19)	3.4　(２)
数年１回	0.0　(０)	0.0　(０)	3.6　(７)	4.1　(７)	0.0　(０)
しない	14.5　(16)	10.6　(９)	25.5　(50)	36.1　(61)	74.1　(43)
合　　計	100　(110)	100　(85)	100　(196)	100　(169)	100　(58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.9　学歴別分布（友人との外食）

頻　　度	小・中学校	高　　校	短　　大	大学以上
週１回以上	8.1 (15)	21.2 (49)	40.6 (43)	39.6 (38)
月１回	7.1 (13)	13.0 (30)	14.2 (15)	14.6 (14)
年数回	19.6 (36)	25.1 (58)	21.7 (23)	28.1 (27)
年１-２回	12.0 (22)	9.1 (21)	9.4 (10)	10.4 (10)
数年１回	2.7 (5)	3.5 (8)	0.9 (1)	0.0 (0)
しない	50.5 (93)	28.1 (65)	13.2 (14)	7.3 (7)
合　　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.10　個人収入別分布（友人との外食）

頻　　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
週１回以上	15.9 (10)	7.7 (20)	33.1 (55)	47.6 (60)
月１回	6.3 (4)	10.0 (26)	13.3 (22)	15.1 (19)
年数回	9.5 (6)	20.8 (54)	30.1 (50)	26.2 (33)
年１-２回	3.2 (2)	13.1 (34)	9.0 (15)	9.5 (12)
数年１回	1.6 (1)	3.5 (9)	2.4 (4)	0.0 (0)
しない	63.5 (40)	45.0 (117)	12.0 (20)	1.6 (2)
合　　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.11　家庭収入別分布（友人との外食）

頻　　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
週１回以上	7.5 (11)	13.3 (16)	24.6 (43)	43.2 (38)	41.6 (37)
月１回	7.7 (11)	8.3 (10)	13.7 (24)	13.6 (12)	15.7 (14)
年数回	19.6 (28)	24.2 (29)	24.6 (43)	19.3 (17)	29.2 (26)
年１-２回	10.5 (15)	12.5 (15)	12.0 (21)	6.8 (6)	6.7 (6)
数年１回	5.6 (8)	1.7 (2)	2.3 (4)	0.0 (0)	0.0 (0)
しない	49.0 (70)	40.0 (48)	22.9 (40)	17.0 (15)	6.7 (6)
合　　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

4-3　買い物

（１）自分のものを買うためにデパート・専門店などに行く

自分のものを買うためにデパート・専門店などに行くでは，性，年齢層，学歴，個人収入，家庭収入のすべてにおいて有意差が見られた。

性別では，「しない」と答えた人の割合は女性41.3％，男性15.5％であり，女性よりも男性の方が自分のための買い物をよく行っていた。

年齢では，20歳台，30歳台では「しない」と答えた人の割合はそれぞれ14.5％，

15.3%であるが，年齢が上がるに従い増加し，60歳台では58.6%と6割近くになった。また，20歳台，30歳台では，週1回以上と答えた人の割合は45.5%，43.5%と，4割以上に上っていた。

学歴では，高学歴になるほど「しない」とした人の割合が減少し，「週1回以上」と行くとした人の割合が増加した。大学・大学院卒では，「週1回以上」とした人の割合は50%を超えていた。

個人収入・家庭収入では，収入が高くなるほど「しない」とした人の割合が減少し，「週1回以上」行くという人の割合が増加した。特に，個人収入の30,001元以上，家庭収入の50,001元以上の層では，5割を超える人が「週1回以上」と回答した。

外食と同様に，ちょっとしたショッピングも若年層，高学歴，高収入層において，ごく日常的に行う気晴らし的行為となっていることがわかる。

表Ⅱ.4.12　性別分布（買い物）

頻　度	男　性	女　性
週1回以上	33.8 (100)	32.9 (106)
月1回	22.0 (65)	12.1 (39)
年数回	16.2 (48)	8.1 (26)
年1-2回	11.1 (33)	4.7 (15)
数年1回	1.4 (4)	0.9 (3)
しない	15.5 (46)	41.3 (133)
合　計	100 (296)	100 (322)

＊単位：%（度数）

表Ⅱ.4.13　年齢層別分布（買い物）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
週1回以上	45.5 (50)	43.5 (37)	30.1 (59)	30.2 (51)	15.5 (9)
月1回	17.3 (19)	27.1 (23)	19.9 (39)	9.5 (16)	12.1 (7)
年数回	13.6 (15)	8.2 (7)	16.3 (32)	10.7 (18)	3.4 (2)
年1-2回	9.1 (10)	4.7 (4)	7.1 (14)	8.3 (14)	10.3 (6)
数年1回	0.0 (0)	1.2 (1)	1.0 (2)	2.4 (4)	0.0 (0)
しない	14.5 (16)	15.3 (13)	25.5 (50)	39.1 (66)	58.6 (34)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：%（度数）

表Ⅱ.4.14　学歴別分布（買い物）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
週１回以上	19.6 (36)	31.6 (73)	45.2 (48)	50.0 (48)
月１回	13.6 (25)	15.2 (35)	20.8 (22)	22.9 (22)
年数回	9.2 (17)	15.2 (35)	11.3 (12)	10.4 (10)
年１-２回	7.6 (14)	9.1 (21)	5.7 (6)	7.3 (7)
数年１回	0.5 (1)	2.6 (6)	0.0 (0)	0.0 (0)
しない	49.5 (91)	26.4 (61)	17.0 (18)	9.4 (9)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.15　個人収入別分布（買い物）

頻　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
週１回以上	19.0 (12)	21.9 (57)	39.2 (65)	56.3 (71)
月１回	7.9 (5)	15.0 (39)	19.9 (33)	20.6 (26)
年数回	7.9 (5)	9.2 (24)	18.1 (30)	11.1 (14)
年１-２回	7.9 (5)	9.2 (24)	7.8 (13)	4.8 (6)
数年１回	1.6 (1)	1.5 (4)	1.2 (2)	0.0 (0)
しない	55.6 (35)	43.1 (112)	13.9 (166)	7.1 (9)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.16　家庭収入別分布（買い物）

頻　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
週１回以上	16.7 (24)	20.9 (25)	34.3 (60)	52.3 (46)	56.2 (50)
月１回	14.7 (21)	16.7 (20)	16.6 (29)	21.6 (19)	15.7 (14)
年数回	8.4 (12)	12.5 (15)	16.6 (29)	10.2 (9)	9.0 (8)
年１-２回	11.9 (17)	10.8 (13)	6.9 (12)	1.1 (1)	5.6 (5)
数年１回	2.1 (3)	1.7 (2)	1.1 (2)	0.0 (0)	0.0 (0)
しない	46.2 (66)	37.5 (45)	24.6 (43)	14.8 (13)	13.5 (12)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

（２）花を買う

花を買うでは，年齢，学歴，個人収入，家庭収入において有意差が見られた。

年齢では，「しない」と答えた人の割合は30歳台において最も低く，40歳台，20歳台，50歳台，60歳台の順となった。20歳台を除いて考えると，年齢が上がれば上がるほど，「しない」とした人の割合は減少したことになる。20歳台に「しない」人が多いことについては，20歳台は未婚率が高く，家庭内を飾るといったことに対する興味や必要性が少ないことによるのであろう。

学歴では，高学歴となるほど「しない」とする人の割合が減少し，「月１回以上」と

する人の割合が増加した。また，個人収入，家庭収入においては，収入が高くなればなるほど「しない」とした人の割合が減少し，「月１回以上」とした人の割合が増加した。

以上から，「花を買う」といった非実用的な生活の潤いのための消費も，どちらかといえば若年層，高学歴，高収入の層においてよく行われていることがわかる。

表Ⅱ.4.17　年齢層別分布（花を買う）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
月１回以上	17.2 (19)	22.4 (19)	9.2 (18)	14.2 (24)	6.9 (4)
年数回	8.2 (9)	11.8 (10)	11.7 (23)	9.5 (16)	10.3 (6)
年１-２回	10.0 (11)	20.0 (17)	17.3 (34)	10.7 (18)	5.2 (3)
数年１回	3.6 (4)	2.4 (2)	2.0 (4)	0.6 (1)	0.0 (0)
しない	60.9 (67)	43.5 (37)	59.7 (117)	65.1 (110)	77.6 (45)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.18　年齢層別分布（花を買う）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
月１回以上	6.5 (12)	11.3 (26)	18.8 (20)	27.1 (26)
年数回	9.8 (18)	9.1 (21)	9.4 (10)	15.6 (15)
年１-２回	8.7 (16)	13.9 (32)	21.7 (23)	12.5 (12)
数年１回	1.1 (2)	2.2 (5)	2.8 (3)	1.0 (1)
しない	73.9 (136)	63.6 (147)	47.2 (50)	43.8 (42)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.19　個人収入別分布（花を買う）

頻　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
月１回以上	6.3 (4)	3.8 (10)	18.7 (31)	30.9 (39)
年数回	1.6 (1)	10.0 (26)	12.0 (20)	12.7 (16)
年１-２回	12.7 (8)	13.1 (34)	10.2 (17)	18.3 (23)
数年１回	0.0 (0)	2.3 (6)	1.2 (2)	2.4 (3)
しない	79.4 (50)	70.8 (184)	57.8 (96)	35.7 (45)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.20　家庭収入別分布（花を買う）

頻　　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
月１回以上	4.2 （6）	11.7 （14）	8.7 （15）	22.8 （20）	32.8 （29）
年数回	6.3 （9）	9.2 （11）	12.0 （21）	12.5 （11）	12.4 （11）
年１-２回	14.0 （20）	9.2 （11）	11.4 （20）	15.9 （14）	19.1 （17）
数年１回	1.4 （2）	1.7 （2）	1.7 （3）	3.4 （3）	1.1 （1）
しない	74.1 （106）	68.3 （82）	66.3 （116）	45.5 （40）	34.8 （31）
合　　計	100 （143）	100 （120）	100 （175）	100 （88）	100 （89）

＊単位：％（度数）

4-4　都市的娯楽

（1）映画・観劇などに行く

「映画・観劇などに行く」は，やはり性，学歴，個人収入，家庭収入のすべてにおいて有意差が認められた。

性別では女性よりも男性において出かける頻度が高かった。

年齢では，年齢層が上がれば上がるほど「しない」とする人が増加した。特に，60歳台では８割以上の人が「しない」と答えた。逆に20歳台では「月１回以上」という人が28.2％あった。

学歴では，高学歴になればなるほど「しない」とする人の割合が減少した。同様に，「個人収入」「家庭収入」においても，収入が上がれば上がるほど「しない」とした人の割合が減少した。

以上のように，「映画・観劇などに行く」も若年層，高学歴，高収入の層においてよく行われおり，一方高齢層，低学歴層，低収入層では非常に行われる割合が少ないことが理解できる。

表Ⅱ.4.21　性別分布（映画・観劇）

頻　　度	男　　性	女　　性
月１回以上	12.6 （37）	6.2 （20）
年数回	13.2 （39）	10.6 （34）
年１-２回	11.8 （35）	13.0 （42）
数年１回	4.7 （14）	3.7 （12）
しない	57.8 （171）	66.5 （214）
合　　計	100 （296）	100 （322）

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.22　年齢層別分布（映画・観劇）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
月1回以上	28.2 (31)	13.0 (11)	4.0 (8)	3.0 (5)	3.4 (2)
年数回	21.8 (24)	11.8 (10)	12.2 (24)	7.7 (13)	3.4 (2)
年1-2回	14.5 (16)	21.2 (18)	11.7 (23)	9.5 (16)	6.9 (4)
数年1回	2.7 (3)	7.1 (6)	4.1 (8)	4.1 (7)	3.4 (2)
しない	32.7 (36)	47.1 (40)	67.9 (133)	75.7 (128)	82.8 (48)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.23　学歴別分布（映画・観劇）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
月1回以上	2.6 (4)	7.0 (16)	16.9 (18)	18.9 (18)
年数回	3.8 (7)	9.1 (21)	16.0 (17)	28.1 (27)
年1-2回	7.1 (13)	10.8 (25)	19.8 (21)	18.8 (18)
数年1回	4.3 (8)	4.3 (10)	4.7 (5)	3.1 (3)
しない	82.1 (151)	68.8 (159)	42.5 (45)	31.3 (30)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.24　個人収入別分布（映画・観劇）

頻　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
月1回以上	11.1 (7)	3.5 (9)	10.8 (18)	18.3 (23)
年数回	6.3 (4)	6.5 (17)	13.9 (23)	20.6 (26)
年1-2回	11.1 (7)	8.1 (21)	14.5 (24)	19.8 (25)
数年1回	0.0 (0)	5.0 (13)	3.6 (6)	5.6 (7)
しない	71.4 (45)	76.9 (200)	57.2 (95)	35.7 (45)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.25　家庭収入別分布（映画・観劇）

頻　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
月1回以上	6.3 (9)	5.0 (6)	9.2 (16)	10.2 (9)	19.1 (17)
年数回	6.3 (9)	6.7 (8)	11.4 (20)	15.9 (14)	21.3 (19)
年1-2回	6.3 (9)	7.5 (9)	14.9 (26)	13.6 (12)	23.6 (21)
数年1回	2.1 (3)	5.7 (7)	4.0 (7)	8.0 (7)	2.2 (2)
しない	79.0 (113)	75.0 (90)	60.6 (106)	52.3 (46)	33.7 (30)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

（2）カラオケ，バーなどへ行く

カラオケ・バーなどへ行くでも，性，年齢，学歴，個人収入，家庭収入のすべてにおいて５％未満の有意確率を得た。期待値５未満のセル数が20％を超えるものもあるが，全体に明確な傾向を示しているので，提示しておく。

性別では，他の項目と同様に，女性よりも男性において行く頻度がやや高くなっていた。

年齢では，若年層ほど頻度が高く，年齢が上がるにつれて頻度が減る傾向にあった。特に，年齢間の差異が非常に大きく，20歳台では「月１回以上」は41.8％あったが，60歳台では「月１回以上」という人はおらず，９割以上が「しない」と答えた。

また，学歴では高学歴ほど，個人収入・家庭収入では収入が高いほど行く頻度が高くなっていた。ただ，学歴間の差異，収入間の差異は年齢間の差異ほど大きくはなかった。このことから，カラオケやバーへ行って遊ぶことは，特に若年層に支持される日常のレジャーであることがわかる。

表Ⅱ.4.26　性別分布（バー・カラオケ）

頻　度	男　性	女　性
月１回以上	24.0 (71)	14.6 (47)
年数回	10.8 (32)	6.8 (22)
年１-２回	3.7 (11)	8.4 (27)
数年１回	1.4 (4)	0.3 (1)
しない	60.1 (178)	69.9 (225)
合　計	100 (296)	100 (322)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.27　年齢層別分布（バー・カラオケ）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
月１回以上	41.8 (46)	18.9 (16)	16.8 (33)	12.4 (21)	0.0 (0)
年数回	20.9 (23)	9.4 (8)	7.1 (14)	4.7 (8)	3.4 (2)
年１-２回	7.3 (8)	11.8 (10)	6.6 (13)	4.1 (7)	1.7 (1)
数年１回	1.8 (2)	1.2 (1)	0.0 (0)	1.2 (2)	0.0 (0)
しない	28.2 (31)	58.8 (50)	69.4 (136)	77.5 (131)	94.8 (55)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.28　学歴別分布（バー・カラオケ）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
月１回以上	8.2 (15)	21.6 (50)	22.6 (24)	30.2 (29)
年数回	3.8 (7)	6.5 (15)	14.2 (15)	17.7 (17)
年１-２回	1.6 (3)	4.8 (11)	13.2 (14)	10.4 (10)
数年１回	0.5 (1)	0.4 (1)	0.0 (0)	3.1 (3)
しない	85.9 (158)	66.7 (154)	50.0 (53)	38.5 (37)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.29　個人収入別分布（バー・カラオケ）

頻　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
月１回以上	8.0 (5)	10.8 (28)	27.1 (45)	31.7 (40)
年数回	11.1 (7)	5.0 (13)	8.4 (14)	15.9 (20)
年１-２回	3.2 (2)	3.1 (8)	6.0 (10)	14.3 (18)
数年１回	1.6 (1)	0.8 (2)	0.6 (1)	0.8 (1)
しない	76.2 (48)	80.4 (209)	57.8 (96)	37.3 (47)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.30　家庭収入別分布（バー・カラオケ）

頻　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
月１回以上	9.8 (14)	16.7 (20)	20.0 (35)	25.0 (22)	30.3 (27)
年数回	6.3 (9)	4.2 (5)	9.1 (16)	11.4 (10)	15.7 (14)
年１-２回	2.8 (4)	0.8 (1)	4.6 (8)	17.0 (15)	11.2 (10)
数年１回	0.0 (0)	0.8 (1)	1.7 (3)	0.0 (0)	1.1 (1)
しない	81.1 (116)	77.5 (93)	64.6 (113)	46.6 (41)	41.6 (37)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

4-5　リラクゼーション，フィットネス

（1）エステ・サウナ・マッサージなどへ行く

エステ・サウナ・マッサージなどへ行くでは，年齢・学歴・個人収入・家庭収入において５％の未満の有意確率を得た。期待値５％未満のセル数20％を超えるものも多いが，明らかな傾向が見出せるので示しておく。

年齢では，「しない」とした人の割合はその層が上がるほど増加した。特に60歳台では96.6％と，ほとんどの人がしないと回答した。一方，20歳台，30歳台では，「月１回以上」という人が20％を超えていた。

学歴では，やはり高学歴ほど「行く」とした人の割合が増加し，大学・大学院卒では「月１回以上」が20％を超えた。個人収入，家庭収入においても，収入が高くなるほど

行く人の割合が増加した。特に，30,001元以上の個人収入層においては，49.2％と半数近くが「月１回以上」と回答した。

エステやサウナは中国においては比較的新しい施設であるが，こういった施設の利用も若年層，高学歴層・高収入層に多いことがわかる。また，一人で行くことも多いものであるため，その中でも特に個人収入の高い層に多いことがわかる。

表Ⅱ.4.31　年齢層別分布（エステ・サウナ）

頻　　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
月１回以上	25.5 (28)	22.4 (19)	13.3 (26)	8.3 (14)	0.0 (0)
年数回	7.3 (8)	4.7 (4)	6.6 (13)	3.6 (6)	1.7 (1)
年１-２回	8.2 (9)	3.5 (3)	4.1 (8)	1.2 (2)	1.7 (1)
数年１回	1.8 (2)	3.5 (3)	1.0 (2)	1.2 (2)	0.0 (0)
しない	57.3 (63)	65.9 (56)	75.0 (147)	85.8 (145)	96.6 (56)
合　　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.32　学歴別分布（エステ・サウナ）

頻　　度	小・中学校	高　　校	短　　大	大学以上
月１回以上	7.6 (14)	12.9 (23)	18.8 (20)	23.0 (22)
年数回	2.7 (5)	4.3 (10)	9.4 (10)	7.3 (7)
年１-２回	0.5 (1)	5.6 (13)	5.7 (6)	3.1 (3)
数年１回	0.0 (0)	2.2 (5)	0.0 (0)	4.2 (4)
しない	89.1 (164)	74.9 (173)	66.0 (70)	62.5 (60)
合　　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.33　個人収入別分布（エステ・サウナ）

頻　　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
月１回以上	3.2 (2)	6.9 (18)	16.3 (27)	49.2 (62)
年数回	4.8 (3)	2.7 (7)	6.0 (10)	31.0 (39)
年１-２回	3.2 (2)	2.3 (6)	4.8 (8)	9.5 (12)
数年１回	1.6 (1)	0.0 (0)	1.2 (2)	5.6 (7)
しない	87.3 (55)	88.1 (229)	71.7 (119)	4.8 (6)
合　　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.34 家庭収入別分布（エステ・サウナ）

頻　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
月１回以上	4.9 （7）	8.3 （10）	13.2 （23）	27.3 （24）	24.7 （22）
年数回	1.4 （2）	2.5 （3）	5.7 （10）	6.8 （6）	12.4 （11）
年1-2回	3.5 （5）	1.7 （2）	5.7 （10）	3.4 （3）	3.4 （3）
数年１回	0.7 （1）	0.0 （0）	1.1 （2）	1.1 （1）	5.6 （5）
しない	89.5 (128)	87.5 (105)	74.3 (130)	61.4 (54)	53.9 (48)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

（2）フィットネスクラブへ行く

フィットネスクラブへ行くでは，年齢・学歴・個人収入・家庭収入において有意確率５％未満の水準を満たした。ただ，「しない」とした人の割合がもともと全体の８割を超えており，期待値５未満のセル数は全て20％を超えている。しかし，やはりはっきりとした傾向が見られたので，ここに上げておく。

年齢では，「しない」とした人の割合は20歳台，30歳台では73.6％，75.3％であったが，40歳台，50歳台，60歳台ではその割合は90％を越えており，特に60歳台では98.3％に上った。

学歴では，低学歴ほど「しない」人の割合が多く，「小・中学校卒」では98.4％に上っている。

個人収入では，「しない」とした人の割合は30,001元以上の層では，75.4％であるが，それ以下では87.3％～94.6％となっている。同様に，家庭収入では，80,001元以上では67.4％であるが，それ以下では88％～95.1％の間にある。このように「個人収入」「家庭収入」ともに，特に収入の高い層において，「する」人の割合が高くなっている。

なお，フィットネスクラブは日常の健康管理やダイエットのために利用するものであり，「する」とした人の中で「月１回以上」行う人の割合が高いことが特徴である。この特徴に即した「月１回以上」行う人が際立って多い層は，大学・大学院卒（25.1％），家庭収入80,001元以上（20.2％）であることがわかる。このように，ひとつの層の４分の１から５分の１の人がフィットネスクラブを恒常的に利用しているというのは，日本の現状と比較しても決して少ない数値ではないであろう。高学歴，高収入層ではそのライフスタイルの一環として，健康管理やダイエットに非常に注意を払い始めたことがうかがわれる。

表Ⅱ.4.34　年齢層別分布（フィットネスクラブ）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
月１回以上	14.5 (16)	15.3 (13)	6.1 (12)	1.8 (3)	0.0 (0)
年数回	7.3 (8)	3.5 (3)	0.0 (0)	0.6 (1)	1.7 (1)
年１-２回	3.6 (4)	3.5 (3)	1.5 (3)	0.0 (0)	0.0 (0)
数年１回	0.9 (1)	2.4 (2)	0.0 (0)	0.6 (1)	0.0 (0)
しない	73.6 (81)	75.3 (64)	92.3 (181)	97.0 (164)	98.3 (57)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.35　学歴別分布（フィットネスクラブ）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
月１回以上	0.5 (1)	4.4 (10)	8.5 (9)	25.1 (24)
年数回	0.5 (1)	1.3 (3)	4.7 (5)	4.2 (4)
年１-２回	0.0 (0)	1.7 (4)	2.8 (3)	3.1 (3)
数年１回	0.5 (1)	0.4 (1)	0.9 (1)	1.0 (1)
しない	98.4 (181)	92.2 (213)	83.0 (88)	66.7 (64)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.36　個人収入別分布（フィットネスクラブ）

頻　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
月１回以上	6.4 (4)	2.7 (7)	5.4 (9)	18.3 (23)
年数回	3.2 (2)	0.8 (2)	3.0 (5)	3.2 (4)
年１-２回	3.2 (2)	1.5 (4)	1.2 (2)	1.6 (2)
数年１回	0.0 (0)	0.4 (1)	0.6 (1)	1.6 (2)
しない	87.3 (55)	94.6 (246)	89.8 (149)	75.4 (95)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.37　家庭収入別分布（フィットネスクラブ）

頻　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
月１回以上	2.8 (4)	4.2 (5)	6.9 (12)	4.5 (4)	20.2 (18)
年数回	0.7 (1)	0.8 (1)	2.9 (5)	1.1 (1)	5.6 (5)
年１-２回	1.4 (2)	0.0 (0)	2.3 (4)	1.1 (1)	3.4 (3)
数年１回	0.0 (0)	0.8 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	3.4 (3)
しない	95.1 (136)	94.2 (113)	88.0 (154)	93.2 (82)	67.4 (60)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

4-6　スポーツ，レクリエーション

（1）郊外の公園や緑地などへ行く

「郊外の公園や緑地などへ行く」では，性，年齢，学歴，個人収入，家庭収入の全てに有意差が見られた。

性別では女性よりも明らかに男性の頻度が高くなっている。

年齢では，「しない」とした人の割合に注目すると，20歳台，30歳台は40.0%，41.2%とほぼ変化がなく，40歳台は55.6%と上昇する。そして，50歳台，60歳台では63.3%，65.5%となり，いわば階段状に上昇している。また，20歳台と60歳台の差は15.5ポイントであり，他の項目に比べると，変化の割合は小さかった。これは，この項目が他の項目に比べるとどの年代にも受け入れやすいレクリエーションであることを反映しているのであろう。

学歴では，やはり他と同様にに学歴が高くなるほど「しない」という人の割合は減少した。

個人収入，家庭収入では，全体としてみれば収入が上がるほど「しない」という人の割合は減少する傾向にあるが，個人収入の5,000元以下と5,001～15,000元で，また家庭収入の30,001元～50,000元と50,001元～80,000元の間でわずかに逆転するなど，やはり階段状に減少する傾向がみられた。

表Ⅱ.4.38　性別分布（公園・緑地）

頻　度	男　性	女　性
月1回以上	21.6 (64)	9.9 (32)
年数回	16.6 (49)	12.7 (41)
年1-2回	11.8 (35)	12.7 (41)
数年1回	5.1 (15)	2.5 (8)
しない	44.9 (133)	62.1 (200)
合　計	100 (296)	100 (322)

＊単位：%（度数）

表Ⅱ.4.39　年齢層別分布（公園・緑地）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
月1回以上	16.4 (18)	28.3 (24)	10.2 (20)	14.3 (24)	17.2 (10)
年数回	24.5 (27)	17.6 (15)	14.3 (28)	8.9 (15)	8.6 (5)
年1-2回	14.5 (16)	9.4 (8)	14.8 (29)	11.2 (19)	6.9 (4)
数年1回	4.5 (5)	3.5 (3)	5.1 (10)	2.4 (2)	1.7 (1)
しない	40.0 (44)	41.2 (35)	55.6 (109)	63.3 (107)	65.5 (38)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：%（度数）

表Ⅱ.4.40　学歴別分布（公園・緑地）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
月１回以上	12.5 (23)	14.3 (33)	16.0 (17)	24.0 (23)
年数回	7.6 (14)	12.1 (28)	20.8 (22)	27.1 (26)
年１-２回	6.5 (12)	13.4 (31)	17.0 (18)	15.6 (15)
数年１回	3.8 (7)	3.0 (7)	8.5 (9)	0.0 (0)
しない	69.6 (128)	57.1 (132)	37.7 (40)	33.3 (32)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.41　個人収入別分布（公園・緑地）

頻　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001～
月１回以上	11.2 (7)	11.2 (29)	17.5 (29)	23.8 (39)
年数回	12.7 (8)	9.6 (25)	17.5 (29)	21.4 (27)
年１-２回	9.5 (6)	8.8 (23)	12.0 (20)	21.4 (27)
数年１回	1.6 (1)	3.5 (9)	6.0 (10)	2.4 (3)
しない	65.1 (41)	66.9 (174)	47.0 (78)	31.0 (39)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (166)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.42　家庭収入別分布（公園・緑地）

頻　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
月１回以上	13.3 (19)	10.8 (13)	17.1 (30)	13.6 (12)	23.6 (21)
年数回	9.1 (13)	10.8 (13)	17.1 (30)	13.6 (12)	23.6 (21)
年１-２回	7.0 (10)	10.8 (13)	12.0 (21)	12.5 (11)	23.6 (21)
数年１回	2.8 (4)	6.7 (8)	2.9 (5)	6.8 (6)	0.0 (0)
しない	67.8 (97)	60.8 (73)	50.9 (89)	53.4 (47)	29.2 (26)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (175)	100 (88)	100 (89)

＊単位：％（度数）

（２）ボウリング，テニス，ゴルフなどをする

ボウリング，テニス，ゴルフなどをするでは，年齢・学歴・個人収入・家庭収入において有意確率５％未満の水準を満たした。ただ，「しない」とした人の割合がもともと全体の８割を超えており，すべてにおいて期待値５未満のセル数が20％を超えており統計上有意とはみなせない。しかしながら，はっきりとした傾向が見られたので，ここに上げておく。

性別では女性よりも男性においてわずかに「する」頻度が高かった。

年齢では20歳台，30歳台では30％前後の人が頻度はともかく「する」としたが，40歳台では13.3％，50歳代，60歳代では7.1％，3.4％と，年齢が上がるに従い階段状に減少

した。

学歴では，高学歴ほど「する」とした人の割合が増加した。小・中学校卒ではわずかに1.2％であるが，大学・大学院卒では33.3％となった。個人収入では5,000元以下と5,001~15,000元の間で逆転があったが，全体に収入があがるほど「する」とした人の割合は増加した。家庭収入では収入が上がるほど「する」とした人の割合が増加した。個人収入，家庭収入のいずれにおいても，最も収入が高い層では「する」とした人の割合は30％を超えていた。

以上のように，現在の中国においては，ボウリング，テニス，ゴルフといった日常的なレジャースポーツの普及度合いはまだ低く，やはり行う人が若年，高学歴，高収入層に偏っていることが見て取れる。

表Ⅱ.4.43　性別分布（ボウリング・テニスなど）

頻　度	男　性	女　性
月１回以上	5.4 (16)	3.7 (12)
年数回	6.8 (20)	1.9 (6)
年１-２回	5.7 (17)	2.8 (9)
数年１回	3.4 (10)	1.9 (6)
しない	78.7 (233)	89.8 (289)
合　計	100 (296)	100 (322)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.44　年齢層別分布（ボウリング･テニスなど）

頻　度	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
月１回以上	12.7 (14)	9.5 (8)	2.0 (4)	1.2 (2)	0.0 (0)
年数回	8.2 (9)	8.2 (7)	3.6 (7)	1.8 (3)	0.0 (0)
年１-２回	7.3 (8)	7.1 (6)	5.1 (10)	0.6 (1)	1.7 (1)
数年１回	0.9 (1)	3.5 (3)	2.6 (5)	3.6 (6)	1.7 (1)
しない	70.9 (78)	71.8 (61)	86.7 (170)	92.9 (157)	96.6 (56)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (196)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.45　学歴別分布（ボウリング・テニスなど）

頻　度	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
月１回以上	0.5 (1)	3.9 (9)	4.7 (5)	12.5 (12)
年数回	0.5 (1)	3.5 (8)	4.7 (5)	12.5 (12)
年１-２回	0.0 (0)	4.8 (11)	10.4 (11)	4.2 (4)
数年１回	0.5 (1)	3.0 (7)	4.7 (5)	3.1 (3)
しない	98.4 (181)	84.8 (196)	75.5 (80)	67.7 (65)
合　計	100 (184)	100 (231)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.46　個人収入別分布（ボウリング・テニスなど）

頻　　度	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
月１回以上	6.4 （4）	1.2 （3）	6.6 （11）	7.1 （9）
年数回	1.6 （1）	0.0 （0）	6.0 （10）	11.9 （15）
年１-２回	1.6 （1）	1.9 （5）	3.6 （6）	10.3 （13）
数年１回	0.0 （0）	1.9 （5）	1.2 （2）	7.1 （9）
しない	90.5 （57）	95.0 （247）	82.5 （137）	63.5 （80）
合　　計	100 （63）	100 （260）	100 （166）	100 （126）

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.4.47　家庭収入別分布（ボウリング・テニスなど）

頻　　度	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
月１回以上	1.4 （2）	1.6 （2）	7.4 （13）	6.8 （6）	4.4 （4）
年数回	0.7 （1）	2.5 （3）	2.3 （4）	9.1 （8）	11.2 （10）
年１-２回	1.4 （2）	1.7 （2）	4.0 （7）	6.8 （6）	9.0 （8）
数年１回	0.7 （1）	1.7 （2）	1.7 （3）	3.4 （3）	7.9 （7）
しない	95.8 （137）	92.5 （111）	84.6 （148）	73.9 （65）	67.4 （60）
合　　計	100 （143）	100 （120）	100 （175）	100 （88）	100 （89）

＊単位：％（度数）

5．価値観および生活満足度

5-1　余暇・観光に関する価値観

（1）全体傾向

旅行や余暇に対する考え方として「旅行は見識を豊かにする」「家族で外出することは家庭内の関係にプラスになる」「趣味を持つことは日常生活を充実させる」「日常生活ではたまに旅行に出かけるなど，リラックスの時間が必要である」「花を買い飾ることは心を豊かにする」の５つ提示し，「まあそう思う」「どちらとも言えない」「あまり思わない」「全く思わない」の５段階評価で回答を求めた。ここではそれぞれの設問における全体の平均値を示す。なお，処理において「そう思う」を１とし，「全く思わない」を５としたため，１に近いほどその設問に対する同意度が高いことになる。

表Ⅱ.5.1に示したように全体に同意度は高く，それぞれの設問の平均値は1.38から1.68の間であった。全体として，趣味を持つことや旅行，生活に潤いを与えるようなちょっとした消費が，比較的・肯定的に見られていることが理解できる。

表Ⅱ.5.1　旅行および余暇に関する考え方

項　　目	平均値	サンプル数
旅行は見識を豊かにする	1.38	617
家族で外出することは家族内の関係にプラスになる	1.47	616
趣味を持つことは日常生活を充実させる	1.47	614
日常生活ではたまに旅行に出かけるなど，リラックスの時間が必要である	1.53	616
花を買い飾ることは心を豊かにする	1.68	617

（2）属性分析

旅行や余暇の過ごし方に関わる５つの設問について，性，年齢層，学歴，家庭の収入の４項目について属性分析を行った。「旅行は見識を豊かにする」「家族で外出することは家族内の関係にプラスになる」「日常生活ではたまに旅行に出かけるなどリラックスの時間が必要である」「花を買い飾ることは心を豊かにする」の４つの設問において，有意差が見られる項目があった。以下にそれぞれの詳細を示していく。

①旅行は見識を豊かにする

「旅行は見識を豊かにする」では，年齢層と家庭の収入において５％未満の有意確率を得た。しかし，もともと全体の平均値が1.38と最も同意度が高い項目であるため，ともに期待値５未満のセル数は20％を上回っている。そこで，ここでは「そう思う」と「まあそう思う」の分布に注目し，その傾向を見る。

「そう思う」の割合は，年齢層では60歳台が77.6％と突出して高くなっている。家庭の収入では80,000元以上において76.4％と他に比べ特に高くなっている。これらの層では，３-３において観光旅行において最も求められるものは「リラックスできること」であるという結果を示したが，観光旅行を遊びというよりも真面目な知識を得る機会と捉えたり，リラックスだけでは満足せず知的好奇心を満たすことを求める傾向が他よりも高いことが想像できる。

表Ⅱ.5.2　年齢層別分布（旅行は見識を豊かにする）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	69.1 (76)	64.7 (55)	63.1 (123)	60.9 (103)	77.6 (45)
まあそう思う	28.2 (31)	34.1 (29)	34.9 (68)	37.3 (63)	15.5 (9)
どちらとも言えない	0.9 (1)	1.2 (1)	2.1 (4)	1.2 (2)	6.9 (4)
あまり思わない	1.8 (2)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.6 (1)	0.0 (0)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (195)	100 (169)	100 (58)
平　均　値	1.35	1.36	1.39	1.41	1.29

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.3　家庭収入別分布（旅行は見識を豊かにする）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	69.2 (99)	56.7 (68)	60.3 (105)	69.3 (61)	76.4 (68)
まあそう思う	27.3 (39)	37.5 (45)	38.5 (67)	29.5 (26)	23.6 (21)
どちらとも言えない	3.5 (5)	5.0 (6)	0.6 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)
あまり思わない	0.0 (0)	0.8 (1)	0.6 (1)	1.1 (1)	0.0 (0)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (174)	100 (88)	100 (89)
平　均　値	1.34	1.50	1.41	1.33	1.24

＊単位：％（度数）

②家族で外出することは家庭内の関係にプラスになる

「家族で外出することは家庭内の関係にプラスになる」では，学歴と家庭の収入において５％未満の有意確率を得た。しかし，やはり全体の平均値が1.47と同意度の高い項目であるため，ともに期待値５未満のセル数は20％を越えている。

学歴別では，大学・大学院において「そう思う」「まあそう思う」の合計がほぼ99％を占め，平均値も1.44と最も同意度が高くなっている。以下，高校96.5％（平均値1.45），小学校92.4％（1.51），短大・専門学校90.6％（1.49）となった。平均値を比較した場合，高校に対して大学・大学院が特別に高いとは言えず，ここにおける差異に意味を見いだすことは難しい。

家庭の収入別では20,000元以下において，「そう思う」が52.4％と他に比べて10％～15％程度低くなっている。平均値においても20,000元以下では1.6と，他（20,001～30,000元：1.48，30,001～50,000元：1.40，50,001～80,000元：1.47，80,001元～：1.37）に比べて同意度が低くなっている。これはⅡ-4-1において示したように，収入が低い層においては家族での外食頻度が低く，それがこのような形で反映されているのであろう。

表Ⅱ.5.4 学歴別分布（家族での外出は家族関係にプラス）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	59.8 (110)	61.6 (141)	62.3 (66)	58.3 (56)
まあそう思う	32.6 (60)	34.9 (80)	28.3 (30)	40.6 (39)
どちらとも言えない	4.9 (9)	0.9 (2)	7.5 (8)	0.0 (0)
あまり思わない	2.7 (5)	2.6 (6)	1.9 (2)	1.0 (1)
合　計	100 (184)	100 (229)	100 (106)	100 (96)
平均値	1.51	1.45	1.49	1.44

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.5 家庭収入別分布（家族での外出は家族関係にプラス）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	52.4 (75)	63.0 (75)	62.1 (108)	62.5 (55)	67.4 (60)
まあそう思う	38.5 (55)	28.6 (34)	36.2 (63)	33.0 (29)	29.2 (26)
どちらとも言えない	5.6 (8)	5.9 (7)	1.1 (2)	0.0 (0)	2.2 (2)
あまり思わない	3.5 (5)	2.5 (3)	0.6 (1)	4.5 (4)	1.1 (1)
合　計	23.3 (143)	100 (119)	100 (174)	100 (88)	100 (89)
平均値	1.60	1.48	1.40	1.47	1.37

＊単位：％（度数）

③日常生活ではたまに旅行に出かけるなどリラックスの時間が必要である

「そう思う」の割合に注目すると，学歴別では高学歴になるほど高くなっている。家庭の収入別では，20,000元以下と20,001元～30,000元の逆転を除くと，収入が高くなるほど上がっている。学歴，家庭の収入ともに，平均値においても同様の傾向が見られる。

これについては，Ⅱ-2-2において，学歴が上がればあがるほど，収入が高くなればなるほど，旅行へ行く頻度が多くなっていたことを示した。高学歴，高収入の生活に余裕がある層では，旅行をめったに行われることがない記念行事的なものとして捉えるよりも，日常生活の中に時折挿入される休息の時間として捉えるだけの余裕があるのであろう。

表Ⅱ.5.6 学歴別分布（日常生活には旅行などリラックスの時間が必要である）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	49.5 (91)	51.7 (119)	59.4 (63)	68.4 (65)
まあそう思う	40.8 (75)	39.1 (90)	38.7 (41)	29.5 (28)
どちらとも言えない	7.6 (14)	7.4 (17)	1.9 (2)	1.1 (1)
あまり思わない	2.2 (4)	1.7 (4)	0.0 (0)	1.1 (1)
合　計	100 (184)	100 (230)	100 (106)	100 (95)
平均値	1.63	1.59	1.42	1.35

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.7　家庭収入別分布（日常生活には旅行などリラックスの時間が必要である）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	51.0 (73)	43.3 (52)	54.0 (94)	61.4 (54)	73.9 (65)
まあそう思う	39.9 (57)	45.0 (54)	39.7 (69)	33.0 (29)	26.1 (23)
どちらとも言えない	6.3 (9)	9.2 (11)	5.7 (10)	4.5 (4)	0.0 (0)
あまり思わない	2.8 (4)	2.5 (3)	0.6 (1)	1.1 (1)	0.0 (0)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (174)	100 (88)	100 (88)
平均値	1.61	1.71	1.53	1.45	1.26

＊単位：％（度数）

④花を買い飾ることは心を豊かにする

花を買い飾ることは心を豊かにするでは，性および年齢において有意差が見られた。

性別では，男性よりも女性において同意度が高くなっていた。現代においてもなお，性別分業上，家庭内をきれいに整えることは女性の領域であるのだろう。

また，年齢では20歳台の平均値が最も高くなった。これは，20歳台には未婚者がまだ多く，家庭内を整えることに対する関心が薄いことによるのであろう。

表Ⅱ.5.8　性別分布（花を飾ることは心を豊かにする）

頻度	男性	女性
そう思う	39.3 (116)	53.1 (171)
まあそう思う	47.8 (141)	40.1 (129)
どちらとも言えない	7.1 (21)	5.0 (16)
あまり思わない	4.1 (12)	1.6 (5)
全く思わない	1.7 (5)	0.3 (1)
合　計	100 (295)	100 (322)
平均値	1.81	1.56

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.9　年齢層別分布（花を飾ることは心を豊かにする）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	40.0 (44)	58.8 (50)	46.2 (90)	40.8 (69)	58.6 (34)
まあそう思う	48.2 (53)	37.6 (32)	42.1 (82)	49.7 (84)	32.8 (19)
どちらとも言えない	4.5 (5)	1.2 (1)	7.7 (15)	7.1 (12)	6.9 (4)
あまり思わない	4.5 (5)	2.4 (2)	4.1 (8)	0.6 (1)	1.7 (1)
全く思わない	2.7 (3)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.8 (3)	0.0 (0)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (195)	100 (169)	100 (58)
平均値	1.82	1.47	1.70	1.73	1.52

＊単位：％（度数）

5-2　現代化・都市化に関する価値観

（1）全体傾向

現代化，都市化による価値観の変化が観光にどのように関わるかを考察することを目的に，現代化，都市化に対する考え方に関する設問を11個設定し，「そう思う」「まあそう思う」「どちらとも言えない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階評価で回答を求めた。ここではそれぞれの設問における全体の平均値を示す。なお，処理において「そう思う」を1とし，「全く思わない」を5としたため，1に近いほどその設問に対する同意度が高いことになる。

最も同意度が高かった項目は「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた」であり，以下「高層ビルに圧迫感を感じる」「石庫門など地方独特の建築が少なくなるのは残念だ」と続いた。逆に最も同意度が低かった項目は「都市生活の変化についていけない」であり，「農民は素直で朴訥だと思う」「経済発展と同時に誠信，孝行など伝統的観念が薄れてきた」と続いた。

全体として，「高層ビルに圧迫感を感じる（2.11）」「石庫門など地方独特の建築が少なくなるのは残念だ（2.12）」等の形で現代における都市環境の変化を感じ取りながらも，「都市生活の変化についていけない（3.30）」と感じる人はそれほど多くないことがわかる。また，生活の変化に伴う価値観の変化に関する印象としては「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた（2.04）」「都市部では人間関係が希薄になった（2.22）」「経済発展と同時に誠信，孝行などの伝統的観念が薄れてきた（2.55）」の順となった。「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた」は，共産主義革命の精神をどのように表現するかを検討した結果，この文章に落ち着いたものである。果たしてこれがうまく建国，革命時の努力や勤勉のイメージと結びついたがどうかは判断できないが，かつてあった努力や倹約の精神が薄れたと感じる人は，誠信や孝行の観念が薄れたと感じる人よりも多いようである。これは親子関係の在り様等よりも，現在の消費の在り様の方がより変化が大きいと感じられるからであろう。「都市部では人間関係が希薄になった」も，上海市民の多くが再開発を通しての高層マンション化やそれに伴う移動などの現象にさらされている現状においては，それなりに同意される項目のようである。

「都市の生活はストレスが強い」「都市の自然環境はよくない」「農村の自然は美しいと思う」「農村や古鎮の生活に懐かしさを感じる」「農民は素直で朴訥だと思う」等の設問は，ある程度都市化が進み人工的なものが増加すると，自然なものや農村生活のようなゆったりした秩序に対する憧れや回帰が生まれてくるという仮説の上に設定したものである。同意度の傾向では全体に中位にあり，ここでは特に際立った傾向は見られない。

表Ⅱ.5.10　現代化・都市化に対する価値観

項　　目	平均値	サンプル数
現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた	2.04	617
高層ビルに圧迫感を感じる	2.11	617
石庫門など地方独特の建築が少なくなるのは残念だ	2.12	616
都市の生活はストレスが強い	2.15	617
都市部では人間関係が希薄になった	2.22	616
農村の自然は美しいと思う	2.31	617
都市の自然環境はよくない	2.33	616
農村や古鎮の生活に懐かしさを感じる	2.45	615
経済発展と同時に誠信，孝行などの伝統的観念が薄れてきた	2.55	614
農民は素直で木訥だと思う	2.80	615
都市生活の変化についていけない	3.30	615

（2）属性分析

①現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた

「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた」は，年齢，学歴，個人収入，家庭収入において有意差が見られた。

年齢では，年齢層があがるほど同意度が高くなる傾向が見られた。学歴では，学歴が高くなるほど同意度が下がる傾向が見られた。個人収入では，5,000元以下を除くと，収入が上がるほど同意度が下がる傾向にあった。5,000元以下において平均は2.19と比較的高かったのは，この層には未就労の20歳台が含まれているためであると考えられる。家庭収入では，収入が上がるほど同意度が下がる傾向が見られた。

Ⅱ-4において現在のレジャー・レクリエーション等にかかわる消費の現状について示してきたが，若年・高学歴・高収入層ではこういった消費を非常に活発に行っていることが見て取れた。この設問は，レジャー・レクリエーション等の消費と密接に関係したものである。すなわち，現在こういった消費を担う若年・高学歴・高収入層はあまり「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた」という感覚を持っていないが，どちらかといえば慎ましやかな中高年・低学歴・低収入層からは現代人，特に現代の若い人は「努力，倹約などの精神が薄れてきた」と感じるのであろう。

表2.5.11　年齢層別分布（現代人は努力・倹約などの精神が薄れてきた）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	20.0 (22)	27.1 (23)	36.9 (72)	40.2 (68)	43.1 (25)
まあそう思う	39.1 (43)	34.1 (29)	46.2 (90)	46.7 (79)	39.7 (23)
どちらとも言えない	18.2 (20)	17.6 (15)	7.2 (14)	4.1 (7)	10.3 (6)
あまり思わない	18.2 (20)	20.0 (17)	9.2 (18)	7.7 (13)	6.9 (4)
全く思わない	4.5 (5)	1.2 (1)	0.5 (1)	1.2 (2)	0.0 (0)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (195)	100 (169)	100 (58)
平　均　値	2.48	2.34	1.90	1.83	1.81

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.12　学歴別分布（現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	38.6 (71)	41.3 (95)	24.5 (26)	17.7 (17)
まあそう思う	45.7 (84)	40.9 (94)	47.2 (50)	37.5 (36)
どちらとも言えない	6.5 (12)	7.4 (17)	14.2 (15)	18.8 (18)
あまり思わない	8.7 (16)	9.1 (21)	13.2 (14)	21.9 (21)
全く思わない	0.5 (1)	1.3 (3)	0.9 (1)	4.2 (4)
合　計	100 (184)	100 (230)	100 (106)	100 (96)
平均値	1.87	1.88	2.19	2.57

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.13　個人収入別分布（現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた）

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001～
そう思う	27.0 (17)	42.7 (111)	31.5 (52)	23.0 (29)
まあそう思う	41.3 (26)	44.6 (116)	42.4 (70)	40.5 (51)
どちらとも言えない	19.0 (12)	5.4 (14)	7.3 (12)	19.0 (24)
あまり思わない	11.1 (7)	6.2 (16)	17.6 (29)	15.1 (19)
全く思わない	1.6 (1)	1.1 (3)	1.2 (2)	2.4 (3)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (165)	100 (126)
平均値	2.19	1.78	2.15	2.33

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.14　家庭収入別分布（現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	41.3 (59)	35.8 (43)	35.1 (61)	26.1 (23)	25.8 (23)
まあそう思う	42.0 (60)	48.3 (58)	41.4 (72)	47.7 (42)	34.8 (31)
どちらとも言えない	8.4 (12)	7.5 (9)	9.2 (16)	5.7 (5)	22.5 (20)
あまり思わない	7.7 (11)	7.5 (9)	12.1 (21)	19.3 (17)	14.6 (13)
全く思わない	0.7 (1)	0.8 (1)	2.3 (4)	1.1 (1)	2.2 (2)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (174)	100 (88)	100 (89)
平均値	1.85	1.89	2.05	2.22	2.33

＊単位：％（度数）

②都市の生活はストレスが強い

都市の生活はストレスが強いでは，年齢において有意差が認められた。

この項目に対して同意する度合いは，特に30歳台において高く，次が20歳台，そして40歳台以上は年齢が上がるに従い下降した。これは個人収入の分布と同じ傾向を描くものであるが，収入では特に有意差は見られなかった。

30歳台，20歳台はその上の世代に比べると確かに高学歴者が多く，収入も高い者が多いが，その分全体として競争の激しさなどを感じることが多いのであろうか。

表Ⅱ.5.15　年齢層別分布（都市の生活はストレスが強い）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	28.2 (31)	40.0 (34)	30.8 (60)	24.9 (42)	22.4 (13)
まあそう思う	50.9 (56)	47.1 (40)	36.9 (72)	39.6 (67)	25.9 (15)
どちらとも言えない	10.9 (12)	5.9 (5)	20.0 (39)	15.4 (26)	34.5 (20)
あまり思わない	9.1 (10)	7.1 (6)	12.3 (24)	20.1 (34)	15.5 (9)
全く思わない	0.9 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.7 (1)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (195)	100 (169)	100 (58)
平　均　値	2.04	1.80	2.14	2.31	2.48

＊単位：％（度数）

③都市部では人間関係が希薄になった

都市部では人間関係が希薄になったでは，学歴，家庭収入において有意差が見られた。学歴では小・中学校，高校など低い層において同意度が高く，短大，大学と学歴が上がるについて同意度が下がっていった。収入では特に２万元以下の層において同意の度合いが高い傾向が見られた。

近年，上海では旧来の石庫門の取り壊しと高層マンションの建て替えが急速に進んでいるが，このような再開発の中で，立ち退きによって長年親しんできた隣人達が，離ればなれになることも多い。また，新しいマンションに居住する時には，新しい隣人関係を構築することにもなる。立ち退きを経験していない人にとっては現代のこのような現象は淋しいものに思えるかも知れない。一方で，新しいマンションの入居を果たした人は，新たな隣人関係に満足しているかも知れない。この設問はこういった居住環境を考慮してさらに分析する必要があるだろう。

表Ⅱ.5.16　学歴別分布（都市部では人間関係が希薄になった）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	33.2 (61)	30.1 (69)	20.8 (22)	15.6 (15)
まあそう思う	37.0 (68)	40.6 (93)	45.3 (48)	39.6 (38)
どちらとも言えない	14.7 (27)	14.8 (34)	23.6 (25)	24.0 (23)
あまり思わない	13.6 (25)	14.0 (32)	7.5 (8)	20.8 (20)
全く思わない	1.6 (3)	0.4 (1)	2.8 (3)	0.0 (0)
合　計	100 (184)	100 (230)	100 (106)	100 (96)
平　均　値	2.14	2.14	2.26	2.50

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.17　家庭収入別分布（都市部では人間関係が希薄になった）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	37.1 (53)	26.7 (32)	24.3 (42)	23.9 (21)	21.3 (19)
まあそう思う	39.9 (57)	38.3 (46)	38.7 (67)	42.0 (37)	43.8 (39)
どちらとも言えない	11.9 (17)	15.8 (19)	23.1 (40)	12.5 (11)	23.6 (21)
あまり思わない	10.5 (15)	17.5 (21)	12.7 (22)	21.6 (19)	9.0 (8)
全く思わない	0.7 (1)	1.7 (2)	1.2 (2)	0.0 (0)	2.2 (2)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (174)	100 (88)	100 (89)
平均値	1.98	2.29	2.28	2.32	2.27

＊単位：％（度数）

④都市の自然環境はよくない

都市の自然環境はよくないでは，年齢において有意差が見られた。

ここでは，同意の度合いが特に高い年齢は20歳台，低い年齢は50歳台であった。

50歳台については「上山下郷」など，文革時に政策的に長期に渡り農村生活を強いられてきた人も多い。こういった人々にとって上海の街は戻りたい場所であり，その都市的環境が特に好ましいものと感じられたであろう。

また，インタビュー調査時に上海の環境について質問した時，近年緑地や公園が整備される，空気が以前よりきれいになるなど，環境が改善されてきたという回答が少なからずあった。30歳台，40歳台，60歳台の同意度に大きな変動がないのは，長く居住している人の間でこういった評価がある程度共有されているからであろう。

一方，20歳台において同意の度合いが低いことについては，彼らの多くが改革解放後に生まれていることに起因するのであろう。彼らの成育した上海は改革開放と高度経済成長により急激に再開発が進められる世界的にも最先端の大都市のひとつである。彼らにとって，以前のもっと環境条件の良くない都市，上海は知らない時代のことであり，大都市＝自然環境がよくないという図式的な発想を最も持ちやすいのであろう。

表Ⅱ.5.18　年齢層別分布（都市の自然環境はよくない）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	31.2 (34)	28.2 (24)	29.7 (58)	20.1 (58)	36.2 (21)
まあそう思う	47.7 (52)	40.0 (34)	33.3 (65)	33.1 (56)	22.4 (13)
どちらとも言えない	8.3 (9)	11.8 (10)	13.8 (27)	15.4 (26)	17.2 (10)
あまり思わない	11.9 (13)	20.0 (17)	23.1 (45)	29.6 (50)	22.4 (13)
全く思わない	0.9 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.8 (3)	1.7 (1)
合　計	100 (109)	100 (85)	100 (195)	100 (169)	100 (58)
平均値	2.04	2.24	2.30	2.60	2.31

＊単位：％（度数）

⑤農村や古鎮の生活に懐かしさを感じる

農村や古鎮の生活に懐かしさを感じるでは，学歴において有意差が見られた。小・中学校卒において特に同意の度合いが高くなっていた。

また，この項目については，15歳以前の居所が上海郊外あるいは上海以外の農村であったという人の間では，上海市内や他の都市が居所であったという人よりも同意の度合いが高くなっていた。その影響を考慮するために，上海郊外および他の農村出身者の中での学歴分布を確認すると，小・中学校卒15.8%，大学・大学院卒13.7%，高校卒6.8%，短大卒6.6%であった。上海郊外および他の農村出身者の間では自分の故郷を懐かしむ感情があるため，この項目に対する同意の度合いが高くなるというのはある程度指摘できることであろう。しかしながら，上海郊外および他農村部出身者の中でも，高学歴者の間では，この項目に対する同意の度合いは低くなっていた。

以上から，この設問の結果が古く素朴なものに対してどの層に強くノスタルジーを抱く人が多いかを示しているものと捉えることができる。この点では，特に小・中学校卒という低い学歴層において，古く素朴なものに対するノスタルジーが高いといえるであろう。

表Ⅱ.5.19　学歴別分布（農村や古鎮の生活に懐かしさを感じる）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	30.4 (56)	25.3 (58)	20.0 (21)	18.8 (18)
まあそう思う	33.7 (62)	34.1 (78)	33.3 (35)	32.3 (31)
どちらとも言えない	19.0 (35)	10.5 (24)	24.8 (26)	22.9 (22)
あまり思わない	14.1 (26)	24.0 (55)	17.1 (18)	21.9 (21)
全く思わない	2.7 (5)	6.1 (14)	4.8 (5)	4.2 (4)
合　計	100 (184)	100 (229)	100 (105)	100 (96)
平均値	2.25	2.52	2.53	2.60

＊単位：%（度数）

表Ⅱ.5.20　15歳以前の居所による分布（農村や古鎮の生活に懐かしさを感じる）

	上海市内	上海郊外	他都市部	他農村部
そう思う	22.9 (112)	44.4 (16)	18.6 (11)	50.0 (14)
まあそう思う	33.7 (165)	13.9 (5)	40.7 (24)	39.3 (11)
どちらとも言えない	17.8 (87)	19.4 (7)	20.3 (12)	3.6 (1)
あまり思わない	20.8 (102)	13.9 (5)	18.6 (11)	7.1 (2)
全く思わない	4.9 (24)	8.3 (3)	1.7 (1)	0.0 (0)
合　計	100 (490)	100 (36)	100 (59)	100 (28)

＊単位：%（度数）

⑥経済発展と同時に誠信，孝道などの伝統的観念が薄れてきた

経済発展と同時に誠信，孝行などの伝統的観念が薄れてきたでは，学歴において有意差が見られた。

すなわち，学歴が上がるほど同意の度合いが低くなる傾向が見られた。また，小・中学校卒，高校卒の平均値が2.30，2.44であるのに対し，短大，大学・大学院では2.87，2.95であり，小・中・高校卒と短大・大学・大学院卒との間に大きな違いが見られた。

この項目は，どの層において伝統的な秩序観に対し，ノスタルジーを抱く人が多いかを示している。学歴の高い層において同意の度合いが低く，学歴の低い層において同意の度合いが低いという結果は，社会的によいポジションを得ることが比較的容易な人々（高学歴層）は現在の秩序のあり方に不満を持つことが少なく，それが過去の秩序に対するノスタルジーの少なさとして現れたということであろう。

表Ⅱ.5.21　学歴別分布（経済発展と同時に誠信，孝行などの伝統的観念が薄れてきた）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	25.1 (46)	22.2 (51)	11.5 (12)	13.5 (13)
まあそう思う	37.2 (68)	38.3 (88)	28.8 (30)	26.0 (25)
どちらとも言えない	23.5 (43)	16.1 (37)	25.0 (26)	19.8 (19)
あまり思わない	11.5 (21)	20.0 (46)	30.8 (32)	33.3 (32)
全く思わない	2.7 (5)	3.5 (8)	3.8 (4)	7.3 (7)
合　計	100 (183)	100 (230)	100 (104)	100 (96)
平均値	2.30	2.44	2.87	2.95

＊単位：％（度数）

⑦農民は素朴で素直だと思う

農民は素朴で素直だと思うでは，年齢と学歴において有意差が見られた。

年齢では40歳台，50歳台で同意の度合いが低くなる傾向にあった。学歴では高卒において特に同意の度合いが低くなる傾向が見られた。これは「上山下郷」等，実際に農村生活を体験した者の年齢が40歳台後半あるいは50歳台にあたること，また「上山下郷」の対象となった当時の知識青年の学歴が高校卒を中心としていたこと等によるのであろう。すなわち，実際に農村で生活した人々にとっては，農民であろうと都市民であろうと人は人であり，「農民だから素朴で素直だ」というような幻想は抱きにくいのであろう。

表Ⅱ.5.22　年齢層別分布（農民は素朴で素直だと思う）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	16.4 (18)	14.3 (12)	13.3 (26)	14.2 (24)	24.6 (14)
まあそう思う	36.4 (40)	29.8 (25)	24.6 (48)	25.4 (43)	21.1 (12)
どちらとも言えない	24.5 (27)	33.3 (28)	20.0 (39)	21.3 (36)	38.6 (22)
あまり思わない	15.5 (17)	21.4 (18)	34.9 (68)	32.0 (54)	15.8 (9)
全く思わない	7.3 (8)	1.2 (1)	7.2 (14)	7.1 (12)	0.0 (0)
合　　計	100 (110)	100 (84)	100 (195)	100 (169)	100 (57)
平　均　値	2.61	2.65	2.98	2.92	2.46

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.23　学歴別分布（農民は素朴で素直だと思う）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	22.4 (41)	11.4 (26)	13.2 (14)	13.5 (13)
まあそう思う	23.5 (43)	24.0 (55)	37.7 (40)	31.3 (30)
どちらとも言えない	24.6 (45)	22.7 (52)	28.3 (30)	26.0 (25)
あまり思わない	26.2 (48)	31.9 (73)	18.9 (20)	25.0 (24)
全く思わない	3.3 (6)	10.0 (23)	1.9 (2)	4.2 (4)
合　　計	100 (183)	100 (229)	100 (106)	100 (96)
平　均　値	2.64	3.05	2.58	2.75

＊単位：％（度数）

⑧都市生活の変化についていけない

都市生活の変化についていけないは全体に同意の度合いが最も低い項目であった。ここでは，学歴，個人収入，家庭収入において有意差が見られた。

学歴では，学歴が上がるほど同意の度合いが低くなった。個人収入では5,000元以下と5,001～15,000元の間に逆転が見られるが，全体では収入が上がるほど同意の度合いが低くなった。家庭収入では，収入が上がるほど同意の度合いが低くなった。これは，低学歴層，低収入層ほど，取り残され感を持つ人の割合が多いことを示している。

表Ⅱ.5.24　学歴別分布（都市生活の変化についていけない）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	10.9 (20)	7.8 (18)	5.7 (6)	0.0 (0)
まあそう思う	18.0 (33)	18.3 (42)	12.3 (13)	12.6 (12)
どちらとも言えない	23.5 (43)	17.4 (40)	19.8 (21)	21.1 (20)
あまり思わない	41.5 (76)	47.4 (109)	59.4 (63)	60.0 (57)
全く思わない	6.0 (11)	9.1 (21)	2.8 (3)	6.3 (6)
合　　計	100 (183)	100 (230)	100 (106)	100 (96)
平　均　値	3.14	3.32	3.42	3.60

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.25 個人収入別分布（都市生活の変化についていけない）

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001～
そう思う	7.9 (5)	10.0 (26)	7.3 (12)	0.8 (1)
まあそう思う	12.7 (8)	21.6 (56)	12.7 (21)	11.2 (14)
どちらとも言えない	30.2 (19)	20.5 (53)	20.6 (34)	14.4 (18)
あまり思わない	44.4 (28)	40.5 (105)	54.5 (90)	64.8 (81)
全く思わない	4.8 (3)	7.3 (19)	4.8 (8)	8.8 (11)
合　計	100 (63)	100 (259)	100 (165)	100 (125)
平均値	3.25	3.14	3.37	3.70

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.26 家庭収入別分布（都市生活の変化についていけない）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	13.3 (19)	7.5 (9)	5.2 (9)	5.7 (5)	2.3 (2)
まあそう思う	18.2 (26)	15.8 (19)	16.8 (29)	19.3 (17)	9.1 (8)
どちらとも言えない	27.3 (39)	22.5 (27)	20.8 (36)	5.7 (5)	19.3 (17)
あまり思わない	35.0 (50)	47.5 (57)	49.1 (85)	63.6 (56)	63.6 (56)
全く思わない	6.3 (9)	6.7 (8)	8.1 (14)	5.7 (5)	5.7 (5)
合　計	100 (143)	100 (120)	100 (173)	100 (88)	100 (88)
平均値	3.03	3.30	3.38	3.44	3.61

＊単位：％（度数）

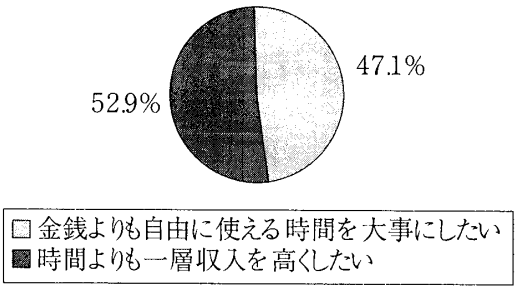
5-3 日常生活に関する価値観

（1）全体傾向

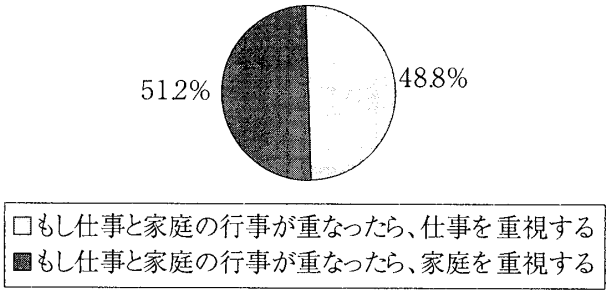
日常生活に関する価値観を尋ねるために二択式の設問として「お金よりも自由にできる時間を大切にしたい／時間よりも一層収入を増やしたい」「もし仕事と家庭の行事がかさなったなら，仕事を重視する／もし仕事と家庭の行事が重なったなら，家庭を重視する」「もし金銭に余裕があるなら，資格取得や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」の４つを設定した。

「お金よりも自由にできる時間を大切にしたい／時間よりも一層収入を増やしたい」では，47.1％が「時間」を、52.9％が「収入アップ」を選択した。「もし仕事と家庭の行事がかさなったなら，仕事を重視する／もし仕事と家庭の行事が重なったなら，家庭を重視する」では，48.8％が仕事を，51.2％が家庭を選択した。「もし金銭に余裕があるなら，資格取得や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」では，31.1％が資格取得を，68.7％が生活の充実を選択した。「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」では，44.2％が伝統文化を，55.8％が新技術を選択した。

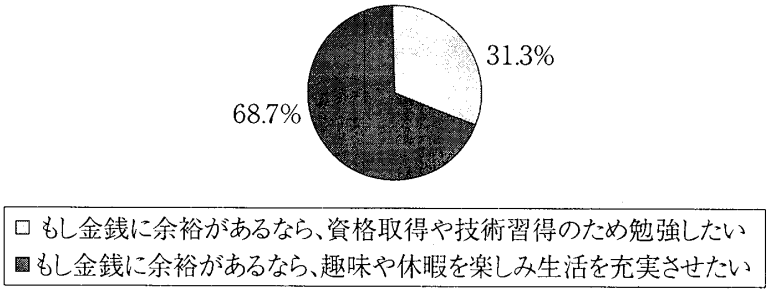
以上から，「お金よりも自由にできる時間を大切にしたい／時間よりも一層収入を増やしたい」「もし仕事と家庭の行事が重なったら，仕事を重視する／もし仕事と家庭の行事が重なったら，家庭を重視する」の２つの設問では，それぞれほぼ両者の意見が拮抗している様子がわかる。「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新しい技術を学ぶ方がいい」では，やや「新しい技術」を選択する人が多い状態であることがわかる。もし金銭に余裕があるなら，資格取得や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」では，「趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」という人が約７割であり，全体として生活の充実を求める傾向が強くなっていることがわかる。



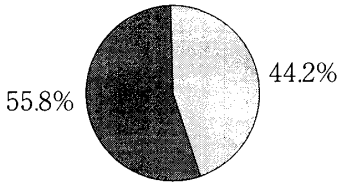
図Ⅱ.5.1　時間とお金(n=616)



図Ⅱ.5.2　仕事と家庭(n=617)



図Ⅱ.5.3　資格取得と趣味(n=616)



■ 歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい
■ パソコン，外国語，車の運転など現代新技術を学ぶ方がいい

図Ⅱ.5.4　伝統文化と新技術(n=616)

（2）時間と金銭

「お金よりも自由にできる時間を大切にしたい／時間よりも一層収入を増やしたい」では，年齢と学歴において有意差が見られた。年齢層では自由時間よりも収入向上を重視する人の割合は20歳台，30歳台と上昇し40歳台でピークとなり，50歳台，60歳台と減少した。若年層，高齢層よりも，30歳台，40歳台の中年層において，時間よりも収入向上を重視する傾向が顕著であることがうかがわれる。これには，ライフサイクル上，30歳台，40歳台が，子どもの教育費等，最も多くの支出を強いられる時期であることなどが関わっているのであろう。

また，学歴では，時間よりも収入を重視する人の割合は高卒が最も高く，短大・専門学校，大学・大学院と減少していった。これには，40歳台に高卒者の割合が高いことが関わっているのであろう。

表Ⅱ.5.27　年齢層別

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
自由時間を重視する	50.9 (56)	40.5 (34)	35.4 (69)	52.7 (89)	72.4 (42)
収入向上を重視する	49.1 (54)	59.5 (50)	64.6 (126)	47.3 (80)	27.6 (16)
合　計	100 (110)	100 (84)	100 (195)	100 (169)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.28　学歴別

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
自由時間を重視する	44.6 (82)	40.0 (92)	56.6 (60)	58.3 (56)
収入向上を重視する	55.4 (102)	60.0 (138)	43.4 (46)	41.7 (40)
合　計	100 (184)	100 (230)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

（3）仕事と家庭

「もし仕事と家庭の行事がかさなったなら，仕事を重視する／もし仕事と家庭の行事が重なったなら，家庭を重視する」では，性，学歴，個人収入において有意差が見られ

た。

性別では女性よりも男性に家庭よりも仕事を重視する傾向が見られた。学歴別では，学歴が高くなればなるほど家庭よりも仕事を重視する傾向が見られた。個人収入では，収入が高くなればなるほど，家庭よりも仕事を重視する傾向が見られた。

性別において男性よりも女性に家庭を重視する傾向が強いのは，このサンプルにおいてもやはり性別役割分業上，女性は家庭に責任を持つという観念がやや強いためであろう。個人収入において，収入が高いほど仕事を重視する傾向が強いのは，収入の高さと仕事上のポジションの高さや責任の重さが関連を持つためであろう。また，学歴と収入との関連は高く，高収入の高学歴者も必然的に仕事上のポジションや責任が重くなるであろう。

表Ⅱ.5.29　性別

	男　性	女　性
仕事を重視する	53.2 (157)	44.7 (144)
家庭を重視する	46.8 (138)	55.3 (178)
合　計	100 (295)	100 (322)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.30　学歴別

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
仕事を重視する	40.8 (75)	46.5 (107)	56.6 (60)	60.4 (58)
家庭を重視する	59.2 (109)	53.5 (123)	43.4 (46)	39.6 (38)
合　計	100 (184)	100 (230)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.31　個人収入別

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
仕事を重視する	31.7 (20)	45.4 (118)	49.7 (82)	62.7 (79)
家庭を重視する	68.3 (43)	54.6 (142)	50.3 (83)	37.3 (47)
合　計	100 (63)	100 (260)	100 (165)	100 (126)

＊単位：％（度数）

（4）資格取得等と生活の充実

「もし金銭に余裕があるなら，資格取得や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」では，年齢，学歴で有意差が見られた。

年齢層ではその層が上がれば上がるほど，資格取得や技術習得よりも趣味・娯楽等による生活の充実を大切にしたいという傾向が強くなった。これは，ひとつにはライフサ

イクル上，仕事に関連する資格取得や技術習得はむしろ若年層の課題になりやすいことの反映が考えられる。学歴では，学歴が高くなるほど，資格取得・技術習得を重視する傾向が見られた。単純には，高学歴ほど，仕事上の昇進に熱心であり，そのための努力惜しまない傾向があることになる。

なお，現在の中国では階層間の給与格差の大きさが指摘されている。たとえば，2004年８月の新聞記事には以下のような記述があった。

上海のホワイトカラーの平均年収はすでに47,634元に達し，全国の第一位となっている。学歴とホワイトカラーの収入には密接な関係がある。修士より下のホワイトカラーは高学歴者の平均年収よりも一段階，１万元程度低い。現在修士の平均年収は46,000元，博士は57,600元である[(3)]。

現状において，学位を含め多様な資格を取得していくことが，職位や年収の上昇に密接につながる。それゆえに，特に，まだ自身の社会階層を定まったものとして認識していない20歳台においては，上昇のためにさらなる資格や学位を得ることが目標となりやすい状況であるといえるであろう。また，20歳台に努力できるかできないかによって社会階層が決まるという意味で，若年層にとっては競争の激しい，厳しい状況だとも感じられるであろう。

表Ⅱ.5.32　年齢層別

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
資格取得等を重視する	49.1　(54)	32.1　(27)	30.8　(60)	22.5　(38)	24.1　(14)
生活の充実を重視する	50.9　(56)	67.9　(57)	69.2 (135)	77.5 (131)	75.9　(44)
合　　計	100　(110)	100　(84)	100　(195)	100　(169)	100　(58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.33　性別

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
資格取得等を重視する	23.4　(43)	30.4　(70)	36.2　(38)	42.7　(41)
生活の充実を重視する	76.6 (141)	69.6 (160)	63.8　(67)	57.3　(55)
合　　計	100　(184)	100　(230)	100　(105)	100　(96)

＊単位：％（度数）

（５）伝統文化と新技術

「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」では，性別，年齢，学歴，個人収入，家庭収入の全てにおいて有意差が見られた。

性別では，女性よりも男性において，伝統文化よりも新技術を好む傾向がやや強く見られた。年齢層では，年齢層が上がれば上がるほど，新技術よりも伝統文化を好む傾向が見られた。学歴では，学歴が上がればあがるほど，伝統文化よりも新技術を好む傾向が見られた。個人収入では，収入が上がるほど，伝統文化よりも新技術を好む傾向が見られた。家庭の収入においても，個人収入と同様の傾向が見られた。

以上のように，ここでは全体として，日常のレジャー・レクリエーションにおいて見られたことと同様に，若年・高学歴・高収入層と，中高年・低学歴・低収入層との二極分化傾向にあることが読み取れる。

表Ⅱ.5.34　性別

	男　性	女　性
伝統文化を好む	40.0 (118)	48.0 (154)
新技術を好む	60.0 (177)	52.0 (167)
合　計	100 (295)	100 (321)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.35　年齢層別

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
伝統文化を好む	20.0 (22)	27.1 (23)	43.1 (84)	57.1 (96)	81.0 (47)
新技術を好む	80.0 (88)	72.9 (62)	56.9 (111)	42.9 (72)	19.0 (11)
合　計	100 (110)	100 (85)	100 (195)	100 (168)	100 (58)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.36　学歴別

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
伝統文化を好む	53.3 (98)	48.5 (111)	33.0 (35)	29.2 (28)
新技術を好む	46.7 (86)	51.5 (118)	67.0 (71)	70.8 (68)
合　計	100 (184)	100 (229)	100 (106)	100 (96)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.37　個人収入別

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
伝統文化を好む	68.3 (43)	54.8 (142)	47.3 (78)	24.6 (31)
新技術を好む	31.7 (20)	45.2 (117)	52.7 (87)	75.4 (95)
合　計	100 (63)	100 (259)	100 (165)	100 (126)

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.38 家庭収入別

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
伝統文化を好む	58.7 (84)	53.8 (64)	39.7 (69)	35.2 (31)	25.8 (23)
新技術を好む	41.3 (59)	46.2 (55)	60.3 (105)	64.8 (57)	74.2 (66)
合　　計	100 (143)	100 (119)	100 (174)	100 (88)	100 (88)

＊単位：％（度数）

5-4 生活満足度

(1) 全体傾向

生活満足度として「仕事にストレスを感じる」「隣人との関係に満足している」「同僚との関係に満足している」「夫婦関係に満足している」「親子関係に満足している」「現在の生活に満足している」「これからもっと生活が良くなると思う」の7つ提示し，「まあそう思う」「どちらとも言えない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階評価で回答を求めた。ここではそれぞれの設問における全体の平均値を示す。なお，処理において「そう思う」を1とし，「全く思わない」を5としたため，1に近いほどその設問に対する同意度が高いことになる。

結果を同意度の高い順に並べると，1位「親子関係に満足している」，2位「夫婦関係に満足している」，3位「これからもっと生活がよくなると思う」，4位「同僚との関係に満足している」，5位「隣人との関係に満足している」，6位「現在の生活に満足している」，7位「仕事にストレスを感じる」の順となった。

以上のように，まず「親子関係」「夫婦関係」といった家庭内の関係に対する満足度が非常に高いことがわかる。これに対し，「同僚との関係」「隣人との関係」はやや低くなっている。また，「現在の生活」に対する満足度はそれほど高くないが，「これからの生活」に対する期待度は高い。「仕事にストレスを感じる」は評価軸が逆であるが，2.70という平均値は「ストレスを感じる」人が「ストレスを感じない」人よりもやや多い状況を表しており，やはり最も評価が低い項目であるといえる。

表Ⅱ.5.39

項　　目	平均値	サンプル数
仕事にストレスを感じる	2.70	479
隣人との関係に満足している	2.09	616
同僚との関係に満足している	1.97	508
夫婦関係に満足している	1.47	486
親子関係に満足している	1.43	616
現在の生活に満足している	2.29	616
これからもっと生活が良くなると思う	1.69	615

（2）属性分析

生活満足度に関わる7つの設問について，性，年齢層，学歴，個人収入，家庭の収入の5項目について属性分析を行った。「仕事にストレスを感じる」「隣人との関係に満足している」「夫婦関係に満足している」「現在の生活に満足している」「これからもっと生活が良くなると思う」の5つの設問において，有意差が見られる項目があった。以下にそれぞれの詳細を示していく。

①仕事にストレスを感じる

仕事にストレスを感じるでは，学歴，個人収入，家庭収入において有意差が見られた。

学歴では，短大・専門学校卒において特に同意度が高く，ストレスが強いことがわかった。個人収入では，5,000元以下の層において最も同意の度合いが高くなっていた。この層を除くと，後は収入が上がるにつれ同意の度合いが上がった。家庭収入では，20,000元以下の層と20,001～30,000元の間で逆転が見られたが，全体に収入が高いほど同意の度合いが強い傾向にあった。

まず，個人収入，家庭収入の傾向に関して言うと，個人収入の5,000元以下の層においてストレスが強かったことは，端的に収入が低すぎることがあげられるであろう。これを除くと，収入が上がるほど仕事上の責任が増し，忙しくなっていくことなどが，全体的な傾向の理由としてあげられるであろう。

学歴に関し，特に短大・専門学校卒でストレスが高かったことについては，大学・大学院卒との間の収入や昇進の格差をもっとも強く感じる学歴であることなどが理由であろうか。

表Ⅱ.5.40　学歴別分布（仕事にストレスを感じる）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	24.8 (29)	18.4 (34)	23.9 (22)	11.9 (10)
まあそう思う	20.5 (24)	26.5 (49)	33.7 (31)	44.0 (37)
どちらとも言えない	17.1 (20)	20.0 (37)	16.3 (15)	8.3 (7)
あまり思わない	34.2 (40)	27.6 (51)	25.0 (23)	33.3 (28)
全く思わない	3.4 (4)	7.6 (14)	1.1 (1)	2.4 (2)
合　計	100 (117)	100 (185)	100 (92)	100 (84)
平均値	2.71	2.79	2.46	2.70

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.41 個人収入別分布（仕事にストレスを感じる）

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
そう思う	34.8 (8)	22.3 (40)	18.9 (28)	14.4 (18)
まあそう思う	13.0 (3)	20.0 (36)	29.1 (43)	47.2 (59)
どちらとも言えない	34.8 (8)	16.1 (29)	22.3 (33)	7.2 (9)
あまり思わない	17.4 (4)	34.4 (62)	27.0 (40)	28.0 (35)
全く思わない	0.0 (0)	7.2 (13)	2.7 (4)	3.2 (4)
合　計	100 (23)	100 (180)	100 (148)	100 (125)
平均値	2.35	2.84	2.66	2.58

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.42 家庭収入別分布（仕事にストレスを感じる）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	23.9 (22)	19.0 (15)	19.0 (27)	16.3 (13)	20.5 (17)
まあそう思う	17.4 (16)	19.0 (15)	28.2 (40)	36.3 (29)	49.4 (41)
どちらとも言えない	19.6 (18)	17.7 (14)	20.4 (29)	13.8 (11)	8.4 (7)
あまり思わない	31.5 (29)	36.7 (29)	28.9 (41)	32.5 (26)	19.3 (16)
全く思わない	7.6 (7)	7.6 (6)	3.5 (5)	1.3 (1)	2.4 (2)
合　計	100 (92)	100 (79)	100 (142)	100 (80)	100 (88)
平均値	2.82	2.95	2.70	2.66	2.34

＊単位：％（度数）

②隣人との関係に満足している

隣人との関係に満足しているでは，年齢，学歴，個人収入に有意差が見られた。

年齢では20歳台において最も満足度が低く，40歳台，50歳台，60歳台の中高年層において満足度が高くなっていた。これは，生活パターンの上で，20歳台よりも40歳台，50歳台，60歳台等の中高年層において隣人との接触が多いことなどを反映しているのであろうか。

学歴では，小・中学校卒において最も満足度が高く，学歴が上がるにつれ満足度が下がる傾向にあった。5-2の都市部では人間関係が希薄になったでは，小・中学校卒において最も同意度が低く学歴が上がるについて同意度が上がっており，これとは逆の傾向を描いていた。

個人収入では30,001元以上の層において最も同意度が低く，次が5,000元以下の層と，両端において同意度が低くなっていた。

表Ⅱ.5.43　年齢層別分布（隣人との関係に満足している）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	14.7 (16)	20.0 (17)	29.7 (58)	23.1 (39)	29.3 (17)
まあそう思う	50.5 (55)	49.4 (42)	48.2 (94)	59.2 (100)	48.3 (28)
どちらとも言えない	27.5 (30)	22.4 (19)	15.9 (31)	10.1 (17)	12.1 (7)
あまり思わない	6.4 (7)	8.2 (7)	5.1 (10)	7.1 (12)	10.3 (6)
全く思わない	0.9 (1)	0.0 (0)	1.0 (2)	0.6 (1)	0.0 (0)
合　　計	100 (109)	100 (85)	100 (195)	100 (169)	100 (57)
平　均　値	2.28	2.19	1.99	2.03	2.03

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.44　学歴別分布（隣人との関係に満足している）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	25.5 (47)	28.7 (66)	19.8 (21)	13.7 (13)
まあそう思う	57.1 (105)	49.1 (113)	50.9 (54)	48.4 (46)
どちらとも言えない	11.4 (21)	13.9 (32)	20.8 (22)	30.5 (29)
あまり思わない	4.9 (9)	7.8 (18)	7.5 (8)	7.4 (7)
全く思わない	1.1 (2)	0.4 (1)	0.9 (1)	0.0 (0)
合　　計	100 (184)	100 (230)	100 (106)	100 (95)
平　均　値	1.99	2.02	2.19	2.32

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.45　個人収入別分布（隣人との関係に満足している）

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
そう思う	25.8 (16)	25.4 (66)	27.9 (46)	15.1 (19)
まあそう思う	38.7 (24)	54.2 (141)	51.5 (85)	52.4 (66)
どちらとも言えない	29.0 (18)	13.5 (35)	13.3 (22)	23.0 (29)
あまり思わない	6.5 (4)	6.2 (16)	7.3 (12)	7.9 (10)
全く思わない	0.0 (0)	0.8 (2)	0.0 (0)	1.6 (2)
合　　計	100 (62)	100 (260)	100 (165)	100 (126)
平　均　値	2.16	2.03	2.00	2.29

＊単位：％（度数）

③夫婦関係に満足している

夫婦関係に満足しているでは，年齢と家庭収入において５％未満の有意確率を得た。

年齢では，30歳台の満足度が最も低く，60歳台の満足度が最も高くなっていた。60歳台において特に満足度が高いことに関しては，高齢層では婚姻そのものが自由意志というよりも制度適応的であり，夫婦関係の結びつきの強さに対する欲求のレベルが低いことなどが従来から指摘されている。

家庭収入では２万元以下の層において，特に満足度が低くなっていた。生活の維持を脅かしたり，支障をきたしたりするレベルで家庭の収入が低い場合，時にはその不満が不和に結びつくこともある。家庭収入２万元以下の層にはこういったケースも含まれて

いるのであろう。

表Ⅱ.5.46　年齢層別分布（夫婦関係に満足している）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	67.9 (19)	55.6 (40)	59.4 (104)	55.7 (88)	79.2 (42)
まあそう思う	21.4 (6)	37.5 (27)	36.0 (63)	41.8 (66)	20.8 (11)
どちらとも言えない	10.7 (3)	1.4 (1)	2.3 (4)	1.3 (2)	0.0 (0)
あまり思わない	0.0 (0)	2.8 (2)	1.1 (2)	1.3 (2)	0.0 (0)
全く思わない	0.0 (0)	2.8 (2)	1.1 (2)	0.0 (0)	0.0 (0)
合　　計	100 (28)	100 (72)	100 (175)	100 (158)	100 (53)
平　均　値	1.43	1.60	1.49	1.48	1.21

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.47　家庭収入別分布（夫婦関係に満足している）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	55.2 (58)	56.3 (58)	65.7 (88)	54.3 (38)	69.0 (49)
まあそう思う	36.2 (38)	40.8 (42)	31.3 (42)	45.7 (32)	26.8 (19)
どちらとも言えない	1.0 (1)	2.9 (3)	3.0 (4)	0.0 (0)	1.4 (1)
あまり思わない	4.8 (5)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.4 (1)
全く思わない	2.9 (3)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.4 (1)
合　　計	100 (105)	100 (103)	100 (134)	100 (70)	100 (71)
平　均　値	1.64	1.47	1.37	1.46	1.39

＊単位：％（度数）

④現在の生活に満足している

現在の生活に満足しているでは，年齢，学歴，個人収入，家庭収入に有意差が見られた。

年齢では，60歳台において最も満足度が高く，次に30歳台，20歳台がほぼ同程度で，その次に50歳台，40歳台がまた同じ程度で階段状に並んだ。学歴では，短大，大学・大学院が同程度で１位，２位に，高校，小・中学校が同程度で３位，４位と，階段状に並んだ。個人収入，家庭収入では，収入が上がるほど満足度が高くなる傾向がはっきり見られた。

年齢に関し，30歳台，20歳台に比べて40歳台，50歳台で満足度が低くなっているのは，高学歴の若年層において収入が高く，学歴において劣る中高年層において収入が抑えられている現状を反映してのことであろう。ただ，60歳台はすでに年金が保証された定年後の生活に入っており，収入に対する不満は少ないのであろう。

学歴においても，短大，大学・大学院と小・中学校，高校という形で階段状に並んだのは，学歴が高い側の層では相対的に収入が高く，学歴が低い側の層では相対的に収入が低いということを反映してのことであろう。

表Ⅱ.5.48　年齢層別分布（現在の生活に満足している）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	31.2 (34)	30.6 (26)	20.0 (39)	20.7 (35)	48.3 (28)
まあそう思う	40.4 (44)	49.4 (42)	43.6 (85)	40.2 (68)	37.9 (22)
どちらとも言えない	17.4 (19)	4.7 (4)	10.3 (20)	17.8 (30)	6.9 (4)
あまり思わない	8.3 (9)	11.8 (10)	17.9 (35)	15.4 (26)	6.9 (4)
全く思わない	2.8 (3)	3.5 (3)	8.2 (16)	5.9 (10)	0.0 (0)
合　　計	100 (109)	100 (85)	100 (195)	100 (169)	100 (58)
平　均　値	2.11	2.08	2.51	2.46	1.72

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.49　学歴別分布（現在の生活に満足している）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	24.5 (45)	23.9 (55)	31.1 (33)	30.5 (29)
まあそう思う	37.0 (68)	40.9 (94)	50.0 (53)	48.4 (46)
どちらとも言えない	13.0 (24)	13.9 (32)	11.3 (12)	9.5 (9)
あまり思わない	19.6 (36)	13.5 (31)	4.7 (5)	11.6 (11)
全く思わない	6.0 (11)	7.8 (18)	2.8 (3)	0.0 (0)
合　　計	100 (184)	100 (230)	100 (106)	100 (95)
平　均　値	2.46	2.40	1.98	2.02

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.50　個人収入別分布（現在の生活に満足している）

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001元～
そう思う	28.6 (18)	21.2 (55)	31.7 (52)	28.6 (36)
まあそう思う	27.0 (17)	38.5 (100)	43.3 (71)	57.1 (72)
どちらとも言えない	9.5 (6)	15.0 (39)	14.6 (24)	6.3 (8)
あまり思わない	19.0 (12)	19.6 (51)	6.7 (11)	7.1 (9)
全く思わない	15.9 (10)	5.8 (15)	3.7 (6)	0.8 (1)
合　　計	100 (63)	100 (260)	100 (164)	100 (126)
平　均　値	2.67	2.50	2.07	1.94

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.51　家庭収入別分布（現在の生活に満足している）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	21.0 (30)	20.0 (24)	28.9 (50)	25.0 (22)	39.3 (35)
まあそう思う	27.3 (39)	45.8 (55)	42.8 (74)	55.7 (49)	48.3 (43)
どちらとも言えない	21.7 (31)	10.8 (13)	11.6 (20)	8.0 (7)	6.7 (6)
あまり思わない	18.9 (27)	17.5 (21)	13.3 (23)	10.2 (9)	3.4 (3)
全く思わない	11.2 (16)	5.8 (7)	3.5 (6)	1.1 (1)	2.2 (2)
合　　計	100 (143)	100 (120)	100 (173)	100 (88)	100 (89)
平　均　値	2.72	2.43	2.20	2.07	1.81

＊単位：％（度数）

⑤これからもっと生活がよくなると思う

これからもっと生活がよくなると思うでは，年齢，学歴，個人収入，家庭収入において５％未満の有意確率を得た。

年齢では，20歳台，30歳台において同意度が高く，60歳台，50歳台，40歳台において低い傾向があった。学歴では大学・大学院，短大において同意度が高く，小・中学校，高校で低い傾向があった。個人収入では5,000元以下と5,001～15,000元の間で逆転があったが，収入が上がるほど同意度が高くなる傾向にあった。家庭収入では50,001~80,000元と80,001元以上との間に逆転があったが，全体に収入が上がるほど同意度が高まる傾向にあった。

将来に対する期待も現在の収入に裏付けられており，若年・高学歴・高収入層では高く，中高年・低学歴・低収入層では低くなるのであろう。なお，個人収入における5,000元以下と5,001～15,000元の間での逆転は若い未就業者によるものと考えられる。また，家庭収入における50,001~80,000元と80,001元以上との間の逆転は，80,001元以上では現在をピークとみなし「どちらともいえない」と答えた人の割合が増えたためであろう。

表Ⅱ.5.52　年齢層別分布（これからもっと生活がよくなると思う）

	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台
そう思う	64.2 (70)	64.7 (55)	48.7 (95)	48.8 (82)	56.9 (33)
まあそう思う	29.4 (32)	21.2 (18)	26.2 (51)	31.0 (52)	19.0 (11)
どちらとも言えない	5.5 (6)	14.1 (12)	19.5 (38)	16.7 (28)	24.1 (14)
あまり思わない	0.0 (0)	0.0 (0)	3.1 (6)	2.4 (4)	0.0 (0)
全く思わない	0.9 (1)	0.0 (0)	2.6 (5)	1.2 (2)	0.0 (0)
合　計	100 (109)	100 (85)	100 (195)	100 (168)	100 (58)
平均値	1.44	1.49	1.85	1.76	1.67

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.53　学歴別分布（これからもっと生活がよくなると思う）

	小・中学校	高　校	短　大	大学以上
そう思う	47.5 (87)	51.7 (119)	61.3 (65)	66.3 (63)
まあそう思う	27.9 (51)	26.5 (61)	30.2 (32)	21.1 (20)
どちらとも言えない	21.9 (40)	17.4 (40)	5.7 (6)	12.6 (12)
あまり思わない	2.7 (5)	1.7 (4)	0.9 (1)	0.0 (0)
全く思わない	0.0 (0)	2.6 (6)	1.9 (2)	0.0 (0)
合　計	100 (183)	100 (230)	100 (106)	100 (95)
平均値	1.80	1.77	1.52	1.46

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.54　個人収入別分布（これからもっと生活がよくなると思う）

	～5,000元	5,001～15,000元	15,001～30,000元	30,001～
そう思う	58.1 (36)	48.1 (125)	54.3 (89)	65.9 (83)
まあそう思う	19.4 (12)	28.1 (73)	27.4 (45)	26.2 (33)
どちらとも言えない	14.5 (9)	20.8 (54)	15.2 (25)	7.9 (10)
あまり思わない	4.8 (3)	1.9 (5)	1.2 (2)	0.0 (0)
全く思わない	3.2 (2)	1.2 (3)	1.8 (3)	0.0 (0)
合　計	100 (62)	100 (260)	100 (164)	100 (126)
平均値	1.76	1.80	1.54	1.42

＊単位：％（度数）

表Ⅱ.5.55　家庭収入別分布（これからもっと生活がよくなると思う）

	20,000元以下	20,001～30,000元	30,001～50,000元	50,001～80,000元	80,001元以上
そう思う	47.2 (67)	46.7 (56)	50.3 (87)	70.5 (62)	68.5 (61)
まあそう思う	21.1 (30)	30.8 (37)	31.8 (55)	23.9 (21)	22.5 (20)
どちらとも言えない	26.8 (38)	16.7 (20)	15.6 (27)	5.7 (5)	9.0 (8)
あまり思わない	2.8 (4)	4.2 (5)	0.6 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)
全く思わない	2.1 (3)	1.7 (2)	1.7 (3)	0.0 (0)	0.0 (0)
合　計	100 (142)	100 (120)	100 (173)	100 (88)	100 (89)
平均値	1.92	1.83	1.72	1.35	1.40

＊単位：％（度数）

6．まとめ

6-1　各節における傾向の要約

（1）昨年の旅行状況

ここでは昨年1年間の旅行回数と行き先を尋ねた。

結果は，昨年1年間にサンプル全体の62.1％の人が旅行に出かけており，全体の平均回数は1.47回であった。実際の行き先は浙江省，江蘇省など近隣に集中しているが，27.3％の人が遠方への旅行を行っていた。その行き先としては，北京，海南島などが比較的多くあげられた。また，この1年間に海外を訪れた人は全体の8％あった。

なお，30歳台，高学歴，高所得者層では旅行へ出かける割合が高く，その頻度も多くなっていた。

（2）現状における観光旅行の実態

ここでは現状における観光旅行の実態を把握するために，前回行った旅行の具体的内容について回答を求めた。

前回行った旅行では観光・レジャー目的が79.7％を占めていた。これは2002年の上海

市民の旅行目的における観光・レジャーの割合73.5%をやや上回るものであり，また全国平均は59.4%を大きく上回るものである。この数値から，上海市民の旅行・レジャーに出かける割合は実際に，中国全体の中で非常に高いレベルにあることが確認できた。

旅行の形では，職場や地域で組織された団体旅行よりも，個人旅行が多くなっていた。そのため費用負担も公費負担よりも，個人負担が多くなっていた。このことから，観光・レジャーに出かけることが，企業や公的機関の福利厚生や福祉政策の一環であることを越え，個人の余暇の過ごし方としてある程度定着してきていることが理解できる。

旅行の行き先では，浙江省，江蘇省など，やはり近隣に集中していた。距離や費用の問題を考慮すると近隣へ旅行する機会が増えるのは当然の結果である。しかしながら，26.4%の人が北京や海南島など，遠方への旅行を行っていた。また，海外旅行は全体の6.6%が行っていた。

なお，自家用車での旅行が4%あり，中国においてもマイカーによる旅行が現れてきていることが見て取れた。

（3）現在の旅行観

ここでは中国国内旅行においてこれから行きたい場所，行いたい観光，海外で行ってみたい国・地域および日本に関する印象，観光旅行に求めること，また中国国内観光において今後充実させるべきことについて尋ねた。

中国国内において，これから旅行に行きたい地域は1位海南省，2位北京市，3位雲南省，4位四川省の順となった。希望する観光内容は，1位「海南島，青島，大連など海辺のリゾート」，2位「張家界，九塞溝など自然風景区」，3位「敦煌，兵馬俑，故宮など歴史名勝地」，4位「桂林，長江三峡，黄山など風景名勝地」，5位「麗江，怒江など少数民族観光区」の順となった。両者の回答を総合すると，現在上海人が憧れる観光は，海南島のリゾート，雲南省，四川省などを訪れ自然風景区や少数民族地区の観光を行うこと，北京を訪れ歴史遺産の観光を行うこと等であると推測できる。

希望する観光内容の属性による傾向では，女性は「自然風景区」「風景名勝地」など自然景観の美しさを好む傾向が，男性は「歴史名勝地」「革命記念地」「園林観光」など歴史的なものや文化的造形を好む傾向が見られた。20歳台では，西南辺境地域に対する憧れが強い一方で，近隣の伝統的なものに関する関心が薄い傾向が見られた。40歳台では「革命記念地観光」の，40歳台，50歳台では「最先端スポット観光」の評価が他に比べ高かった。60歳台では「仏教聖地観光」の評価が高かった。また，「少数民族観光」は高学歴層ほど評価が高く，「仏教聖地観光」は学歴が低い層ほど評価が高かった。さらに「少数民族観光」は高収入層において評価が高かった。

海外旅行先では，1位香港，2位シンガポールと，漢民族が多く居住し，生活習慣や言語に違和感のない地域の人気が高かった。また，日本は4位となっており，「東京・

大阪など現代の中心的な都市」,「富士山，日光など名所旧跡」,「北海道，沖縄，長野など美しい自然があるところ」,「東京ディズニーランド，ＵＳＪなど有名なテーマパーク」の順で行ってみたい場所があげられた。日本について思い浮かべるものは富士山，日本鬼子・侵略者，桜が上位３位までを占めた。また，順位には年齢によって変動があり，20歳台ではアニメ・マンガが５位に，40歳台，50歳台ではテレビ・ビデオ・カメラが３位に入った。なお，温泉は安定して比較的上位につけており，富士山，侵略者，桜に次ぐ日本イメージとして認知されていることがわかった。一方，茶道・華道，柔道・剣道など日本の伝統文化の認知度は低かった。

現在，観光旅行には，全般に当てはまる要素ではリラックスできることが，個別の観光対象に求められる要素としては大自然に触れることが求められている。また，中国国内旅行において充実させるべきことでは,「自然環境保護」が最も求められていた。これは特に若年層，高学歴層において顕著であった。一方，中高年層，低学歴層では，安価で安心できる旅行への要請が高かった。高齢層ではバリアフリーの推進に対する要請が高かった。

（４）日常のレジャー・レクリエーション

ここでは，日常のレジャー・レクリエーションおよび楽しみや贅沢としての消費活動として,「花を買う」「家族で食事に行く」「友人，同僚と食事に行く」「映画，観劇などに行く」「個人消費のためのショッピングに行く」「カラオケ，バーなどに行く」「郊外の緑地，公園などに行く」「エステ，サウナ，マッサージなどに行く」「ボウリング，テニス，ゴルフなどをする」「フィットネスクラブで運動をする」の10の設問を用意し，それぞれについての頻度を尋ねた。

まず,「する」「しない」の割合でこれらの項目を比較するると，友人や家族との外食，ショッピングは日常生活において広く行われているが，ボウリング・テニス･ゴルフなどのスポーツはまだそれほど普及していないことが見て取れた。

属性分析では，全体に若年層・高学歴層・高収入層と，中高年層・低学歴層・低収入層との間に大きな傾向の違いが見られた。若年・高学歴・高収入の層はすべてにおいて「する」とした割合も頻度も高くなっていた。特に外食や買い物の頻度は高く，特別な機会ではなく，日常の一部と位置づけられていた。また，同じ若年・高学歴・高収入に顕著な傾向ではあっても，バー・カラオケへ行くでは年齢と，サウナ・エステは個人収入と，フィットネスクラブは学歴との関連が高かった。一方，中高年・低学歴・低収入層は全体に「する」の割合が低く，非常に慎ましい日常を送っていることが見て取れた。

以上のようなライフスタイルの二極分化が非常に明瞭であった。

なお，性別では全体に男性が女性よりもよく外出，消費していた。しかし，花を買う，サウナ・エステ，およびフィットネスクラブでは有意差がなかった。これは，この３つ

の項目が男性に劣らず女性にもよく行われているものであることを示しているのであろう。

（5）価値観および生活満足度

①旅行および余暇に対する考え方

ここでは，「旅行は見識を豊かにする」「家族で外出することは家庭内の関係にプラスになる」「趣味を持つことは日常生活を充実させる」「日常生活ではたまに旅行に出かけるなど，リラックスの時間が必要である」「花を買い飾ることは心を豊かにする」の5つの設問に対し，5段階評価で回答を求めた。これら5つの設問に対する同意度は全体に高く，旅行やレジャー，日常生活の潤いとなるような消費が肯定的に捉えられていることが理解できた。

また，「家族で外出することは家庭内の関係にプラスになる」は家庭収入が低い層において同意度が低くなった。「日常生活ではたまに旅行に出かけるなど，リラックスの時間が必要である」は学歴が高いほど，家庭収入が高いほど同意度が高い傾向にあった。「旅行は見識を豊かにする」では，年齢では60歳台，収入では最も高い層においてやや同意度が特に高くなっていた。「花を買い飾ることは心を豊かにする」では，男性よりも女性において同意度が高く，また年齢では20歳台の同意度が低くなっていた。

②現代化，都市化に対する価値観

ここでは11の設問を設定し，それぞれについて5段階評価で回答を求めた。

最も同意度が高かった項目は「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた」であり，以下「高層ビルに圧迫感を感じる」「石庫門など地方独特の建築が少なくなるのは残念だ」と続いた。逆に最も同意度が低かった項目は「都市生活の変化についていけない」であり，「農民は素直で朴訥だと思う」「経済発展と同時に誠信，孝行など伝統的観念が薄れてきた」と続いた。

全体として，「高層ビルに圧迫感を感じる」「石庫門など地方独特の建築が少なくなるのは残念だ」に対する同意度は比較的高く，このようなの形で現代における都市環境の変化を感じ取っていることがわかる。その一方で，「都市生活の変化についていけない」に対する同意度は低かった。生活の変化に伴う価値観の変化に関する印象は「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた」「都市部では人間関係が希薄になった」「経済発展と同時に誠信，孝行などの伝統的観念が薄れてきた」の順に同意度は下がった。親子関係，隣人関係など人間関係に対する考え方や実態の変化よりも，消費に対する考え方や実態の変化の方を，より感じている人が多いことがわかる。

また，属性分析全体を通した傾向をまとめると，以下のような傾向が見られた。「現代人は努力，倹約などの精神が薄れてきた」「都市部では人間関係が希薄になった」「経

済発展と同時に誠信，孝道などの伝統的観念が薄れてきた」「都市生活の変化についていけない」の４つの項目では高齢・低学歴・低収入層ほど同意度が高い傾向が見られた。「都市の生活はストレスが強い」は30歳台，20歳台の若年層で同意度が高くなった。「都市の自然環境は良くない」は20歳台において最も同意度が高く，50歳台において最も同意度が高くなた。また，「農民は素朴で素直だと思う」は年齢では40歳台，50歳台において，学歴では高卒で同意度が低くなった。「農村や古鎮の生活に懐かしさを感じる」は低学歴層において同意度が高かった。

③日常生活に関する価値観

ここでは二択式の設問として「お金よりも自由にできる時間を大切にしたい／時間よりも一層収入を増やしたい」「もし仕事と家庭の行事がかさなったなら，仕事を重視する／もし仕事と家庭の行事が重なったなら，家庭を重視する」「もし金銭に余裕があるなら，資格取得や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」の４つを設定した。

「お金よりも自由にできる時間を大切にしたい／時間よりも一層収入を増やしたい」「もし仕事と家庭の行事が重なったら，仕事を重視する／もし仕事と家庭の行事が重なったら，家庭を重視する」の２つの設問では，前者・後者ともその割合は50％前後であり，意見が拮抗している様子がわかった。「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新しい技術を学ぶ方がいい」では，やや「新しい技術」を選択する人が多かった。もし金銭に余裕があるなら，資格取得や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」では，「趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」という人が約７割であり，全体として生活の充実を求める傾向が強くなっていた。

また，「お金よりも自由にできる時間を大切にしたい／時間よりも一層収入を増やしたい」では，年齢では30歳台，40歳台において，学歴では高卒において「時間よりも収入を増やしたい」と考える人の割合が高くなった。「もし仕事と家庭の行事がかさなったなら，仕事を重視する／もし仕事と家庭の行事が重なったなら，家庭を重視する」では，性別では女性よりも男性に仕事を重視する割合が高く，学歴・収入が高いほど仕事を重視する割合が高くなった。「もし金銭に余裕があるなら，資格取得や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」では，若年・高学歴層において「資格取得や技術習得」を重視する傾向が見られた。「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」では，男性，若年層，高学歴，高収入の人に「新技術」を選択する傾向が強く，女性，高齢層，低学歴，低収入の人に「伝統文化」を選択する傾向が

強く現れた。

④生活満足度

ここでは，「仕事にストレスを感じる」「隣人との関係に満足している」「同僚との関係に満足している」「夫婦関係に満足している」「親子関係に満足している」「現在の生活に満足している」「これからもっと生活が良くなると思う」の７つの設問に対して5段階評価で回答を求めた。

同意度の高い順に，「親子関係に満足している」「夫婦関係に満足している」「これからもっと生活がよくなると思う」「同僚との関係に満足している」「隣人との関係に満足している」「現在の生活に満足している」「仕事にストレスを感じる」の順となった。すなわち，「親子関係」「夫婦関係」といった家庭内の関係に対する満足度は非常に高く，「同僚との関係」「隣人との関係」はそれよりも低かった。また，「現在の生活」に対する満足度はそれほど高くないが，「これからの生活」に対する期待度は高かった。「仕事」はストレスを感じるという割合が中では最も高く，最も満足度が低い項目であった。

属性分析では以下のような傾向が見られた。

「仕事にストレスを感じる」では，個人収入が最も低い5,000元以下の層において最も同意度が高かった。これを除くと，収入が上がるにつれて同意度が高まる傾向にあった。学歴では，短大・専門学校卒において最も同意度が高くなった。「隣人との関係に満足している」では，中高年・低学歴・低収入層において満足度が高く，若年・高学歴・高収入層において低い傾向があった。「夫婦関係に満足している」では，特に家庭収入の低い層において満足度が低くなっていた。「現在の生活に満足している」は60歳台の満足度が最も高く，それを除くと若年層の方が中年層よりも満足度が高い傾向にあった。また，収入，学歴ではともに高いほど満足度が高い傾向にあった。「これからもっと生活がよくなると思う」では，若年・高学歴・高収入において期待度が高く，中高年・低学歴・低収入において低い傾向が見られた。

6-2　二極分化構造

（1）二極分化する社会

本調査全体を通して，被調査者の間における二極分化構造が指摘できる。

すなわち，属性分布として若年層に高学歴，高収入者が多く，中高年層に低学歴，低収入者が多いことを示したが，日常のレジャー・レクリエーション，価値観および生活満足度においても，若年・高学歴・高収入層と，中高年・低学歴・低収入層の間で二分化傾向を描く設問が多くあった。これは，若年・高学歴・高収入層と，中高年・低学歴・低収入層との間において，日常生活におけるライフスタイルや，そのひとつひとつの行動を支える価値観が大きく乖離していることを示している。

日常のレジャー・レクリエーションに関する10の設問と，生活満足度に関する２つの設問，「現在の生活に満足している」「これからの生活はもっと良くなると思う」には，この二つの層の現状がよく現れている。

すなわち，日常のレジャー・レクリエーションで用意した10の設問の全てにおいて，若年・高学歴・高収入の層ほど，それらを行う頻度は高く，高齢・低学歴・低収入層ほどその頻度が低くなっていた。これらの設問の結果は，若年・高学歴・高収入層ほどアクティブにレジャーや娯楽活動を送っており，一方高齢・低学歴・低収入ほど質素でおとなしい生活を送っていることが浮かび上がらせている。これは同時に，若年・高学歴・高収入層が現代上海の都市生活を謳歌する様を示すものである。

また，生活満足度に関する２つの設問，「現在の生活に満足している」「これからの生活はもっと良くなると思う」では，年金が保障されている定年退職後の60歳以上を除くと，ともに若年・高学歴・高収入層ほど高い満足度となっていた。若年層・高学歴層は高い収入を得ており，それが現在の満足につながるとともに，これからの生活にも高い期待を寄せる人が多いことが理解できる。一方，中高年層・低学歴層は収入が低いことが現在の生活に対する満足度の低さにつながるとともに，これからの生活に対する期待もそれほど高くない。二極分化した二つの層の気分は，このような形で読みとることができる。

以上のような現状はもちろん近年の急激な産業化，情報化が高度に教育を受けた人材を要請し，それが現在の若い層の収入を引き上げたことの反映であり，今後は教育レベルによる社会階層の分化と再生産という構造に移行していくことが考えられる。しかしながら，この二極分化構造は，産業化，情報化によってもたらされた現代の社会変動の一つの姿を示すものであろう。

なお，(2)，(3) において，二極化したそれぞれの層の気分について，もう少し詳細に論じておく。

（２）「取り残される者」とノスタルジー

価値観に関する項目においても，若年・高学歴・高収入層と中高年・低学歴・低収入層との二極分化傾向が見られる。

その中でも「現代人は努力・倹約などの精神が薄れてきた」「都市部では人間関係が希薄になった」「経済発展と同時に，誠信，孝道などの伝統的観念が薄れてきた」など価値規範の変化に対する印象を尋ねた項目について，中高年，低学歴，低収入層ほど同意の度合いが高く，過去の価値規範をなつかしむ傾向にあった。同様に，日常生活における志向を尋ねた二択式の設問「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」においても，中高年・低学歴・低収入層ほど，「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい」という伝統志向

を示した。さらに，都市環境の変化に対する印象を尋ねた設問である「農村や古鎮の生活に懐かしさを感じる」では，特に低学歴層において同意度が高くなっていた。

また，現代の上海の都市生活に対して取り残され感があるかどうかを尋ねた「都市生活の変化についていけない」では，中高年・低学歴・低収入層ほど同意度が高くなっていた。

以上から，秩序観，環境，文化を含め伝統的なものにノルタルジーを感じる層と取り残され観を持つ層は同様の傾向にあった。しかし，さすがにはっきりと「取り残され感」を表明する人の割合は多くなく，ノスタルジーを感じる層と大きく重なるわけではない。むしろ軽微な「取り残され感」，すなわち「もはや時代の本流ではない」というような感覚が，過去に対する郷愁や伝統に対する志向として現れるのであろう。

（3）「都市生活の憂鬱」と自然への憧れ

ここでは若年・高学歴・高収入層において見られた傾向を示しておく。

都市化に対する印象を尋ねた設問のうち「都市の生活はストレスが強い」では，30歳台の同意度が最も高く，次が20歳台であった。また，日常生活の志向を尋ねた設問の一つである「もし金銭に余裕があるなら，資格や技術習得のために勉強したい／もし金銭に余裕があるなら，趣味や休暇を楽しみ生活を充実させたい」では，若年・高学歴・高収入層ほど「資格や技術習得のために勉強したい」とする割合が高かった。同様に，「歴史や中医，琴棋詩画など伝統文化を学ぶ方がいい／パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」では，若年・高学歴・高収入層ほど「パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」とする割合が高かった。

実際，若年・高学歴・高収入層は，常時新たな情報を得たり，新たな技術を身に付けたりしていかなければ一線からは外されていくよう仕事の中に身をおいたり，それを身近に感じたりする機会が多いであろう。こういった経験は，上に示した「資格や技術習得のために勉強したい」「パソコンや語学，車の運転など新技術を学ぶ方がいい」という日常生活の志向につながるとともに，「都市の生活はストレスが強い」というイメージをも生み出すのであろう。

なお，実際に「仕事にストレスを感じる」かどうかでは，学歴，個人収入，家庭収入において有意差が見られたが，明瞭な二極分化傾向は見られなかった。これは，仕事におけるストレスの質として，収入の少ない層における徒労感など，多様なケースを含むためと考えられる。

若年・高学歴層のもう一つの傾向として，自然に対する関心があげられる。

都市化に対する印象を尋ねた設問のうち「都市の自然環境はよくない」では，ちょうど「上山下郷」を経験した年代にあたる50歳台の同意度が特に低くなっていた。これを除くと，20歳台，30歳台は40歳台，60歳台よりも同意度が高くなっていた。また，今後

の国内観光の課題として「自然環境保護」をあげた人の割合は，若年層，高学歴層ほど高くなっていた。

以上から，「自然」なものに対する志向や憧れ，「癒し」などが生まれる土壌として，高度な都市化や産業化によって生み出された気分のようなものを指摘することができるであろう。付け加えるならば，日常のレジャー・レクリエーションにおける「エステ・サウナ・マッサージなどへ行く」ことも，都市生活における「癒し」的行為としてあげられるであろう。

また，ここで「気分」という語を用いたのは，現状において若年・高学歴・高収入層はむしろ生活満足度の高い成功者が多く，非人間的労働による「疎外」というような解釈をあてはめにくいためである。実際，中国の現状においては，大自然を売り物にした観光地や，スパやエステのような癒しのための施設を利用することはまだ新しく，高価なものである。都市生活のストレスを憂い，「自然」や「癒し」を求めることは新しい優雅な社会層の気分として生まれつつあるものであり，そのステイタスを示す顕示的行為の役割も果たしているのであろう。

おわりに

本調査の最終的な目的は，属性とそれぞれの価値観による観光地・観光行動の選好性の細分析を行い，観光に対するまなざしの生成を実証的に示すことある。中国の観光は，今まさに出かける側のまなざしが生成されつつあるとともに，受け入れる側も急速にそれに応じた形を整えつつある。実際，調査に出かけるたびに，至る所で何らかの変化を見て取れるほど，大きく動いている。この意味で，現在のダイナミズムを整理し記述することが，狭義の観光研究のみならず，観光という現象を通しての社会変動・文化変化の研究に寄与することを信じている。

とはいえ，本稿は最終目的には程遠く，まず調査結果のアウトラインを示したのみである。それも，未整理の項目も多く，完全版というよりも速報版といった方が良い段階である。今後，本調査に先立って行ったインタビュー調査を含め，逐次データを整理し，分析を充実させていきたいと考えている。

本調査の実施を快く引き受けてくれた上海社会科学院社会学研究所の徐安琪教授および調査員の方々，回答者の方々に心から謝意を表したい。

注

(1) http://www.czlib.net/tesezhuanti/cankaoxinxi/juececankao/200503040210.htm参照。

(2) http://finance.qianlong.com/26/2004/08/27/180@2244743.html参照。

(3)　http://info.news.hc360.com/html/001/002/003/013/64372.htm参照。

参考文献

東　美晴　2005「中国における山岳観光の変容―上海市民の観光・レジャーを通して」『流通経済大学　社会学部論叢』第15巻第２号

何光昧編　2003『中国旅遊統計年鑑』中華人民共和国国家旅遊局